

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第198集

下新田遺跡

2015

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第198集

しも しん でん い せき
下新田遺跡

2015

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

目次

終了

序

下新田遺跡の所在する愛知県岩倉市は、明治 39（1906）年に岩倉町・幼村・豊秋村・島野村の一町三村が合併してできた岩倉町から発展してきた都市であります。愛知県内では最も市域が小さい都市ではありますが、現在も残る五条川におけるのんびり洗いや山車などの伝統文化と現代の産業・文化が、一世紀以上にわたる時間とともに折り重なってきた地域であります。

この度報告いたします下新田遺跡は、岩倉市の北部を東西に横断する名神高速道路に、南北にほぼ直交するかたちで、岩倉市の西側を縦断する県道名古屋・江南線の拡幅整備事業にともない、平成 21 年度に発掘調査を行なった遺跡です。発掘調査では、県道の道路敷きの両側を細長く設定した調査区にも関わらず、古代の竪穴住居、掘立柱建物からなる集落、そして鎌倉時代から戦国時代にいたる井戸、土坑、溝などからなる屋敷などが確認されました。本書はこの調査成果をまとめたものであり、歴史研究の資料として広く活用され、埋蔵文化財に関する御理解を深める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々をはじめ、関係者及び関係諸機関の御理解と御協力を頂きましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成 27 年 3 月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 伊 藤 克 博

例 言

1. 本書は愛知県岩倉市鈴井町に所在する下新田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、緊急地方道路整備事業（主）名古屋江南線建設に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成 21 年 10 月から平成 22 年 2 月で、調査面積は 2,100㎡である。整理および報告書作成作業は平成 25 年 4 月から平成 26 年 3 月にかけて実施した。
4. 調査担当者は、樋上 昇（本センター調査研究専門員）・蔭山誠一（本センター調査研究専門員）・榊原清人（元本センター調査研究主事・現半田市立乙川東小学校）である。発掘調査では株式会社アーキジオの支援を受けて実施した。
5. 調査にあたっては、愛知県建設部道路建設課一宮建設事務所、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、岩倉市教育委員会をはじめとする、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本書の執筆は蔭山と鬼頭 剛が行い、編集は蔭山が担当した。
7. 整理作業は蔭山が担当した。整理作業は阿部裕恵・木下由貴子（整理補助員）の協力を得て実施した。また、出土遺物の写真撮影を写真工房遊（金子知久）に委託して実施した。
8. 本書に提示した座標数値は、国土交通省に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
9. 遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。
10. 写真や図面等の調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4161）
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4164）
12. 本書の作成に至るまでに、本センター専門委員・職員をはじめとして下記の方々から多くのご指導とご助言を受けている。記して感謝したい。（五十音順：敬称略）
井手上豊彦、伊藤善博、黒田忠弘、菅原忠男、服部兼次、半田和美、余合昭彦

目 次

第1章 前 言

第1節 調査の経緯と方法…………… 1

第2節 下新田遺跡の地理・歴史的環境…………… 5

第2章 遺 構

第1節 基本層序…………… 11

第2節 各調査区の概要…………… 13

遺構図版…………… 26

第3章 出 土 遺 物

第1節 遺物整理の方法…………… 48

第2節 各調査区の出土遺物…………… 48

遺物図版…………… 63

第4章 下新田遺跡の試錐調査による地下層序

第1節 はじめに…………… 76

第2節 試料および分析方法…………… 76

第3節 分析結果…………… 76

第4節 考察…………… 79

第5章 総 括

第1節 遺構の変遷…………… 81

第2節 遺物の出土状況…………… 85

第3節 遺構と出土遺物の関係…………… 92

第4節 戦国時代の景観…………… 93

写真図版

遺 構：写真図版 1 ～写真図版 10

出土遺物：写真図版 11 ～写真図版 18

抄 録

挿 図 目 次

第 1 図	下新田遺跡位置図	1	第 32 図	09Ed 区個別遺構断面図 2(1:100)	47
第 2 図	調査区位置図 (1:2,500)	2	第 33 図	09Aa 区～ 09Ac 区出土遺物 (1:4)	63
第 3 図	発掘調査の工程	2	第 34 図	09B 区出土遺物 (1:4)	64
第 4 図	下新田遺跡の立地	4	第 35 図	09B 区・09C 区出土遺物 (1:4)	65
第 5 図	下新田遺跡周辺の 弥生時代・古墳時代の遺跡	6	第 36 図	09C 区・09Da 区出土遺物 (1:4)	66
第 6 図	下新田遺跡周辺の古代・中世の遺跡	8	第 37 図	09Da 区出土遺物 1 (1:4)	67
第 7 図	下新田遺跡基本土層図	12	第 38 図	09Da 区出土遺物 2 (1:4)	68
第 8 図	09Aa 区上面遺構図 (1:200)、個別遺構 断面図 (1:100)	26	第 39 図	09Da 区出土遺物 3 (1:4)	69
第 9 図	09Aa 区遺構図 (1:200)	27	第 40 図	09Da 区出土遺物 4 (1:4)	70
第 10 図	09Ab 区遺構図 (1:200)、 個別遺構断面図 (1:100)	28	第 41 図	09Da 区・09Db 区出土遺物 (1:4)	71
第 11 図	09Ac 区上面遺構図 1(1:200)、 個別遺構断面図 (1:100)	29	第 42 図	09Db 区・09Dc 区出土遺物 (1:4)	72
第 12 図	09Ac 区遺構図 (1:200)	29	第 43 図	09Dc 区出土遺物 (1:4)	73
第 13 図	09B 区上面遺構図 (1:200)	30	第 44 図	09Dc 区・09Ea 区・09Eb 区出土遺物 (1:4)	74
第 14 図	09B 区個別遺構断面図 (1:100)	30	第 45 図	09Ed 区出土遺物 (1:4)	75
第 15 図	09B 区遺構図 (1:200)	31	第 46 図	下新田遺跡におけるボーリング掘削地点	77
第 16 図	09C 区上面遺構図 (1:200)	32	第 47 図	下新田遺跡、ボーリング地点 1 における 地質柱状図	78
第 17 図	09C 区遺構図 1(1:200)	33	第 48 図	下新田遺跡、ボーリング地点 2 における 地質柱状図	78
第 18 図	09C 区遺構図 2(1:200)	34	第 49 図	古代の遺構 (1:1,000)	82
第 19 図	09Da 区北端部上面遺構図 (1:200)	34	第 50 図	中世の遺構 (1:1,000)	82
第 20 図	09Da 区北側遺構図 (1:200)	35	第 51 図	戦国時代の遺構 (1:1,000)	84
第 21 図	09Da 区遺構断面図 (1:200) ・個別遺構断面図 1(1:100)	36	第 52 図	江戸時代の遺構 (1:1,000)	84
第 22 図	09Da 区個別遺構断面図 2(1:100)	37	第 53 図	須恵器の出土分布 (1:1,000)	85
第 23 図	09Da 区北側下面遺構図 (1:200)、 個別遺構断面図 3 (1:100)	38	第 54 図	古代土師器の出土分布 (1:1,000)	86
第 24 図	09Da 区個別遺構断面図 4 (1:100)	39	第 55 図	灰釉陶器の出土分布 (1:1,000)	86
第 25 図	09Da 区南側・09Db 区遺構図 (1:200)	40	第 56 図	南部系陶器の出土分布 (1:1,000)	87
第 26 図	09Da 区南端部下面遺構図 (1:200)	41	第 57 図	北部系陶器の出土分布 (1:1,000)	88
第 27 図	09Db 区上面遺構図 (1:200)	42	第 58 図	中世土師器皿類の出土分布 (1:1,000)	88
第 28 図	09Dc 北区上面遺構図 (1:200)	43	第 59 図	中世土師器鍋類の出土分布 (1:1,000)	89
第 29 図	09Dc 区遺構図 (1:200)	44	第 60 図	古瀬戸陶器の出土分布 (1:1,000)	90
第 30 図	09Ea 区～ 09Ec 区遺構図 (1:200)	45	第 61 図	大窯陶器の出土分布 (1:1,000)	90
第 31 図	09Ed 区遺構図 (1:200) ・個別遺構断面図 1 (1:100)	46	第 62 図	常滑産甕の出土分布 (1:1,000)	91
			第 63 図	近世陶磁器の出土分布 (1:1,000)	91
			第 64 図	下新田遺跡周辺の等高線図・地籍図 (1:20,000)	94

第1章 前 言

第1節 調査の経緯と方法(第1図～第4図)

下新田遺跡は愛知県岩倉市鈴井町に所在する遺跡で(図1)、名古屋鉄道犬山線岩倉駅より北西1.25kmの地点に位置する。本遺跡は埋蔵文化財包蔵地一覧に下新田遺跡(県遺跡番号773019)として周知の遺跡として知られており、愛知県建設部道路建設課による緊急地方道路整備事業(主)名古屋江南線建設に伴い、遺跡の事前調査をする必要性が認められた。そこで事業に先立って発掘調査が計画され、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが平成21年10月から平成22年2月の期間で、発掘調査を実施した。

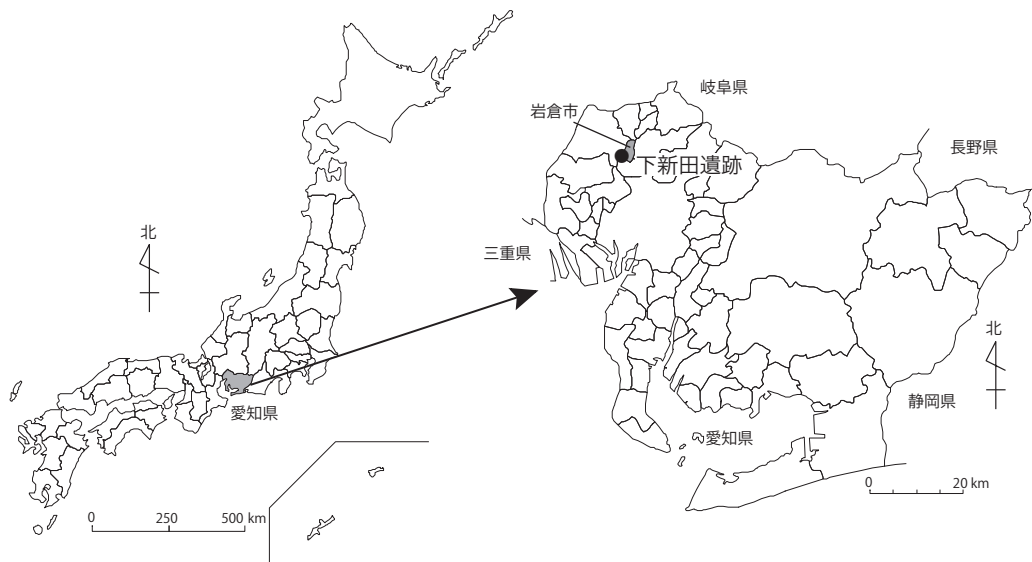
調査面積は2,100㎡で、調査地点は県道名古屋・江南線の路線内にかかる県道を挟んで東側に09A区・09B区・09C区、西側に09D区・09E区を設定し、さらに発掘調査に伴う排土の置き場や機械などの通路の確保する為、09A区を北側から09Aa区～09Ac区、09D区を09Da区～09Dc区、09E区を09Ea区～09Ed区とし、合計12ヶ所の調査区を設定した(第2図)。また09B区は北側と南側に分けて調査を実施した。

発掘調査の工程は、09Aa区を平成21年10月1日～同年10月22日に、09Ab区を平成22年1月26日

～同年2月18日に、09Ac区を平成21年12月10日～同年12月16日に、09B区北側を平成21年10月5日～同年11月12日に、09B区南側を平成21年11月30日～同年12月9日に、09C区を平成21年11月24日～同年12月9日に行い、09Da区を平成21年10月10日～同年12月25日に、09Db区を平成22年1月14日～同年1月29日に、09Dc区を平成21年10月28日～同年11月10日に、09Ea区を平成22年1月6日～同年1月8日に、09Eb区を平成22年1月15日～同年1月19日に09Ec区を平成22年1月25日～同年1月29日に、09Ed区を平成22年2月1日～同年2月12日である。発掘調査の終了後、平成25年度に出土遺物の整理作業と報告書作成を行った。

調査方法は表土となる腐植土層と耕作土、その影響を受けたと思われる堆積をバックホウにより除去した後、人力による遺構検出、遺構検出状況の写真撮影、人力による遺構掘削、遺構の完掘状況の写真撮影、遺構の測量と観察などを行なった。

遺跡の地元説明会は、発掘調査現場が車などの往来が多い県道に沿った場所であったため、実施できなかったが、地元の鈴井町を対象に遺跡の発掘調査速報『下新田遺跡発掘調査通信』を発掘調査の進捗に応じて3回発行した(第1号を平成21年11月20日、第2号



第1図 下新田遺跡位置図



第2図 調査区位置図 (1:2,500)

調査区	2009年 10月	11月	12月	2010年 1月	2月
09A区	Aa区		Ac区		Ab区
09B区	B区北側		B区南側		
09C区			C区		
09D区	Da区	Dc区			Db区
09E区				Ea区	Eb区 Ec区 Ed区

第3図 発掘調査の工程

第1章 前 言



発掘1 表土掘削 (09B区北側、北より)



発掘2 遺構掘削 (09B区北側、南西より)



発掘3 写真撮影 (09Aa区、北より)



発掘4 遺構の測量 (09Ed区、北より)



整理1 遺物の実測



整理2 遺物の観察



整理3 遺物データの入力作業



整理4 遺物の写真撮影



第4図 下新田遺跡の立地

を平成22年1月8日、第3号を平成22年2月26日に発行)。

第2節 下新田遺跡の地理・歴史的環境

下新田遺跡(第4図、以下遺跡番号を付す)の所在する愛知県岩倉市は、濃尾平野を流れる木曽川の左岸にあり、木曽川により形成された沖積平野の扇状地帯から氾濫原地帯にあり、下新田遺跡は岩倉市南西部の氾濫原地帯に位置する。さらに木曽川左岸になる尾張地域では、かつての木曽川支流である数多くの小河川が流下し自然堤防と後背湿地を形成しており、現在は本遺跡の北西を青木川が、南東を五条川が北東から南西へ蛇行しながら流れている。

下新田遺跡(1)周辺の歴史的環境を考えるために、愛知県江南市、丹羽郡扶桑町、丹羽郡大口町、小牧市西部、一宮市南東部、北名古屋市、西春日井郡豊山町の範囲について、弥生時代と古墳時代の遺跡分布図(第5図)と奈良時代～平安時代の古代と鎌倉時代～戦国時代の中世の遺跡分布図(第6図)を作成した。

弥生時代の遺跡は大きく4つの分布するエリアを捉えることができる。一つは青木川の西にある江南市江森から大口町余野にかけての地区付近を中心に分布する一群(弥生A群)、二つ目は下新田遺跡も含まれるもので、一宮市丹陽町天摩から岩倉市大地町や小牧市藤島町を経て、師勝町熊之庄にいたる地区付近を中心に分布する一群(弥生B群)などに分かれる。この中で弥生A群の遺跡では、大口町小口にある東樋田遺跡(186)や中五反田遺跡(197)、向江遺跡(177)で弥生時代中期から後期の弥生土器とともに打製石鏃・磨製石鏃等の石器が出土しており、向江遺跡では発掘調査が行われ、隅丸方形の竪穴住居が2棟確認されている。その他には大口町余野にある清水遺跡(168)では弥生時代後期から古墳時代初頭の土器とともに、竪穴住居が6棟が調査されており、大口町下小口にある仁所野遺跡(150)もこの時期の遺跡として知られている。弥生B群の遺跡では、多くの調査がなされており、出土した遺物の研究も多い。これらを列記していくと、弥生時代前期の岩倉市の川井ノンベ遺跡(50)とその北東にある野辺遺跡(49)、弥生時代中期には環濠集

落が発掘されている一宮市猫島遺跡(11)、独特な沈線文様を施した弥生土器として知られる「大地式土器」が出土した岩倉市大地遺跡(24)、下新田遺跡の北にある町屋遺跡、他にも弥生時代中期後葉から弥生時代後期の遺跡として一宮市一宮南高校平松遺跡(8)、一宮市鹿取遺跡(9)、一宮市蕪池遺跡(10)。岩倉市梅ノ木遺跡(32)がある。岩倉市岩倉城遺跡(28)でも弥生時代後期末の竪穴建物と方形周溝墓が確認されている。また弥生時代前期の環濠集落遺跡として著名な一宮市元屋敷遺跡(20)、同じ弥生前期の伝法寺廃寺跡(19)、岩倉市北島白山遺跡、続く弥生時代中期には発掘調査が実施された一宮市飯守神遺跡(369)なども、この弥生B群の遺跡に含めて考えてもよい。その他に小牧市元町や同市小針付近にも、弥生時代の遺跡が点在している。

古墳時代の遺跡は弥生時代の遺跡分布とやや地点を変えつつもほぼ重なるように展開しており、大小5つの遺跡群がみられる。一つは弥生A群の遺跡分布にほぼ重なるもので、青木川の西にある江南市江森から大口町余野にかけての地区付近を中心に分布する(古墳A群)。この一群には、江南市宮後にある南大塚古墳(98)では、古墳時代前期のだ龍鏡の出土が知られている。江南市曾本にある岩塚裏遺跡(120)や江南市小折町にある天王山遺跡(115)、江南市石枕にある上ヶ遺跡(108)では円筒埴輪の出土が知られている。また大口町小口にある白山古墳群(139～145)では前方後方墳を始めとする7基の古墳が確認されており、この地域に古墳時代初頭の首長の存在が推定できる。二つ目は大口町秋田や同町御供所から江南市曾本町や小牧市三ツ瀬原新田にかけて、新たに遺跡が多く分布する一群(古墳B群)である。この遺跡群には、古墳時代後期の全長約60mの前方後円墳である曾本二子塚古墳(118)や乳文鏡とともに鉄剣を始めとする武具と須恵器が出土しているいわき塚古墳、発掘調査により、竈のある竪穴住居跡2棟、炉跡4基、溝などがみつかった白木遺跡(225)などがある。三つ目は下新田遺跡のある弥生B群の遺跡分布と重なる地域で、一宮市丹陽町天摩から岩倉市大地町や小牧市藤島町を経て、師勝町熊之庄にいたる地区付近を中心に分布する一群がある(古墳C群)。一宮市丹陽町伝法寺付近にある遺跡



第5図 下新田遺跡周辺の弥生時代・古墳時代の遺跡

第1章 前 言

もこの一群に含まれる。この中で、岩倉市内の大山寺町にある小森遺跡（61）で古墳時代前期の竪穴住居が、大地新町にある西北出B遺跡（46）、中野町にある御山寺遺跡（35）において方墳が発掘調査により確認されている。この地域で明確な墳丘が残る古墳は、帆立貝形前方後円墳で埴輪をもつ北名古屋市高塚古墳（343）が知られるのみであるが、その他に「岩倉」の地名の由来にもなったと言われる新溝古墳（26）、七面山古墳（64）、天神塚古墳（72）などがある。四つ目は小牧山の南西部にある小牧市元町・小木から小針を経て中町にかけて分布する一群で（古墳D群）、弥生時代にはあまり遺跡がみられなかった地域である。この中で小牧市小木には、全長90mの前方後円墳で仿製三角縁神獣鏡の出土した宇都宮古墳（358）、円墳の浄音寺古墳（299）、甲屋敷古墳（234）などからなる小木古墳群があり、古墳時代前期の首長墳と考えられるものである。

以上に述べたように遺跡群が増えて、古墳時代には江南市山の尻や大口町小口から大口町御供所付近を経て南の岩倉市大地町や師勝町熊之庄までつづく遺跡群が形成されたように思われる。他にも大口町大塚町外坪にある石亀塚古墳（208）では四神四獣鏡、直刀、短甲、須恵器が出土している。

続く奈良時代から平安時代にかけての古代の遺跡は、古墳時代の遺跡に比べて遺跡数とその分布に変化が見られる。一つは江南市宮後から同前野町にかけての地区付近を中心に分布する一群である（古代A群）。主要な遺跡をあげると中世以前の蓮華寺の跡として建物礎石があったことが記録されている前野大塚遺跡（94）、「美濃国」刻印須恵器杯蓋が出土している桐野遺跡（109）、灰釉陶器とともに瑞花双鳥八稜鏡の出土が知られている砂場裏遺跡（97）、布目瓦が出土している小金堂遺跡（99）がある。その他に江南市村久野にある音楽寺廃寺と薬師浦遺跡から蓮華文軒丸瓦や布目瓦が多数出土している。二つ目は下新田遺跡のある岩倉市鈴井町を含むものであるが、岩倉市石仏から一宮市丹陽町伝法寺にかけての地区付近に分布する一群である（古代B群）。主要な遺跡をあげると、瓦当文のある布目瓦や建物の礎石がみついている一宮市長福寺廃寺跡（6）、一宮市伝法寺廃寺跡（19）などがあり、

長福寺廃寺跡の周囲からは金銅天部立像、銅造誕生釈迦仏立像が出土している。また発掘調査が行われた猫島遺跡（11）では、平安時代後期の掘立柱建物や井戸、溝などが報告されている。三つ目は、岩倉市稲荷町から小牧市藤島町にかけての地区付近に分布する一群で（古代C群）、主要な遺跡をあげると、古代の瓦や建物礎石などが出土する薬師堂廃寺跡（51）や西春町弥勒寺にある弥勒寺廃寺跡（348）、古瓦とともに銅碗の出土が知られる岩倉市御土井廃寺跡（76）、尾張国府推定地の候補ともなっている岩倉市国衙遺跡（77）がある。弥勒寺廃寺跡（348）では、発掘調査が行われ、建物礎石と布目瓦・須恵器・土師器などが出土し、室町時代にあった東光寺の前身寺院跡として推定されている。白鳳時代から奈良時代にかけて、岩倉市から北名古屋市西春地区を中心とする古代B群と古代C群の二つの遺跡群は、尾張地域の中でも最も先進的に開発された地域を反映したものと考えられるものである。その他に小牧市小針付近に分布する一群がある。

鎌倉時代から室町時代・戦国時代にかけての中世の遺跡は、古代の遺跡より遺跡数が多く、分布する範囲も広がる。中世におけるこの地域では平安時代末から鎌倉時代にかけて、権門への寄進地系荘園として多くの御園・御厨・荘園・勅旨田などが形成された。伊勢神宮領として、高屋御園、千丸垣内御園、前野御園、瀬邊御厨、搦栗御厨、柳橋御厨などがあり、熱田社領として、般若野郷、公賀・三刀墓郷、大間郷、柴墓郷、野依供御所などがみられた。また開発された荘園には、丹羽氏により開発された稲木荘、小弓荘、上東門院勅旨田、陽明門院勅旨田、後三条院勅旨田が江南市域近在に散在して広くあり、江南市石枕付近にあった石枕荘、江南市村久野を中心に曼陀羅寺領村久野荘、岩倉市井上町から一宮市丹陽町佐野にかけて中心があるとされる山科家領井上荘が知られている。室町時代には岩倉市大市場にある大円寺が、井上荘の地頭職を相伝した。西春町から師勝町の周辺では、山田荘、小田井ノ荘、熊野ノ荘があったことが知られているが、その広がりはいくわかっていない。この他にも城館を拠点に活躍した豪族・武士の存在があり、遺跡のあり方にも大きな画期が認められるのは、このような社会的変化を反映した可能性が高い。このような中世の遺跡分



第 6 図 下新田遺跡周辺の古代・中世の遺跡

第1章 前 言

1. 下新田遺跡（弥生時代・奈良時代～江戸時代）
2. 堂浦（巖）遺跡（平安時代）
3. 海戸遺跡（弥生時代）
4. 佐野遺跡（縄文時代～弥生時代）
5. 加納馬場遺跡（弥生時代）
6. 長福寺廃寺（飛鳥時代）
7. 円長寺古墳（古墳時代）
8. 一宮南高伏平松遺跡（弥生時代～鎌倉時代）
9. 鹿取遺跡（奈良時代～平安時代）
10. 熊池遺跡（弥生時代）
11. 猫島遺跡（縄文時代～室町時代）
12. 重古城跡（古墳時代・平安時代～鎌倉時代）
13. 東高龍遺跡（奈良時代～平安時代）
14. 飛所遺跡（奈良時代～平安時代）
15. 成八扒遺跡（弥生時代～平安時代）
16. 六所遺跡（弥生時代～平安時代）
17. 池之上遺跡（縄文時代晩期、古墳時代・鎌倉時代）
18. 稲荷山古墳（古墳時代、含む陪塚）
19. 伝法寺廃寺（奈良時代）
20. 元屋敷遺跡（弥生時代～中世）
21. 西大門遺跡（弥生時代～平安時代）
22. 五輪ヶ淵遺跡（奈良時代～室町時代）
23. 寺跡遺跡（近世）
24. 大地遺跡（縄文時代～弥生時代）
25. 井上城跡（室町時代）
26. 新溝古墳（古墳時代）
27. 山内一豊生誕地（室町時代）
28. 岩倉城跡（室町時代）
29. 西広畑遺跡（弥生時代）
30. 西土門遺跡（平安時代）
31. 長福寺遺跡（弥生時代）
32. 梅ノ木遺跡（古墳時代）
33. 岩塚遺跡（弥生時代）
34. 立切遺跡（弥生時代・奈良時代）
35. 御山寺遺跡（弥生時代～江戸時代）
36. 法成寺遺跡（奈良時代）
37. 天神遺跡（古墳時代）
38. 宮東遺跡（弥生時代）
39. 西沼海戸遺跡（弥生時代）
40. 前田遺跡（古墳時代・平安時代）
41. 乾出遺跡（弥生時代・奈良時代）
42. 六田遺跡（縄文時代～弥生時代）
43. 西町畑遺跡（縄文時代～弥生時代）
44. 東町畑遺跡（弥生時代）
45. 仲定遺跡（縄文時代）
46. 西北出（B）遺跡（古墳時代）
47. 西北出（A）遺跡（縄文時代～弥生時代）
48. 栗広遺跡（弥生時代～平安時代）
49. 野辺遺跡（縄文時代～古墳時代）
50. ノンヘ遺跡（縄文時代～古墳時代）
51. 薬師堂廃寺跡（弥生時代～鎌倉時代）
52. 寺山遺跡（奈良時代）
53. 神宮寺古墳（古墳時代）
54. 西出古墳（古墳時代）
55. 西出遺跡（室町時代）
56. 吸田遺跡（古墳時代）
57. 前畑遺跡（古墳時代・室町時代）
58. 石塚遺跡（弥生時代）
59. 高畑遺跡（古墳時代）
60. 下流遺跡（古墳時代）
61. 小森遺跡（室町時代、柿経出土地）
62. 西生田遺跡（弥生時代）
63. 種畑古墳（古墳時代）
64. 七面山古墳（古墳時代）
65. 八剱遺跡（縄文時代～古墳時代）
66. 大塚遺跡（弥生時代～古墳時代）
67. 東郷前遺跡（弥生時代）
68. 中出口遺跡（弥生時代）
69. 白山遺跡（弥生時代）
70. 古市場遺跡（古墳時代）
71. 真光寺遺跡（弥生時代）
72. 天神塚遺跡（古墳時代）
73. 鶴野遺跡（弥生時代～平安時代）
74. 屋敷敷古墳（古墳時代）
75. 神清院古墳（古墳時代）
76. 御土井廃寺跡（弥生時代～室町時代）
77. 国衙遺跡（縄文時代～室町時代）
78. 長畑遺跡（古墳時代）
79. 北島白山遺跡（弥生時代）
80. 町屋遺跡（弥生時代）
81. 音楽寺廃寺（奈良時代～室町時代）
82. ニタ子遺跡（古墳時代～中世）
83. 高海戸遺跡（縄文時代晩期、古墳時代、勝佐遺跡）
84. 石塚遺跡（古墳時代後期）
85. 宮東遺跡（古墳時代）
86. 河原山遺跡（縄文時代）
87. 角畑遺跡（縄文時代～弥生時代・中世、両高屋東遺跡）
88. 大門遺跡（鎌倉時代）
89. 大日遺跡（弥生時代～中世、両高屋遺跡）
90. 八幡裏遺跡（古墳時代～奈良時代・室町時代・江戸時代）
91. 宮後城跡
92. 八幡前遺跡（室町時代）
93. 寺ノ西遺跡（古墳時代）
94. 前野大塚古墳（古墳時代）
95. 宮浦遺跡（古墳時代）
96. 前野小塚古墳（古墳時代）
97. 砂場裏遺跡（平安時代）
98. 南大塚古墳（古墳時代）
99. 小金堂遺跡（平安時代・鎌倉時代）
100. 鳥森遺跡（古墳時代・平安時代・室町時代・江戸時代）
101. 大上戸遺跡
102. 諸家遺跡（鎌倉時代・江戸時代）
103. 室生寺遺跡（鎌倉時代）
104. 寺廓遺跡（鎌倉時代）
105. 山王南屋敷遺跡（鎌倉時代～室町時代）
106. 観音寺遺跡（鎌倉時代、四辻山遺跡）
107. 石枕南屋敷遺跡（弥生時代）
108. 上ヶ遺跡（古墳時代・奈良時代～鎌倉時代）
109. 桐野遺跡（弥生時代～古墳時代・奈良時代・鎌倉時代）
110. 長家遺跡（奈良時代～室町時代）
111. 札掛遺跡（古墳時代）
112. 椿屋敷遺跡（弥生時代）
113. 茶屋遺跡（弥生時代）
114. 上源寺遺跡（縄文時代～弥生時代）
115. 天王山遺跡（古墳時代）
116. 富士塚古墳（古墳時代～室町時代）
117. 小折城跡
118. 二子山古墳（古墳時代）
119. 榛原遺跡（古墳時代）
120. 岩塚浦遺跡（古墳時代）
121. 塔塚遺跡（古墳時代）
122. 大堀遺跡（平安時代）
123. 西屋遺跡（室町時代）
124. 神屋遺跡（弥生時代）
125. 正号寺遺跡（弥生時代・室町時代）
126. 青木添遺跡（鎌倉時代）
127. 上本郷遺跡（中世）
128. 後山遺跡（中世）
129. 北川原遺跡（中世）
130. 高島遺跡（鎌倉時代）
131. 長泉塚古墳（古墳時代）
132. 恵心庵（江戸時代）
133. 高木古墳（古墳時代）
134. 竹敷遺跡（弥生時代）
135. 斉藤遺跡（弥生時代）
136. 花立遺跡（弥生時代）
137. 元亀塚（古墳時代）
138. 柏森遺跡（弥生時代）
139. 白山1号古墳群（古墳時代、白山1号墳）
140. 白山1号古墳群（古墳時代、白山3号墳）
141. 白山1号古墳群（古墳時代、白山2号墳）
142. 白山1号古墳群（古墳時代、白山1号墓）
143. 白山1号古墳群（古墳時代、白山5号墳）
144. 白山1号古墳群（古墳時代、白山6号墳）
145. 白山1号古墳群（古墳時代、白山7号墳）
146. 善光寺塚古墳（古墳時代）
147. 桜塚古墳（古墳時代）
148. 大日塚古墳（古墳時代）
149. 堀尾氏邸宅跡（中世）
150. 仁所野遺跡（弥生時代～古墳時代）
151. しょうねん塚古墳（古墳時代）
152. 道心塚古墳（古墳時代）
153. 起シ遺跡（弥生時代）
154. 墓ノ腰遺跡（弥生時代）
155. 西山神A遺跡（縄文時代）
156. 西山神B遺跡（旧石器時代）
157. 水瀬遺跡（弥生時代～古墳時代）
158. 垣田遺跡（縄文時代）
159. 地蔵堂遺跡（縄文時代）
160. 下山伏遺跡（古墳時代）
161. 万願寺遺跡（古墳時代）
162. 馬場遺跡（弥生時代～古墳時代）
163. 寺浦遺跡（古墳時代、浅畑遺跡）
164. 西浦遺跡（弥生時代）
165. 寺前遺跡（奈良時代～古墳時代）
166. 宮西古家（奈良時代）
167. 宮之前遺跡（弥生時代～古墳時代）
168. 清水遺跡（弥生時代～古墳時代）
169. 日高遺跡（弥生時代～古墳時代）
170. 日高南遺跡（弥生時代～古墳時代）
171. 神明下遺跡（弥生時代～古墳時代）
172. 権現西遺跡（弥生時代）
173. 寺前南遺跡（弥生時代）
174. 北屋敷遺跡（古墳時代）
175. 小口城古墳（古墳時代）
176. 六部遺跡（弥生時代）
177. 向江遺跡（弥生時代）
178. 若ヶ橋遺跡（中世）
179. 中畑遺跡（弥生時代～古墳時代）
180. 下島東遺跡（弥生時代～古墳時代）
181. 下島前遺跡（弥生時代～古墳時代）
182. 乗船遺跡（弥生時代～古墳時代）
183. 西流遺跡（中世）
184. 新田1号墳（古墳時代）
185. 新田2号墳（古墳時代）
186. 東樋田遺跡（弥生時代）
187. 槍松遺跡（弥生時代）
188. 山王道古墳（古墳時代）
189. 竹田遺跡（弥生時代）
190. 北海道遺跡（弥生時代）
191. 三期神社古墳（古墳時代）
192. 西樋田遺跡（弥生時代）
193. 丸遺跡（弥生時代）
194. 大塚1号墳（古墳時代）
195. 大塚2号墳（古墳時代）
196. 大塚3号墳（古墳時代）
197. 中五反田遺跡（弥生時代）
198. 大御堂遺跡（中世）
199. 苗田島遺跡（中世）
200. しょうねん塚古墳（古墳時代）
201. 山間遺跡（旧石器時代）
202. 東藪山遺跡（縄文時代）
203. 中原遺跡（旧石器時代）
204. 中原西遺跡（旧石器時代・縄文時代）
205. 神明神社1号墳（古墳）
206. 神明神社2号墳（古墳）
207. 神明神社遺跡（弥生時代）
208. 石亀塚古墳（古墳）
209. 村中尻遺跡（中世）
210. 秋葉社古墳（古墳時代）
211. 宮浦遺跡
212. 西屋敷遺跡
213. 東屋敷古墳（古墳時代）
214. 八剱社古墳（古墳時代）
215. 善教遺跡
216. 土田屋遺跡（近世）
217. 南山遺跡（古墳時代）
218. 道心塚古墳（古墳時代）
219. 免遺跡（縄文時代）
220. 北替地遺跡（縄文時代）
221. 福田遺跡（弥生時代）
222. 岩木塚古墳（古墳時代）
223. 白亀塚古墳（古墳時代）
224. 白木古墳（古墳時代）
225. 白木遺跡（古墳時代）
226. 西郷前遺跡（古墳時代）
227. 神福神社古墳（古墳時代）
228. 丸山古墳（古墳時代）
229. 平田遺跡（古墳時代）
230. 耳塚古墳（古墳時代）
231. 鳥塚古墳（古墳時代）
232. 小牧山（安土桃山時代）
233. 高根遺跡（古代～中世）
234. 甲屋敷古墳（古墳時代）
235. 村前遺跡（古墳時代・中世）
236. 村東遺跡（中世）
237. 天王前遺跡（中世）
238. 古天王遺跡（古代～中世）
239. 間々本町遺跡（中世）
240. 松原遺跡（中世）
241. 足中代遺跡（中世）
242. 片山遺跡（中世）
243. 森本遺跡（中世）
244. 洞木遺跡（中世）
245. 村中前田遺跡（中世）
246. 小塚山遺跡（中世）
247. 西之島北屋敷遺跡（中世）
248. 西之島中屋敷遺跡（中世）
249. 柿ノ木島遺跡（中世）
250. 高拍子遺跡（中世）
251. 西之島遺跡（旧石器時代）
252. 牛屋遺跡（中世）
253. 牛屋浦遺跡（古墳時代・中世）
254. 三ツ洲原雉子野遺跡（中世）
255. 北甲塚遺跡（中世）
256. 日塚遺跡（古墳時代・中世）
257. 三ツ洲雉子野遺跡（古墳時代・中世）
258. 三ツ洲宮東遺跡（中世）
259. 三ツ洲宮前遺跡（中世）
260. 諏訪塚遺跡（中世）
261. 手越西ノ門遺跡（中世）
262. 新柏遺跡（中世）
263. 豆形新田遺跡（中世）
264. 三ツ洲、東播州遺跡（中世）
265. 三ツ洲観音堂遺跡（中世）
266. 東阿原遺跡（中世）
267. 惣作遺跡（中世）
268. 土針田遺跡（中世）
269. 舟津寺前遺跡（中世）
270. 舟津宮前遺跡（中世）
271. 柏瀬遺跡（古代～中世）
272. 林屋敷遺跡（中世）
273. 巾上遺跡（中世）
274. 惣堀遺跡（中世）
275. 総濠遺跡（旧石器時代～縄文時代）
276. 下御園遺跡（中世）
277. 柏所遺跡（中世）
278. 上御園遺跡（中世）
279. 石原遺跡（中世）
280. 上鏡治遺跡（中世）
281. 小牧地田遺跡（中世）
282. 上善光遺跡（中世）
283. 新町遺跡（中世）
284. 小牧山東遺跡（旧石器時代・中世）
285. 市之久田北浦遺跡（中世）
286. 御殿遺跡（弥生時代）
287. 常普請遺跡（中世）
288. 東出遺跡（中世）
289. 西出遺跡（中世）
290. 若宮遺跡（中世）
291. 市之久田中島遺跡（古墳時代・中世）
292. 松山遺跡（中世）
293. 下御園紺屋町筋遺跡（中世）
294. 織田井戸遺跡（縄文時代～中世）
295. 小木狐塚遺跡（弥生時代・中世）
296. 天王山古墳（古墳時代）
297. 甲屋敷東遺跡（古墳時代・中世）
298. 甲屋敷第2号墳（古墳時代）
299. 淨音寺古墳（古墳時代）
300. 淨音寺山遺跡（中世）
301. 乙屋敷遺跡（中世）
302. 善能寺遺跡（中世）
303. 藤島町高畑遺跡（中世）
304. 藤島遺跡（縄文時代）
305. 藤島町居屋敷北遺跡（弥生時代～中世）
306. 藤島町居屋敷遺跡（弥生時代～中世）
307. 藤島町五才田遺跡（弥生時代～中世）
308. 藤島町出口遺跡（弥生時代～中世）
309. 藤島町鏡池遺跡（中世）
310. 十三塚古墳（古墳時代）
311. 多気西町遺跡（中世）
312. 多気西河原遺跡（中世）
313. 多気元屋敷遺跡（古代～中世）
314. 多気電泉寺北遺跡（中世）
315. 多気安正寺北遺跡（中世）
316. 多気神社西遺跡（中世）
317. 多気中町遺跡（中世）
318. 多気北町遺跡（中世）
319. 西之海道遺跡（古墳時代・中世）
320. 門遺跡（中世）
321. 観音寺遺跡（弥生時代～古墳時代・中世）
322. 小針已新田高畑遺跡（弥生時代～古墳時代・中世）
323. 小針已新田壹場遺跡（古墳時代～中世）
324. 中宮遺跡（古墳時代、中世～近世）
325. 小針八幡遺跡（中世）
326. 小針堂地遺跡（中世）
327. 小針観音堂遺跡（中世）
328. 大池遺跡（古代～中世）
329. 光善寺遺跡（古代～中世）
330. 小針入鹿新田中市場遺跡（古代～中世）
331. 小針北堂地遺跡（中世）
332. 小屋敷遺跡（中世）
333. 羊之木原遺跡（中世）
334. 昭和遺跡（中世）
335. 市之久田八幡社裏遺跡（中世）
336. 市之久田稲荷遺跡（中世）
337. 市之久田善光寺前遺跡（中世）
338. 岩之田西遺跡（中世）
339. 南外山北浦遺跡（中世）
340. 内方前遺跡（中世）
341. 桜井山遺跡（中世）
342. 城島遺跡（中世）
343. 高塚古墳（古墳時代）
344. 鍛冶ヶー色遺跡（弥生時代～中世）
345. 徳重遺跡（古墳時代）
346. 法成寺遺跡（弥生時代～中世）
347. 神子前遺跡（弥生時代）
348. 弥勒寺遺跡（奈良時代～平安時代）
349. 弥勒寺御甲塚遺跡（弥生時代～古墳時代）
350. 弥勒寺遺跡（弥生時代～古墳時代、古山王古墳）
351. 樋口遺跡（弥生時代）
352. 村前遺跡（弥生時代～古墳時代）
353. 十二社古墳（古墳時代）
354. 堤下遺跡（縄文時代）
355. 六の坪遺跡（縄文時代）
356. 山浦遺跡（平安時代）
357. 古井遺跡（弥生時代・平安時代）
358. 射矢重遺跡（弥生時代）
359. 新宮遺跡（弥生時代～古墳時代・平安時代）
360. 八幡西遺跡（弥生時代・中世）
361. 仙人塚古墳（古墳時代）
362. 石塚遺跡（弥生時代）
363. 熊之庄遺跡（弥生時代）
364. 江川遺跡（古墳時代・中世）
365. 村上遺跡（奈良時代）
366. 山之神遺跡（中世）
367. 稻荷古墳（古墳時代）
368. 宇都宮古墳（古墳時代）

第5図・第6図の下新田遺跡周辺の遺跡一覧

布では、一つは江南市山尻から宮後を経て中奈良町にいたる地区付近に分布する一群（中世 A 群）、二つ目は小牧市渕原新田から小牧山の南西部や小牧市市之久田昭和を経て小牧市多氣にいたる地区に分布する一群（中世 B 群）、三つ目は下新田遺跡のある岩倉市鈴井町付近から一宮市丹陽町伝法寺にいたる地区付近の一群（中世 C 群）、岩倉市の岩倉城跡がある付近から小牧市藤島町や岩倉市大山寺町を経て西春町法成寺にいたる地区に分布する一群（中世 D 群）がみられる。中世では江南市市域にある中世 A 群が古代に比べて遺跡数とその広がる範囲が大きくなる点、古代以前に遺跡があまり多く存在しなかった小牧市小牧城跡（232）のある北西側から南側の地域に多数の遺跡が分布する点（中世 B 群）が大きな特徴である。一方で中世の遺跡があまり知られていない大口町域においても、織田広近により長禄三（1459）年に完成したとされる小口城跡（175、小口城古墳）には、城下町も備わっていたと伝えられているし、戦国時代末から江戸時代初期にかけて活躍した堀尾茂助吉晴は、堀尾氏邸宅跡（149）辺りの出身とされる。岩倉市域では、15 世紀前半の嘉吉年中に守護代織田郷広に築城されたといわれる井上城跡があり、15 世紀後半に築城される岩倉城跡との関係が注目される。また岩倉市大山寺町小森の畑地の地下 4m から出土した柿経が岩倉市の指定文化財となっている。

以上にみたように、弥生時代から戦国時代にかけての遺跡の広がりには、大きな分布の変遷がみられる。弥生時代から古墳時代の遺跡が多い大口町では古代以後の遺跡がなく、小牧市の小牧山の南西側の地域では、中世以後の遺跡は多いが、古代以前の遺跡は少ない傾向がみられる。これらの変遷について、全く遺跡がみられない状況については、遺構・遺物が全くみられないのではなく、発掘調査においても少量の遺物が発見されるだけの場合のように、遺跡の営みの中心から外れているものも多い。一方で、どの時代にも多くの遺物が出土しており、著名になっている遺跡がある地域では、その遺跡の周辺にその時代の遺跡が多く認められているのも、先にみてきた通りである。このような現象がいかなる要因により、表れるのかは、今後の調査や研究に期待したい。

[参考文献]

- 小牧市史編集委員会編 1977『小牧市史』本文編、小牧市
- 大口町史編集委員会編 1982『大口町史』愛知県丹羽郡大口町役場
- 西春町史編集委員会 1983『西春町史』通史編 1、西春町役場
- 江南市史編さん委員会編 1983『小牧市史』資料四 文化編
- 江南市教育委員会・江南市史編さん委員会編 2001『小牧市史』本文編、愛知県小牧市
- 岩倉市史編集委員会編 1985『岩倉市史』上巻、岩倉市
- 石黒立人編 2011『御山寺遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書」第 167 集、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

第2章 遺 構

第1節 基本層序

今回の発掘調査を行った各調査区の典型的堆積状況を示す部分を表現して、発掘調査地点の南北約450mにわたる表土以下の堆積について柱状断面図を作成した(第7図)。柱状図数は県道名古屋江南線の東側が10本、西側が11本である。なお、柱状図の土層表現については、調査時の土層観察の情報に基づいて、色調を暗色：明度1～3、中間色：明度4・5、明色：明度6～8に分類し、粒度をシルト質粘土、粘土質シルト、極細粒砂、細粒砂に分類し表現した。以後の堆積の記述は色調の明度と粒度によって行う。

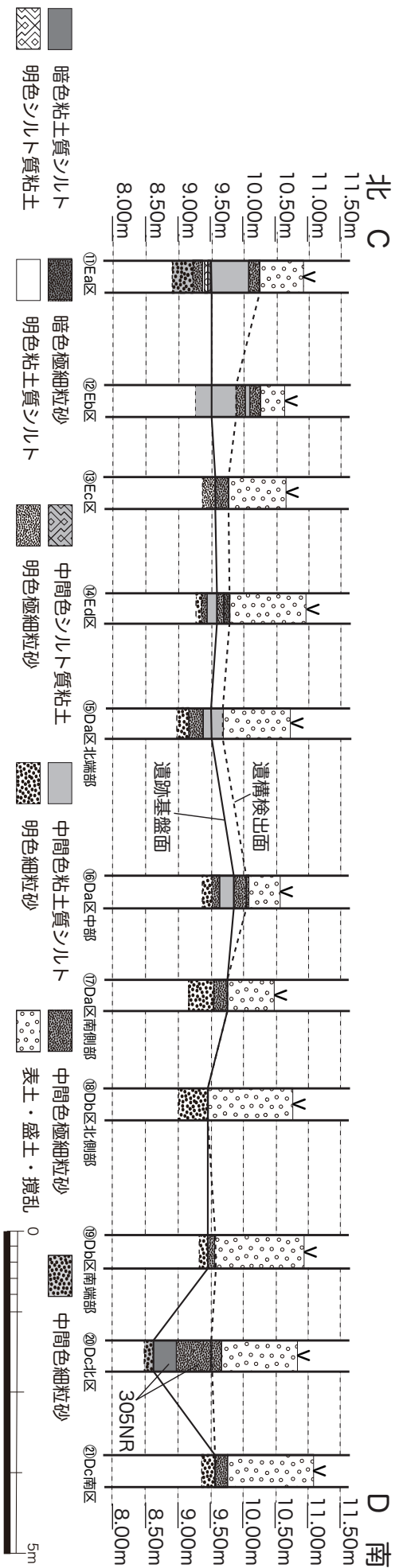
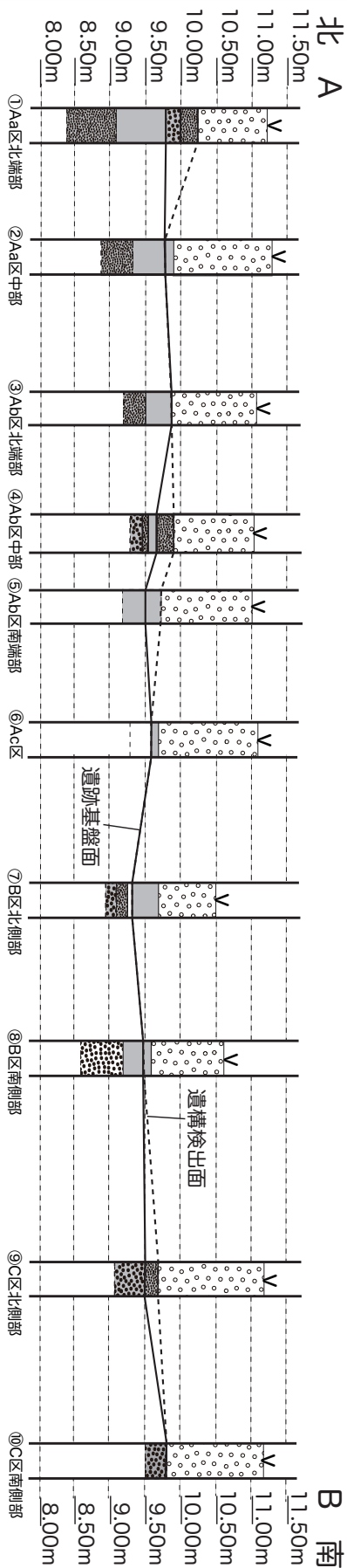
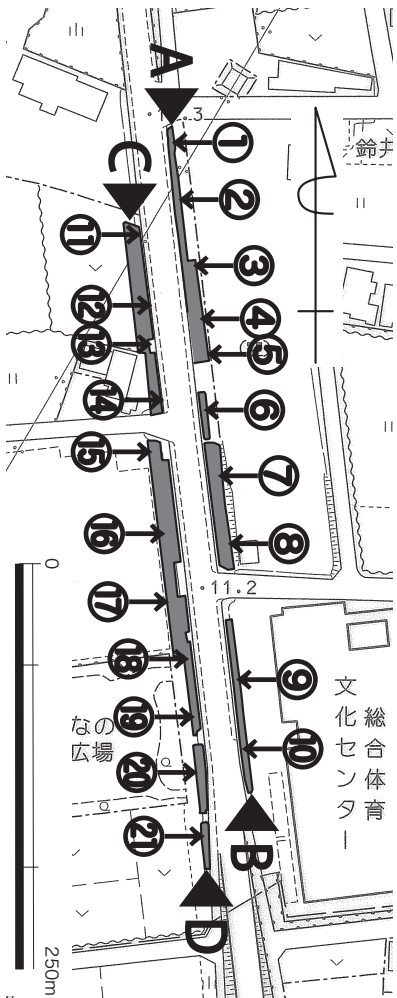
本遺跡の発掘調査現場およびその周辺では、水田や畑だったところに最近の土盛り整地が多くみられ、公共施設や店舗、公園、温室などの施設が造られて広がっている。発掘調査時の地表面の標高は、畑地や排水路に隣接する⑦09B区北側部・⑧09B区南側部・⑫09Eb区・⑬09Ec区・⑮09Da区北端部・⑯09Da区中部・⑰09Da区南端部が標高10.4m～10.7mの標高10.5m前後、公共施設・公園・店舗などに伴う盛土が県道の高さに揃えてある①09Aa区北端部・②09Aa区中部・③09Ab区北端部・④09Ab区中部・⑤09Ab区南端部・⑥09Ac区・⑨09C区北側部・⑩09C区南側部・⑪09Ea区・⑭09Ed区・⑱09Db区北側部・⑲09Db区南端部・⑳09Dc北区・㉑09Dc南区が標高10.8m～11.3mの標高11.0m前後である。地表面の高さには近年の盛土の影響が強く、元来からの地形の傾斜があまりあらわれていない。

次に遺構検出面は、表土である土盛り整地・近代以後から現在にかけての畑・水田の旧耕作土の下にて、近世にさかのぼる可能性のある旧水田(畑)耕作土と溝などが09Ac区・09B区北側・09C区・09Da区北端部・09Db区・09Dc北区の地点において上面の遺構として調査を行ったが、その他の地点では、近代以後の耕作土・近年の盛土・整地層の下で奈良時代から戦国時代にかけての遺物を包含する遺構があり、その上面付近が遺構検出面になった。遺構検出面の高さは、09Aa

区～09Ac区が標高9.6m～10.2m、09B区が標高9.2m～9.6m、09C区が標高9.5m～9.7m、09Da区・09Db区が標高9.5m～9.9m、09Dc区が標高9.2m～9.6m、09Ea区が標高10.3m～10.4m、09Eb区～09Ed区が標高9.5m～9.8mで、北側の調査区である09Aa区の北側と09B区北端、09Ea区北端の地点で標高10.0mを超える部分があり、09B区と09Dc区では標高9.5mより低いが、その他の地点では標高9.5m～9.7m前後であった。

遺構埋土は中間色の極細粒砂・粘土質シルトが中心で、その分布にも偏りはないようである。その他の埋土は少数ではあるが、埋土が暗色極細粒砂～シルト質粘土の遺構として09Aa区010SDや同019SD、09B区046SDなどがあり、埋土が明色粘土質シルトの遺構として09Aa区035SD、同041SD、09Ac区136SKと同140SD、埋土が明色細粒砂・極細粒砂の遺構として09Db区268SDと同270SK、同271SD、同272SD、同282SD、同288SDなどがある。

遺跡の基盤層の堆積物は、最下層に中間色・明色の細粒砂層があり、次に中間色の極細粒砂層が堆積し、その上層に中間色・明色の粘土質シルトが順に堆積する上方へ細粒化して堆積しており、今回の発掘調査で確認された堆積状況では一連の流水性堆積の結果を反映したものと考えられる。そしてその堆積状況を具体的に述べると、県道名古屋江南線の東側では、北にある①09Aa区北端部から②09Aa区中部、③09Ab区北端部にかけて、下層にある中間色極細粒砂層の上面が標高9.1m前後から9.5m前後に上がり、④09Ab区中部では標高9.6m前後まで高くなっており、この地点で最下層に中間色細粒砂層が確認できる。その南側にある⑤09Ab区南端部と⑥09Ac区では、下層の中間色極細粒砂層がみられない。また⑦09B区北側部より南側では、最下層と思われる中間色・明色細粒砂層の上面が⑦09B区北側部から⑧09B区南側部を経て、⑨09C区北側部、⑩09C区南側部へと、その標高が9.1m前後から9.8m前後に高くなっている。県道名古屋江南線の西側では、中間色極細粒砂層の上面



第7図 下新田遺跡基本土層図 (土層図垂直方向は1:100)

が⑪ 09Ea 区にて標高 9.4m 前後にあり、南にある⑬ 09Ec 区で標高 9.8m 前後で高まり、その南にある⑭ 09Ed 区を経て⑮ 09Da 区北端部にかけて標高 9.3m 前後まで下がる。そしてこの中間色極細粒砂層の上面は⑯ 09Da 区中部と⑰ 09Da 区南部で標高 9.7m 前後で高くなる。この中間色極細粒砂層の堆積は⑱ 09Db 区北側部から南側では確認できないが、⑯ 09Da 区中部と⑰ 09Da 区南部の最下層にある明色細粒砂層の上面が、⑮ 09Da 区北端部の標高 9.2m 前後から⑱ 09Db 区北側・⑲ 09Db 区南端部の標高 9.4m 前後まで高くなり、⑳ 09Dc 北区では 09Dc 区 305NR が入るためにこの堆積は途切れるが、その続きと考えられる堆積が㉑ 09Dc 南区の標高 9.5m 前後にて確認できる。この遺跡の基盤層の堆積状況は、後述する遺構のあり方とも関連して興味深く思われる。

第2節 各調査区の概要

今回の発掘調査を実施できた調査区は、県道の両脇部にあたる小さく長細いものが多く、調査地点により遺構の残存状態に大きな違いがあり、また確認された遺構の時期・形状も差異があるため、各調査区において調査の概観を述べ、その後遺構面ごとに主要遺構について述べる。

・09Aa 区 (第8図・第9図)

概観

最近の盛土と旧水田耕作土を除去した後、調査に入った。調査区の北側では標高 10.0m 前後にて、近世後期～近代の水田遺構と思われる遺構が確認できたため、上面の遺構として調査した。調査区の南側では、標高 9.85m 前後にて暗灰黄色～暗灰黄褐色極細粒砂・黄褐色粘土質シルトからなる近代以後の旧水田耕作土層の上面があり、この部分を検出 1 として人力掘削を行ない、その下にて遺構検出を行なった。

【上面】

上面の遺構は大きく 2 時期あるようであり、004SN を中心とする上面の水田遺構とそれより新しい溝群がある。上面の遺構の時期は江戸時代後期～近代である。
002SD・047SD 上面の水田遺構より新しい遺構で、途切れているが、同一の遺構の可能性がある。002SD

が幅 0.40m、丸底で溝底が標高 9.80m、047SD が幅 0.70m、丸底で溝底が標高 9.45m、どちらの埋土も灰色極細粒砂である。

005SD 上面の水田遺構より新しい遺構で、幅 0.8m、深さ 0.30m の丸底の溝である。埋土は灰黄褐色極細粒砂である。

上面の水田遺構 N-20°-E ～ N-30°-E の東に振れる軸線をもつ水田遺構で畦畔の上面幅は 0.50m で、004SN を中心に 001SN・026SN ～ 028SN・053SN の 6 筆確認できた。004SN は長方形平面で長辺 7.5m、短辺 4.2m、深さ 0.20m、で埋土は灰黄褐色極細粒砂であった。

【主面】

主に古代と中世以後の遺構があり、中世以後の遺構は溝と土坑が調査区全体に広がっているが、古代の遺構は調査区の南側に限られる。

古代の遺構

022SK 調査区南側で検出された一辺 1.5m 程の平面形状の土坑で、土坑の南西隅部と東部側が調査区外におよんでいる。埋土の下部で楕円形丸底の土坑状に掘り下がった長径 0.90m、短径 0.70m、深さ 0.15m 前後の部分を 055SK、022SK の周溝状に幅 0.2m ～ 0.3m のなった部分を 054SK・055SK・056SD として調査した。022SK の部分は灰黄褐色極細粒砂、055SK の部分は黄灰色極細粒砂、054SK の部分はオリーブ褐色シルト質粘土の埋土で、土師器片が出土した。

023SK 022SK の南 0.3m で検出した平面隅丸長方形平底の土坑で、長径 0.90m、短径 0.70m、深さ 0.15m をはかる。埋土は灰黄褐色・褐灰色の極細粒砂で、検出時は 022SK とこの土坑の北西 0.2m にある 024SK、022SK の北側にある 020SK・021SK とよく似た埋土と認識して検出した。遺物は須恵器と土師器の破片が出土した。

029SK 022SK の北 3m にて確認した遺構で、中世の 019SD により土坑の北側を削られており、東側は調査区外にのびている。径 1.25m 程の平面円形状で断面では南北 2.2m を超える丸底の土坑で、019SD と 029SK の間に別の土坑状の掘り込みが断面上では確認できたので、019SD とは区別している。埋土は灰黄褐色粘土質シルトに黄褐色粘土質シルトが少量混じる斑土であ

る。遺物は須恵器と土師器の破片が出土した。

中世の遺構

052SD 調査区の北側で N-25°-E と東に振れる南北方向の溝で、幅 1.00m、深さ 0.4m の断面丸底、埋土は黄灰色粘土質シルトがはいる。時期は古瀬戸陶器の鉄釉袴腰形香炉 (E025) が出土していることから、15 世紀後半以後である。この他にも調査区北側では灰黄褐色～褐灰色極細粒砂の埋土で N-25°-E ～ N-30°-E の軸線をもつ幅 0.8m ～ 1.4m、深さ 0.40m ～ 0.75m の溝 035SD・041SD・044SD がみられる。041SD・044SD からは土師器や灰釉陶器の破片が出土しているが、052SD と同様の軸線をもつ溝であることから、中世の連続した遺構群と考えておきたい。また、052SD は 035SD より新しく、041SD は 044SD より古い。041SD は北から西へ、044SD は北から東に折れる溝であるので、これらの溝はこの付近で鍵状に曲がる溝である可能性がある。尚、035SD と 041SD の間にほぼ同じ軸線をもつ 040SD があるが、幅が 0.20m と細く、深さが 0.08m と浅いもので、中世の溝群とは区別できる。付近で出土している古代の遺物に属する竪穴建物の周溝の可能性はある。

045SD 調査区の中央付近を N-75°-W ～ N-80°-W の東西方向に流れる溝で、幅 1.40m 前後、深さ 0.35m の丸底で、埋土は灰黄褐色極細粒砂である。中世の土師器片が出土した。この溝の南側に同じ軸線をもつ幅 0.50m ～ 2.00m の 030SD・031SD・042SD・047SD・048SD・049SD があり、047SD からは古代の土師器片が出土しているが、灰黄褐色・暗灰黄褐色・にぶい黄褐色の粘土質シルトが埋土として入っており、048SD から 047SD、031SD、030SD への順に新しくなっていることから、中世に連続して掘削された一連の溝群である。042SD は当初北側の 046SD と 2 条に分けて掘削したが、断面観察の結果、1 条の溝であることが分かったが、この溝は幅が 2.0m と他の溝に比べて規模が大きい。

010SD・013SD 調査区中央の 045SD などの溝群の南にある溝で、050SD と溝の可能性のある 008SK を含む東西に流れる溝群である。これらは幅 0.40m ～ 1.00m、深さ 0.35m 前後の丸底の溝である。軸線は N-75°-W ～ N-80°-W と 045SD を始めとする調査

区中央の溝群と同一方向であるが、050SD や 008SK は 047SD ～ 049SD の溝群より一層上から検出できる可能性が高い溝である為、中央の溝群とは区別した。008SK からは灰釉陶器片が出土しているが、010SD や 013SD からは北部系陶器の碗・小皿が、また 013SD からは内耳鍋 (E013) が出土していることから、時期は 15 世紀後半のものと考えられる。また 010SD の埋土は暗色の暗オリーブ褐色粘土質シルト、013SD の埋土は黒褐色粘土質シルトと暗色の色調で類似しており、近い時期の遺構である可能性が高く、同時に存在しているならば、幅 4m 程の道の側溝の可能性はある。

019SD 013SD の南にある南東から南西へと鍵状に屈曲する可能性が高い溝で、幅 1.40m 前後、深さ 0.20m 前後の丸底である。北部系陶器が出土しているので、010SD・013SD と近い時期の可能性はある。また付近にある 014SK ～ 018SK・032SK は、北部系陶器や大窯陶器の破片が出土しているので、中世の前後する時期のものである。

・09Ab 区 (第 10 図)

概観

09Aa 区に南接する調査区で、最近の盛土と旧水田耕作土を除去した後、調査に入った。調査区の北端部で近代以後の旧水田耕作土を確認したが、基本的に標高 9.7m ～ 9.8m にて、遺構検出を行なった。

【主面】

遺構検出にあたり、調査区の 069SK・070SD より南側と 077SI・078SI・083SK より北側では遺物包含する遺構面の色調が異なり、南側の方が色調が暗く、新しい堆積であることが、まず確認できたために、先に検出を行なった (中世の溝群と土坑)。次に中央部にて、周囲より比較的明確に暗い色調である 072SD と 101SD を検出し、各部分を土層断面の堆積状況を確認しながら細分して遺構検出を行なった。調査区北側の 115SK は周囲より色調が濁った斑土で、新しい遺構であると思われた。調査区の北側は、09Aa 区南側からの続きで古代の遺物を含む遺構を検出したが、平面形や断面形の形状は確認できたが、遺構としては不明瞭な印象をもつものであった。

古代の遺構

077SI・078SI・080SI・081SI・082SI

・090SI・103SI・108SI

調査区の中央部から南側に検出したもので、一辺2.0m 前後の平面隅丸方形の平底の竪穴状土坑として確認できたもので、埋土はにぶい黄褐色～灰黄褐色極細粒砂で、深さ 0.15m 前後であった。078SI の北西辺中央部に少し白色になる粘土シルトの部分を検出したが、カマド状の遺構には確認できなかった。出土遺物には土師器片が少量あるのみである。

100SK 先に述べた竪穴状遺構 103SI と重複する平面円形状、平底の土坑で、南側を 098SI に東側が調査区外におよぶ。径が 1.40m 以上、深さ 0.20m、埋土は褐色・にぶい黄褐色の粘土質シルトで、須恵器片が出土した。

中世の遺構

072SD・101SD 調査区中央部にて検出された東西溝で、幅 0.40m～0.50m、深さ 0.35m 前後をはかる。101SD は丸底の溝であるが、072SD は断面やや「V」字状の丸底である。埋土はどちらも上層が灰黄褐色粘土質シルトで類似していて、072SD が N-80°-W、101SD が N-75°-W と、溝間が 4.5m 前後でほぼ並行して流れているようにみえる。出土遺物は、古代の土師器や須恵器とともに、南部系陶器、北部系陶器、中世の土師器、鍋類、古瀬戸陶器が出土しており、101SD からは北部系陶器碗（E031）と古瀬戸陶器の鉄釉卸目付大皿（E032）が出土していることから、時期は 15 世紀後半である。

059SD・065SD・066SD・067SD・061SK

調査区の南側で検出した溝群である。幅 1.00m～1.20m 前後、深さ 0.30m～0.35m 前後の丸底の溝である。埋土は灰黄褐色・暗灰黄色・黄褐色の極細粒砂と粘土質シルトで、重複もしている為、これらが斑土状にも認識できた。溝の新旧関係は、066SD から 065SD・067SD、059SD へと新しくなる。061SK は 059SD と途切れている部分を挟んで対応する溝の可能性はある。また、より古い溝として 070SD と 071SD があり、063SK も溝の可能性はある。059SD が N-50°-W 前後、065SD・066SD・067SD が N-80°-W 前後に軸線をもつ南北方向の溝で、東から南へと屈曲する軌道をもつ。出土遺物は少なく、059SD から土師器片、065SD から南部系陶器片と北部系陶器片が出土しているのみである。

060SK・069SK 059SD の南北に接する位置で検出された楕円形の土坑で、にぶい黄褐色・灰黄褐色の極細粒砂の埋土である。066SD と 067SD より新しいが、出土遺物はなかった。

073SK 当初よく分からなかったが、074SK を掘削調査中に検出したもので、径 0.50m 前後で、深さ 0.55m をはかる。上層の埋土は灰黄褐色極細粒砂で、須恵器片と中世土師器片が出土している。

・09Ac 区（第 11 図・第 12 図）

概観

09Ab 区の南 9m の地点にある調査区である。最近の盛土と旧水田耕作土を除去した後、調査に入った。調査区全体に標高 9.7m 前後のにぶい褐色粘土質シルト層上面にて上面の遺構検出を行ない、にぶい褐色粘土層の下にある明黄褐色粘土質シルト層の上面にて主面の遺構検出を行なった。上面の遺構は、中世の北部系陶器片や土師器片が出土しているのみであるが、近世後期～近代のものと考えている。

【上面】

136SK 調査区北端で検出された土坑の一部である。深さ 0.28m で、埋土は灰黄色粘土質シルトに褐色粘土質シルトが混じる斑土であった。北部系陶器片が出土しているが、明確な時期は不明である。その他に、調査区中央付近に 137SD・138SK・139SD があるが、明確な遺構ではなかった。

【主面】

140SD 調査区の北側で検出された、N-75°-W の軸線をもつ東西方向の溝で、幅 0.70m 前後、深さ 0.35m、埋土は灰黄色粘土質シルトとにぶい褐色粘土質シルトの斑土である。遺物は、須恵器片とともに中世のものと思われる土師器片や大窯陶器片が出土している。

・09B 区（第 13 図～第 15 図）

概観

最近の盛土と旧水田耕作土を除去した後、調査に入った。調査区の北端部では標高 10.0m 前後にて、近世後期～近代の水田遺構と溝、土坑が確認できたため、上面の遺構として調査した。この調査区北端部より南側は、旧水田耕作土を除去した標高 9.3m～9.5m 前後にて、遺構検出を行なった。

【上面】

001SD 調査区北端部にて N-85°-W の軸線で東西方向にのびる溝である。幅 0.6m ～ 1.0m、深さ 0.25m の丸底である。南側にある水田遺構 003SN が伴うものと考えられる。埋土は黄灰色～暗灰黄色の極細粒砂で、下層には小礫が入っていた。出土遺物はなかったが、近世後期～近代以後の時期と考えられる。

【主面】

古代の遺構

008SK 調査区中央部の 006SD と 010SD の間に検出できた小型の土坑で、遺構検出の際に須恵器片があり、その出土地点を中心に土坑を検出した。形態は径 0.35m、深さ 0.23m をはかる柱穴状の土坑で、埋土は褐灰色極細粒砂であった。

中世の遺構

004SD 調査区北側にある東西方向の溝である。軸線は N-80°-W 前後で、幅 1.20m、深さ 0.50m の丸底である。埋土は褐灰色の極細粒砂～粘土質シルトを主体にするもので、古瀬戸後 4 新期の古瀬戸陶器鉄釉擦鉢 (E045) などが出土しており、15 世紀後半以後の遺構である。

005SE 調査区北側で 004SD に切られる井戸跡である。埋土は上層はにぶい黄橙色粘土質シルトで、下層は灰色極細粒砂であった。平面円形の丸底のもので、径 2.60m 前後、深さ 1.60m である。埋土は褐灰色の極細粒砂～粘土質シルトを主体にするもので、内部に井戸枠や水溜の施設は確認できなかった。出土遺物に古瀬戸陶器や大窯陶器の破片などが出土しており、15 世紀後半以後の遺構である。

006SD・047SK 調査区中央部西側にて検出できた溝で、西から調査区に入り、南に屈曲している。南北方向の軸線は N-10°-E で、幅 0.90m、深さ 0.35m の丸底である。埋土は黄灰色極細粒砂に黒褐色極細粒砂が混じるもので、出土遺物には古代から中世の土器・陶器を主体に、近世の陶磁器片が少数出土している。006SD は 010SD や 025SD より古い遺構であり、江戸時代以後の時期も考えられるが、遺構の時期は 15 世紀後半以後の時期と考えたい。047SK は、遺構検出の段階では、006SD の北側でほぼ重複して確認された遺構で、006SD を掘削する途中で、006SD に先行する別遺構と認識できた遺構である。幅 1.6m 前後、深さ

0.60m で、006SD の軌道と合うような位置で掘削されているので、006SD 以前の溝の跡の可能性はある。上層の埋土は、006SD とほぼ同じであった。

010SD・025SD 調査区中央部にて検出できた南北方向の溝である。溝の軸線は N-15°-E で調査区西側壁から外にのびる地点で西に折れるようである。溝の規模は、幅 1.0m、深さ 0.35m の丸底である。埋土は黄灰色極細粒砂に灰褐色極細粒砂が少量混じるものである。出土遺物は古代の土師器片が少量出土しているのみで、時期の特定はできないが、古瀬戸後 IV 期～大窯 1 段階の陶器が出土している 048SK や先の 006SD より新しいので、15 世紀後半以後の時期と考えられる。025SD は 010SD が西壁にあたる地点から南東に曲がりながら東にのびる溝として検出した。埋土は 010SD と類似するもので、遺構検出の状況観察から、010SD の下層にあり、より古い遺構として認識できたが、006SD・048SK との遺構の新旧関係は同一であるので、本来は同時期に存在した可能性がある遺構である。幅 1.1m、深さ 0.45m の断面丸底であった。

046SD 調査区の南側で検出した溝で、1 層と 2 層は、旧水田耕作土下から 0.4m 程の深さで堆積しており、東西の溝状に検出でき、046SD の 3 層の上端がこの南西に検出できた。また、上の 2 層からは埋土中に中世以前の土器・陶器とともに近世後期以後の陶磁器片やガラス片が入ったため、下層とは区別して調査を行った。遺構掘削をした結果と土層断面の観察からは、046SD の 1 層と 2 層は、灰黄褐色粘土質シルトと極細粒砂の堆積で、下層の 3 層とはラミナ堆積の有無で区別できるものであり、近世後期～近代以後の水田遺構と判明した。046SD 1 層・2 層の掘削状況を写真撮影後 3 層の掘削を行なった。046SD の 3 層による溝は、幅 4.5m 前後、深さ 0.80m 前後の溝で、3 層の堆積は腐食物を含む黒褐色～オリーブ黒色粘土質シルトに灰色の細粒砂と極細流砂のラミナ堆積がみられるものであった。出土遺物には古代から中世の土師器と陶器が出土しており、古瀬戸後 IV 新期の古瀬戸陶器鉄釉擦鉢 (E091・E092)、生田型式の北部系陶器の碗 (E089) などが出土していることから、15 世紀後半以後の遺構と考えられる。046SD の上端北東部付近にある 027SK・028SK は、09B 区の北側を調査する際に検出

した遺構ではあるが（土層断面 SP19-SP20 の南側にて記録に残る）、09B 区の南側を後に重複して調査した結果（土層断面 SP23-SP24 の北側にて記録に残る）、土層断面の観察からは、046SD の 1 層と 2 層の堆積とほぼ対応する。027SK からは中世の遺物とともに、近世の陶磁器片も出土していることと対応した。このように考えると、027SK の下層にほぼ重複してある 026SK は 046SD3 層の溝と対応する可能性が高い。

048SK 調査区中央部にて検出できた平面円形状の土坑で、南北の径が 2.5m 前後、深さ 0.50m の丸底である。埋土は黄灰色極細粒砂を主体に灰褐色極細粒砂や黒褐色極細粒砂が混じるものである。出土遺物には先に述べたように、古瀬戸後Ⅳ期～大窯 1 段階の陶器（E094・E096～E098）が出土している。

050SK・051SK 調査区南西隅部の 046SD の南東に検出できた土坑で、規模は不明であるが、050SK が深さ 0.28m、051SK が深さ 0.60m をはかる。埋土はどちらも、灰黄褐色粘土質シルトを主体とするものであった。

近世の遺構

034SN・035SN 調査区北端部の上面の遺構の下にて検出できた水田遺構である。034SN が暗褐色粘土質シルト、035SN が灰色極細粒砂の埋土で、近世後期以後の陶磁器片が出土しており、時期は近世後期～近代と思われる。その他に 036SK からも近世の陶磁器片が出土しており、同じ時代の遺構と考えられる。

・09C 区（第 16 図～第 18 図）

概観

最近の盛土と旧水田耕作土を除去した後、調査に入った。調査区の北側では標高 9.6m 前後にて、近世後期～近代の水田遺構と溝、土坑を上面の遺構として調査した。この調査区北側の上面の遺構を掘削した下にて、主面の遺構検出を行なった。

尚、調査区の北端部では、標高 9.35m 前後の暗灰黄色粘土質シルトに黄褐色粘土質シルトが小ブロックで多く入る堆積の上面にて暗オリーブ褐色細粒砂混じり粘土シルトのはいる径 0.30m 程、深さ 0.08m の平面円形の土坑を確認した。そして主面にて、013SK の下の堆積を掘削した。出土遺物はなかったが、溝の堆積である可能性が高いと思われた。

【上面】

001SN・002SN・004SN・005SN 調査区北側にて検出した水田遺構で、001SN と 004SN の間にある畦畔は上面幅 0.4m 前後で、畦畔の軸線は N-15°-E である。水田遺構の深さは 0.10m 前後で、埋土はにぶい黄褐色極細粒砂を主体とするものであった。出土遺物には、古代の須恵器・土師器から中世の土師器・陶器、近世の陶磁器片を主体に出土したが、現代のタイル片やスレート片も出土したため、昭和にかかる水田遺構であった。

【主面】

中世の遺構

019SD・020SD・021SD 調査区南側にて検出した南北方向の溝で、3 条の溝が N-20°-E 前後で北東から南西に並行して流れるようにもみえるが、調査区の幅が狭いこともあって、019SD の溝底の軌道は蛇行しているようにもみえる。埋土は 019SD が灰黄褐色極細粒砂、020SD が暗灰黄色細粒砂、021SD が灰黄色細粒砂に黄褐色細粒砂の小ブロックが少量入るものであった。確認できた遺構の新旧関係では、021SD が 020SD より新しいので、3 条の溝には変遷が予想されるが、出土遺物には古代から古瀬戸後期・大窯 1 段階の陶器・土師器が含まれることから、15 世紀後半以後の遺構群と考えられる。

017SK 調査区中央部にある 018NR の北側にて検出した径 0.50m 前後、深さ 0.12m の平面楕円形の土坑で、埋土は暗灰黄色極細粒砂である。南部系陶器片が出土した。

006SD 調査区中央部の 018NR の南にて検出した東西方向の溝で、軌道は N-80°-E である。形態は幅 0.90m、深さ 0.20m 前後の丸底で、埋土は暗灰黄色細粒砂混じりの極細流砂である。時期不明の南側にある 027SD により切られている。南部系統器が出土しているので、中世前半期の可能性がある。

009SD・012SD 調査区南側で検出した東西方向の溝で、軸線は N-90°-EW ～ N-85°-W である。009SD が幅 1.0m 前後、深さ 0.40m、012SD が幅 2.0m 前後、深さ 0.20m 前後で、どちらも断面丸底であった。埋土はどちらも灰黄褐色極細粒砂を主体とするものである。012SD は 010SD により東側が切られており、出土遺

物にはどちらにも北部系陶器片が含まれることから、中世の近い時期に営まれた遺構と考えられる。

010SD 調査区南端部に検出した南北方向の溝で、幅は東側の遺構上端が調査区外にあるので不明であるが、深さは0.08mである。溝の軸線は、N-5°-Eで、埋土は暗灰黄色極細粒砂である。出土遺物には古瀬戸陶器片があり、遺構の新旧関係から中世後半の遺構と考えられる。

近世の遺構

018NR 調査区中央部に検出した北北東から南南西に流れる流路で、検出した遺構の南北幅は9m程であるが、その間に東西方向にある不定形な溝状の凹みを8ヶ所確認できた。流路の軸線は、N-30°-E前後で、埋土は灰黄褐色極細粒砂を主体に暗灰黄色細粒砂が入る斑土で、ラミナ堆積はみられないが、遺構の形状から、自然流路と考えられる。遺構の時期は、出土遺物に近世の陶磁器片があることから、近世後期以後と考えられる。

・09Da 区 (第19図～第26図)

概観

最近の盛土と旧水田耕作土を除去した後、調査に入った。調査区北側の部分は、標高9.7m前後にて近世後期～近代の水田遺構と溝、土坑が確認できたため、上面の遺構として調査した。主面の遺構検出は、調査区の中央部では標高10.0m前後にて、他の部分では9.6m～9.7m前後にて遺構検出を行なった。

【上面】

001SD・002SD・004SD 調査区北端部にてN-90°-EWの軸線で東西方向にのびる溝である。これらの溝の時期は、上面の水田遺構より新しいことから、近代以後の可能性が高い。規模の分かる002SDと004SDは幅1.2m～1.4mで、深さは0.10m前後の比較的緩い丸底である。埋土は、001SDが灰黄褐色極細粒砂、002SDが暗灰黄色粘土質シルト、004SDが暗灰黄色極細粒砂である。

011SDに伴う水田遺構 011SDは調査区北端部にてN-87°-Eの軸線で東西方向にのびる溝で、この溝に伴う水田遺構と考えられるものとして、006SN・007SN・009SN・010SN・012SN～015SNがある。011SDは幅0.90m前後、深さ0.10m前後で、その他

の水田遺構はおおよその規模が分かる013SNで、南北5.6m、東西3.0mを測り、耕作土の深さは0.05m前後であった。埋土は、011SDが黄褐色極細粒砂、009SNが黄灰色極細粒砂、012SN・015SNが灰黄褐色粘土質シルトである。この水田遺構の時期は、009SNから須恵器片が出土しているが、近世後期～近代以後と思われる。この水田遺構より新しい遺構として、003SD・005SK・008SDがある。

【主面】

古代の遺構

調査区の北側と調査区の南側では、須恵器や土師器が出土し、遺構検出においては中世の遺構の下には古代の竪穴建物などの遺構が存在するものと考えて、より古い特徴をもつ堆積を遺構として検出した。調査区北側の中世の溝より古い竪穴建物は、038SIから中世の北部系陶器片などが出土するが、確認した層位からは現在でも古代の遺構と考えている。」古代の柱列として検出した037SK・036SK・108SK・115SKは江戸時代の遺構と考えられるようになった。調査区南側において、焼土面が存在したことから竪穴建物として検出した遺構は、遺構掘削中から、中世の陶器片が出土することや、その下層から大型の溝が3条、大型土坑が2基確認できたこともあり(第26図09Da区南端部下面)、ほとんどが中世以後の遺構として認識を変更した。以上の検討の結果をふまえて、主要な遺構について述べる。

018SI・096SI・101SI・118SI 調査区北側部の中世以後の遺構と考えられる089SDと090SDより古いもので、須恵器片が出土している竪穴建物で、隅丸方形からやや台形気味の長方形の平面形態をもつ。一辺の規模が確認できる018SIの一辺が2.4m、101SIの短辺が1.8mと一辺2m～3m程の大きさのものばかりである。残存していた遺構の深さは0.05m～0.15mで、あまり残存状況は良くない。101SIの西辺に沿った位置に中世の土師器片が出土する102SKがあり、018SIは西壁断面にみられた新しい土坑状の掘り込みを一緒に掘削した為か、須恵器などとともに南部系陶器片も出土している。遺構の埋土は、018SIが上層に褐灰色極細粒砂、下層にぶい黄褐色極細粒砂、101SIが灰黄色極細粒砂を主体とするもので、その他も類似する色

第2章 遺構

調をもつものであった。

022SD・025SI・026SI・107SI 調査区北側部の018SIの南東に位置する竪穴建物で、022SDのような幅0.20m～0.30m、深さ0.10m前後の断面丸底の小溝がやや台形気味の長方形にめぐるもので、どれも短辺が1.8m前後、長辺が3.0m前後のものである。中世以後の遺構と考えられる145SKや037SKにより切られており、出土遺物には土師器と須恵器片と灰釉陶器片がみられる。107SI→022SD→025SI・018SI→026SI→027SIの新旧関係がみられる。埋土は022SDが炭化物をわずかに含む暗灰黄色極細粒砂、025SIが黄灰色極細粒砂、026SIが暗灰黄色極細粒砂に黄灰色極細粒砂が混じるもの、107SIが炭化物をわずかに含む灰黄褐色～黄褐色の極細粒砂である。

027SI・038SI・111SI 調査区北側部の026SIの南に検出した竪穴建物で、111SI→027SI→038SIの新旧関係がみられ、029SK・030SK・036SK・108SK・125SKなどの中世以後の土坑により切られている。その為か、027SI・038SIでは、古代の須恵器・土師器片が主体に出土しているが、中世の陶器片も出土している。027SIは短辺が2.2m、長辺が3.0mの隅丸長方形の平面で、周囲に0.30m前後、深さ0.05m程の周溝がめぐる。101SIも同様な小溝が北側をめぐるもので、南北の辺が5.0mの方形の平面のものである。038SIは南北4.2m程で、深さ0.30m前後と残存状態も良いように思われたが、030SKを始めとする中世以後の遺構の掘り込みがある。遺構の埋土は、027SIがにぶい黄褐色極細粒砂に灰黄褐色極細粒砂が混じるもの、038SIがにぶい黄褐色極細粒砂、111SIがにぶい黄褐色極細粒砂に灰黄褐色極細粒砂が混じるものであった。

065SI 調査区北側部の中世以後の遺構と考えられる086SDと055SDより古いもので、須恵器片が出土している竪穴建物で、周囲の輪郭がより新しい土坑などにより掘削されていて明確ではないが、一辺2.5m前後のものと考えられる。深さは0.15m前後で、にぶい黄褐色極細粒砂と黄褐色極細粒砂の斑土であった。

038SIと重複する平面隅丸長方形～楕円形の125SKと126SKは038SIに伴うか、より古い遺構と考えられる。

082SK 調査区の北側の東壁にかかる地点に検出した平面円形の土坑で、径1.20m、深さ0.30mの断面丸

底である。埋土は上層が灰黄褐色極細粒砂、下層が灰黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの斑土である。須恵器片が出土しており、055SDより古いようなので、古代の遺構とした。

中世の遺構

044SD・047SD・055SD 調査区北端部にて検出した中世以後の溝で、044SDは北から西へ折れて流れている。047SDはN-90°-EWのほぼ東西にはしる溝で、軸線は044SDや055SDともほぼ同じようである。044SDは東から北へ曲がって止まる溝である。

044SDは幅1.40m前後、深さ0.20m前後の断面丸底で、埋土は黄褐色～にぶい黄褐色の極細粒砂から粘土質シルトである。047SDは幅1.1m、深さ0.20m前後の断面丸底で、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、出土遺物に中世の北部系陶器片がみられた。055SDは幅1.50m前後、深さ0.10m前後で、埋土は黄褐色粘土質シルトであった。

Da1SB 調査区北端部にて検出した052SK(053SKも含む)・084SK・081SK・066SK・062SK・058SKの6ヶ所の土坑により構成した建物で、長辺3.2m、短辺2.0mの2間×1間のものである。層序では、古代の竪穴建物065SIや中世以後の溝055SDより新しい遺構で、066SKからは大窯期にかかる陶器片が出土している。構成する柱穴は、径0.50m～0.70mのもので、深さは0.50mの053SK、深さ0.15mの081SKなどのように幅がみられる。柱穴の埋土は灰黄褐色極細粒砂～粘土質シルトを主体とするものである。

085SD・086SD・087SD・

089SD・090SD・091SK

調査区北側にて検出した溝で、下面に243SD～246SDがある。遺構の新旧関係は、090SDから089SDと091SD、086SD、087SD、085SDへと変遷する。溝の軸線はN-20°-E前後をもつもので、085SDは南南西から北西に曲がる軌道をもつが、その他の溝は南南西から南東に曲がる軌道をもつようである。090SDのほぼ上に重複する089SDと091SDは、3.2mの溝が途切れる部分があるので、この地点に区画の出入り口があるようである。溝の規模は、幅1.0m～2.0mで、深さ0.40m～0.80mで、090SDのようなより古い溝に深くなる傾向がある。埋土はにぶい黄褐色～灰

黄褐色の極細粒砂を主体とするもので、検出時には新旧関係の新しい溝の方が、暗い色調であった。溝の時期は軌道の異なる 085SD には中世の遺物とともに近世の陶器片が入ることから江戸時代の遺構と考えられ、その他の溝は古瀬戸後 4 期～大窯 I 段階の陶器片が出土することから、15 世紀以後の 16 世紀のものと考えられる。

DaSB2 調査区北側の東壁に沿って検出した 037SK・036SK・108SK・115SK の径 1.1m ～ 1.5m の平面隅丸方形から楕円形で検出した土坑で、遺構検出時には、古代の竪穴建物より新しい掘立柱建物の 3 間分の柱列と考えて調査を行い、037SK・036SK・108SK の 3 ヶ所では土坑内に柱痕跡状の堆積を確認した。発掘調査時には、この柱列に伴う別の柱列を確認することができなかった。出土遺物を整理すると、須恵器とともに 115SK からは中世の土師器片や南部系陶器片が入っており、古代の遺構ではなく、中世以後の遺構であれば、西 4m にある西壁に沿って、020SK (021SK も含む)・028SK・029SK・033SK (032SK も含むか) の 4 基の土坑と位置が対応することが判明した。この場合、029SK から江戸時代前期の志野釉碗が出土しており、この建物跡は江戸時代の遺構と考えられることとなる。また土坑の平面形態や並びの軸線は合うが、115SK は底面の標高が 8.70m と他の土坑より 0.5m ～ 0.7m 程深くなる為、その評価には慎重になる必要があるが、中世以後で江戸時代の遺物が出土する本遺跡の特徴を理解する上で、検討に値すると考え、一つの復元案とした。

他の柱列

調査区北側の DaSB2 の付近で推定できる柱列として 2 ヶ所あるが、組み合う柱列はみつからなかった。一つは DaSB3 で DaSB2 の北に 093SK・098SK・102SK の 2 間分で、柱間は 2.0m の間隔である。土坑の大きさは長径 0.50m ～ 0.90m、短径 0.40m ～ 0.60m の平面楕円形で、深さ 0.10m ～ 0.30m である。埋土は、093SK が黄灰色極細粒砂、098SK が褐灰色極細粒砂、102SK が黄褐色極細粒砂である。もう一つは DaSB4 で DaSB2 と重複する範囲で検出したもので、145SK・125SK・128SK の 2 間分で、柱間は 4.4m と広い。土坑の形態は径 0.50m ～ 0.60m の平面隅丸方形から

楕円形で、深さは 0.30m ～ 0.40m である。埋土は褐灰色や暗灰黄色、にぶい黄褐色の極細粒砂などで、125SK の断面では幅 0.17m 程の柱痕跡らしき堆積がみられた。

136SD・138SD・147SD・150SD・151SD

調査区中央部にて検出した溝で、150SD が最も古く、その後 136SD・147SD、138SD・151SD の順の新旧関係が観察できた。150SD は灰黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの斑土で埋まるもので、幅 2m を超える深さ 0.25m とやや浅い皿状の断面である。136SD と 147SD は調査区西壁から検出できたが、東には明確に伸びず、土坑になる可能性もある。136SD と 147SD は幅 0.80m 前後、深さ 0.40m 程の断面丸底である。どちらも埋土はにぶい黄褐色～黄褐色の粘土質シルトを主体とする斑土である。138SD は N-90°-EW のほぼ東西方向にのびる溝で、形態は幅 2.50m 前後、深さ 0.60m の断面丸底である。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトを主体とするものである。151SD は 138SD の南で、ほぼ同じ軸線をもつ東西方向の溝で、幅 1.20m、深さ 0.35m 前後である。溝の底面が「V」字状に不整形になる断面形であった。150SD を除く溝からは、中世の北部系陶器片や古瀬戸後 4 期～大窯 I 段階の陶器片が出土していることから、150SD を除いて 15 世紀後半以後のものと考えられる。138SD からは、石製の茶臼 (S009) が出土した。またこの付近にある 137SK や 152SK も同様な時期の遺構と考えられる。

160SK・164SD・202SD・209SD・212SD・229SK・230SK・234SD

調査区南端部の下面にて確認できた溝と土坑である。先の古代の遺構について述べた際に、発掘調査中に見解を大きく変更した部分である。遺構を掘削した結果として、下面にて確認した 164SD・202SD・209SD・212SD・229SK・230SK・234SD があり、その後上層の主面で確認した 166SK・161SK・165SK・186SK・185SK・199SK・201SK などが径 1.0m を超える大型土坑として 0.20m ～ 0.40m 前後掘削されたものと思われる。これらの土坑を埋める埋土は灰オリーブ色や褐灰色の粘土質シルトに焼土粒や炭化物を少量含むような斑土であった。上層の遺構検出では、埋土に含ま

第2章 遺 構

れる焼土粒や炭化物が平面的に広がるものとして認識した結果であった。160SK も同様に初めは竪穴建物として認識して遺構検出を行なったが、断面観察などの結果、南北 2.7m、東西は 1.5m を確認した平面隅丸形状の土坑である。断面は深さ 0.75m 前後の底面が不整形な箱形で、堆積状況の観察では複数の土坑状の遺構が重複しているようにも見えるものであった。209SD・212SD・229SK・234SD も深さが 0.70m ～ 0.80m を測り、底面がやや不整形な断面形をする部分があった。229SK と 230SK は径 2.0m ～ 2.2m をはかる平面楕円形の土坑で、230SK は深さ 0.40m の丸底の土坑である。164SD は 264SD と南側が重複する溝で、幅 2.0m 前後で「コ」の字状に西を囲み、229SK の北東からやや幅が狭くなり、北にのびる。この溝の先には 151SD があり、調査区の東において、合流する可能性もある。209SD は、幅 2.0m 前後の溝で、南側にて弥生時代中期の深鉢が出土し、方形周溝墓の周溝の可能性も考えた。しかし、南の 09Db 区にてその続きと考えられる 265SD があり、164SD と同じように「コ」の字状に西を囲むようである。202SD は調査区の東壁に沿った位置で、N-5°-E の軸線ではしる南北方向の溝で、164SD や 209SD より古いようであり、209SD により途切れる。幅 0.50m、深さ 0.30m 前後の断面やや「V」字形である。埋土は暗灰黄色粘土質シルトである。これらの遺構の時期は 15 世紀後半～ 16 世紀にかかる溝と考えられる 220SD より古いが、出土遺物には古瀬戸後期から大窯期にかかる陶器片が出土することから、15 世紀後半～ 16 世紀にかかる時期と考えたい。

217SK 調査区南端にて検出した土坑で、220SD を少し掘り込む位置にある平面水滴形の楕円形、断面丸底の土坑で、規模は長径 1.20m、短径 0.70m、深さ 0.55m である。埋土は灰オリーブ粘土質シルトを主体とするものであった。出土遺物に生田型式の北部系陶器や大窯期にかかるような陶器片があり、15 世紀後半～ 16 世紀の遺構と思われる。同様な形態と思われる土坑 225SK が 220SD の南にみられた。

220SD 調査区の南端部に N-75°-W の軸線をもつ東西方向の溝で 09Db 区の北端部にある 264SK（上層部分は 251SK）につながる。調査区東壁に沿った部分の

輪郭はこの部分から北東に曲がる可能性がある。溝の形態は、幅 1.3m ～ 1.6m、深さ 0.50m ～ 0.70m であるが、底面は標高 9.10m 前後の丸底である。埋土は暗灰黄色粘土シルトと黒褐色粘土質シルトの斑土である出土遺物には古瀬戸後 4 期～大窯 I 段階の陶器片がみられることから 15 世紀後半～ 16 世紀の遺構と考えられる。この溝から石製の茶臼の下臼（S008）が出土しており、138SD から出土したものと類似するものである。

・ 09Db 区 (第 25 図・第 27 図)

概観

09Da 区の南に南接する調査区で、公園造成に伴う盛土と旧耕作土などの表土層を除去した後、調査に入った。その後近代以後の水田耕作土と考えられた明褐色極細粒砂に黄褐色細粒砂を含む堆積を検出 1 として人力掘削を行い、上面の遺構検出を行なった。上面では中世後半から近世以後の遺構がみられ、その下層にて中世の遺構がみられた主面の調査を行った。近年の攪乱が、基盤層にまで達している部分が一部あったが、全体の遺構分布は把握できた。遺構検出面のレベルは上面が標高 9.50m 前後、主面が標高 9.3m ～ 9.4m にて遺構検出をした。

【上面】

主面に関係する遺構は主面の遺構の部分で述べ、ここでは上面のみに関する遺構について述べる。

260SD・261SD・262SD・263SD 北北東から南南西にのびる細い溝で、並行する位置で検出できた。軸線は 260SD が N-15°-E、261SD が N-20°-E、262SD が N-22°-E、263SD が N-40°-E で、南側の溝ほど東への振れが大きくなる。形態は、幅 0.40m 前後、深さ 0.10m ～ 0.20m 前後で、断面は丸底である。埋土は 260SD が褐灰色極細粒砂、261SD が明黄褐色極細粒砂、262SD・263SD が暗灰黄色極細粒砂である。出土遺物には古代～中世の土師器や陶器片が出土するが、遺構の層序からは、近世後期以後の遺構と思われる。

【主面】

266SK 調査区北側の東壁に沿って確認した土坑で、土坑の西側部分である。南北の幅 2.20m、深さは 0.35m、埋土は暗灰黄色極細粒砂で、断面はやや底面が不整な丸底である。出土遺物には須恵器片がみ

られるので、古代～中世の遺構と考えられる。上面の257SKはこの土坑の上層を含むものである。

268SD・269SD・282SD 調査区北側から中央部にかけて、軸線がN-15°E前後で北北東から南南西に流れる溝である。調査区東壁の堆積状況から検討すると、268SDと269SDが新しく、その下に282SDがみられる。268SDの北側で267SKとして調査されている土坑は、本来268SDの一部である可能性が高い。また268SDは269SDより古い。規模が分かる268SD・269SDは幅1.00m～1.20mで、268SDの深さが0.40m、269SDの深さが0.60mである。断面形も268SD・282SDは緩い丸底であるが、269SDはやや箱形をする部分や「V」字状になる部分がみられる。埋土は褐灰色極細粒砂に少量の灰褐色極細粒砂が混じるものである。出土遺物には古代の須恵器・灰陶器・土師器質出土するのみであるが、区画溝であることから、中世以後の遺構と思われる。

270SK 調査区中央部の東壁に沿って確認した平面円形状の土坑で、土坑の西側端部分である。南北の幅2.0m前後で南側を東西方向の溝271SDにより切られている。断面は丸底で、深さは0.42m、埋土は褐灰色極細粒砂を主体とするものである。出土遺物には須恵器片がみられるので、古代～中世の遺構と考えられる。

271SD・288SD 調査区の中央部にて検出した溝で、271SDは軸線がN-80°Wの東西方向の溝、288SDは軸線がN-15°Wの南北方向の溝である。288SDは271SDと283SDより古く、西壁にあたる位置で南南東から西に折れるようである。溝の形態は、271SDが幅0.30m前後、深さ0.20m、288SDが幅1.00m、深さ0.75mで、どちらも断面は丸底である。埋土は271SDが黄灰色極細粒砂、288SDが褐灰色極細粒砂とにぶい黄褐色極細粒砂の斑土であった。出土遺物には、271SDから中世の土師器の小皿、北部系陶器片が、288SDから大窯期にかかる陶器片がみられることから、15世紀後半以後の遺構と考えられる。

283SD・289SD 調査区の南側でほぼ重複する位置で検出した軸線がN-85°Eの東西方向の溝で、283SDが289SDより新しい。2条の溝の形態は類似しており、幅2.0m～2.2m、深さ0.80m前後で、断面やや緩い「V」字状のものである。埋土は283SDが褐灰色極細粒砂、

289SDが灰黄褐色極細粒砂で、289SDの下部には基盤砂層の灰黄色細粒砂がより多く含まれる。出土遺物に古瀬戸後4期～大窯I段階の陶器片が含まれ、15世紀後半～16世紀にかけてのものと考えられる。これらの溝の南側下層に出土遺物はないが、黄褐色極細粒砂や暗灰黄色極細粒砂の埋土である290SKが確認できたが、平面形が不明瞭で、性格は不明である。

・09Dc 北区 (第28図・第29図)

概観

09Db区から南へ約3m離れた地点にある調査区である。近年の盛土や旧水田耕作土などの表土層を除去した後に調査に入った。近年の攪乱が基盤層におよぶ部分が一部あるが、全体の遺構分布は把握できるものであった。検出面は、近世後期以後の水田遺構がみられる上面が標高9.5m前後、その下の中世の遺構がある主面が標高9.0m～9.1mに分けて調査をした。

【上面】

292SN・293SN・294SN・295SN

上面幅0.30m～0.40mの畦畔により区切られた近世後期以後の水田遺構である。4筆確認でき、293SNと294SNの間にある南北の畦畔の軸線はN-5°Eである。一筆の大きさは不明であるが、293SNと294SNは南北10.4m程である。埋土は灰黄褐色～にぶい黄褐色極細粒砂の斑土である。出土遺物には古代から中世の土師器・陶器が出土している。

【主面】

303SD・304SD 調査区北端部から南北に検出した溝である。2条の溝はほぼ並行していて、軸線はN-10°Eである。304SDは303SDより新しく304SDの幅は0.80m前後、深さ0.45m、303SDは幅は不明であるが、深さは0.40mを超えるものである。どちらも断面丸底のもので、埋土は灰黄褐色の極細粒砂～粘土質シルトである。303SDからは、中世の土師器や古瀬戸陶器が出土したことから、15世紀後半以後のものである。

305NR 調査区中央部にて検出した自然流路と思われるもので、埋土は黒褐色粘土質シルトを主体に暗灰黄色細粒砂が斑土状に混じるものである。303SD・304SDよりは古いが、中世の土師器鍋編などが出土しており、15世紀以後の遺構である。この自然流路

の上に平面円形の土坑状に検出した 306SD があるが、305NR の上層にあたる可能性もある。

・09Dc 南区 (第 29 図)

概観

09Dc 北区の南 3m に設定した最も南にある調査区である。近年の盛土などの表土を除去した標高 9.6m ～ 9.7m にて遺構検出を行なった。出土遺物は非常に少なく、中世の古瀬戸期～大窯期の陶器片とともに近世以後の陶磁器片も出土したが、中世以前の明確な遺構はみられない。

【主面】

296SD 調査区北端部から南北にのびる溝で、南側に西に折れる可能性が高い。本来は他の遺構より上の面にて検出される遺構であった。幅 0.30m 前後、深さ 0.20m で、軸線は N-5°-E である。埋土はにぶい黄色極細粒砂である。性格は不明で、中世の陶器片が出土したが、層序からは近世後期～近代以後のものである。

299SN 調査区中央部に検出した水田遺構と思われる遺構で、N-15°-E の軸線をもつ畦畔が東側の上端になる。埋土は黒褐色極細粒砂で、298SK・300SK・301SK などがこの遺構の上から掘り込まれている。この 299SN から、中世の陶器片が出土しているが、これより新しい 298SK から出土した近世陶磁器片がみられるのと同様の時期と考えられる。

・09Ea 区 (第 30 図)

概観

09Aa 区南側の県道名古屋江南線を挟んだ西にある調査区で、調査区の北端部分は近年の盛土などが表土層下の標高 10.2m ～ 10.3m にて、遺構検出ができたが、その南側は 09Eb 区の中央部付近まで、近年の攪乱が基盤砂層にまでおよんでいて、遺構は残存していなかった。

001SD 調査区北端部に南北にのびる溝として検出した。軸線はほぼ N-0°-EW である。幅 1.30m、深さ 0.55m で、断面は丸底である。埋土は灰黄褐色極細粒砂を主体に黄褐色粘土質シルトと暗灰黄色粘土シルトの細かいブロックが混じる斑土であった。遺物は、古代の須恵器・土師器から中世の陶器・土師器までが主体に出土するが、1 点近世の陶器片が出土しており、中世後半期の可能性が高いが、江戸時代より新しい時期である

可能性がある。

002SD 調査区北端部で東西にのびる溝として検出した。軸線はほぼ N-90°-EW である。幅 2.0m 以上、深さ 0.75m で、断面は緩い丸底である。埋土は上層が褐色極細粒砂や褐灰色粘土質シルトで、下層が灰黄色粘土質シルトを主体とするものであった。遺物は、古代の須恵器・土師器から中世の陶器・土師器までが主体に出土するが、2 点近世の陶器片が出土しており、中世後半期の可能性が高いが、江戸時代より新しい時期である可能性がある。

・09Eb 区 (第 30 図)

概観

09Ea 区の南に隣接する調査区で、09Ea 区の北側から入る近年の攪乱が調査区の南側までおよんでいて、遺構が確認できたのは、調査区の南端部分のみであった。この部分では近年の盛土の表土層と旧畑耕作土と思われる堆積を除くと、標高 9.7m ～ 9.8m にて、中世以前の遺構が検出できた。

【主面】

005SD・006SD N-85°-W の軸線をもつ東西方向の溝で、005SD と 006SD はほぼ重複しており、007SD より新しい。09Ab 区にある 101SD と対応する可能性がある。溝の形態は、幅 0.50m、深さ 0.40m 前後で、断面は丸底である。埋土はどちらもにぶい黄褐色粘土質シルトである。出土遺物には南部系陶器片や中世の土師器片があるので中世と考えておきたい。

007SD 調査区内で東から南西に折れる溝である。南西に折れた部分の軸線は N-15°-E である。005SD・006SD より古い。溝の形態は、幅 1.20m ～ 1.40m、深さ 0.30m 前後である。断面形はやや緩い丸底で、上層が灰黄褐色粘土質シルト、下層がにぶい黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの斑土であった。出土遺物はないが、中世の遺構と考えられる。その他に出土遺物はないが、007SD より古い遺構として、004SK・009SK・010SK などがある。

・09Ec 区 (第 30 図)

概観

09Eb 区の南に続く調査区であるが、調査区の北端部分と南端部分において、近年の盛土などの表土層を除去した、標高 9.8m 前後にて遺構が確認できたが、調

査区中央部付近は近年の攪乱が基盤砂層までおよんでいて、遺構が残存していなかった。

【主面】

011SK 調査区の北西隅部にて検出した平面円形状の土坑で、径 0.80m 前後、深さ 0.48m、埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトににぶい黄褐色粘土質シルトが少量混じる斑土である。出土遺物に須恵器片があり、奈良時代の遺構である可能性がある。

014SD 調査区南端部に検出した溝で、N-25°-E の軸線で北東から南西にはしり、南壁にあたる位置で西か東に折れる可能性がある。幅 1.40m、深さ 0.20m で、断面は緩い丸底である。埋土はにぶい黄褐色極細粒砂で、下部はこれに黄褐色極細粒砂が入る斑土である。出土遺物はないが、中世の遺構と考えられる。

012SI 平面隅丸方形の堅穴建物と思われるもので、一辺 2.30m をはかる。壁に沿って幅 0.20m 前後、深さ 0.05m の周溝がめぐり、内部には 015SK のような小ピットや 016SK のような土坑が伴う可能性がある。012SI の埋土は、にぶい黄褐色極細粒砂で、微量の炭化物が入っていた。016SK は径 0.55m、深さ 0.08m の浅い丸底の土坑で、012SI と同じにぶい黄褐色極細粒砂が入る。出土遺物には須恵器片があり、奈良時代の遺構である可能性がある。

・ 09Ed 区 (第 31 図・第 32 図)

概観

09Ec 区の南につづく調査区で、近年の盛土を中心とする表土層を除去した後、調査に入った。一番上にある近代以後の水田耕作土層を 018SN として人力掘削で調査し、その後遺構検出を行なった。

【主面】

古代の遺構

035SI 調査区の南側にて検出した台形気味の隅丸方形の堅穴建物と考えるもので、長辺が 2.0m 以上、短辺が 1.70m、深さ 0.18m のものである。出土遺物には、須恵器があることから、奈良時代の遺構と考えた。その他に、これより古い堆積で出土遺物はないが、040SI・045SI があり、同様な堅穴建物の可能性がある。

中世の遺構

034SK 調査区の南側で 035SI と重複する土坑で、035SI より新しい。径 1.20m、深さ 0.60m で、断面逆

台形で、底面は平底状になっていた。埋土は褐灰色極細粒砂を主体とするもので、出土遺物には古代の須恵器・土師器・灰釉陶器とともに、中世の南部系陶器片が出土していることから、中世前半の遺構と考えたい。また、出土遺物はないが、同様な形状の土坑 051SK が、調査区南東隅にあり、この土坑と関係がある可能性がある。

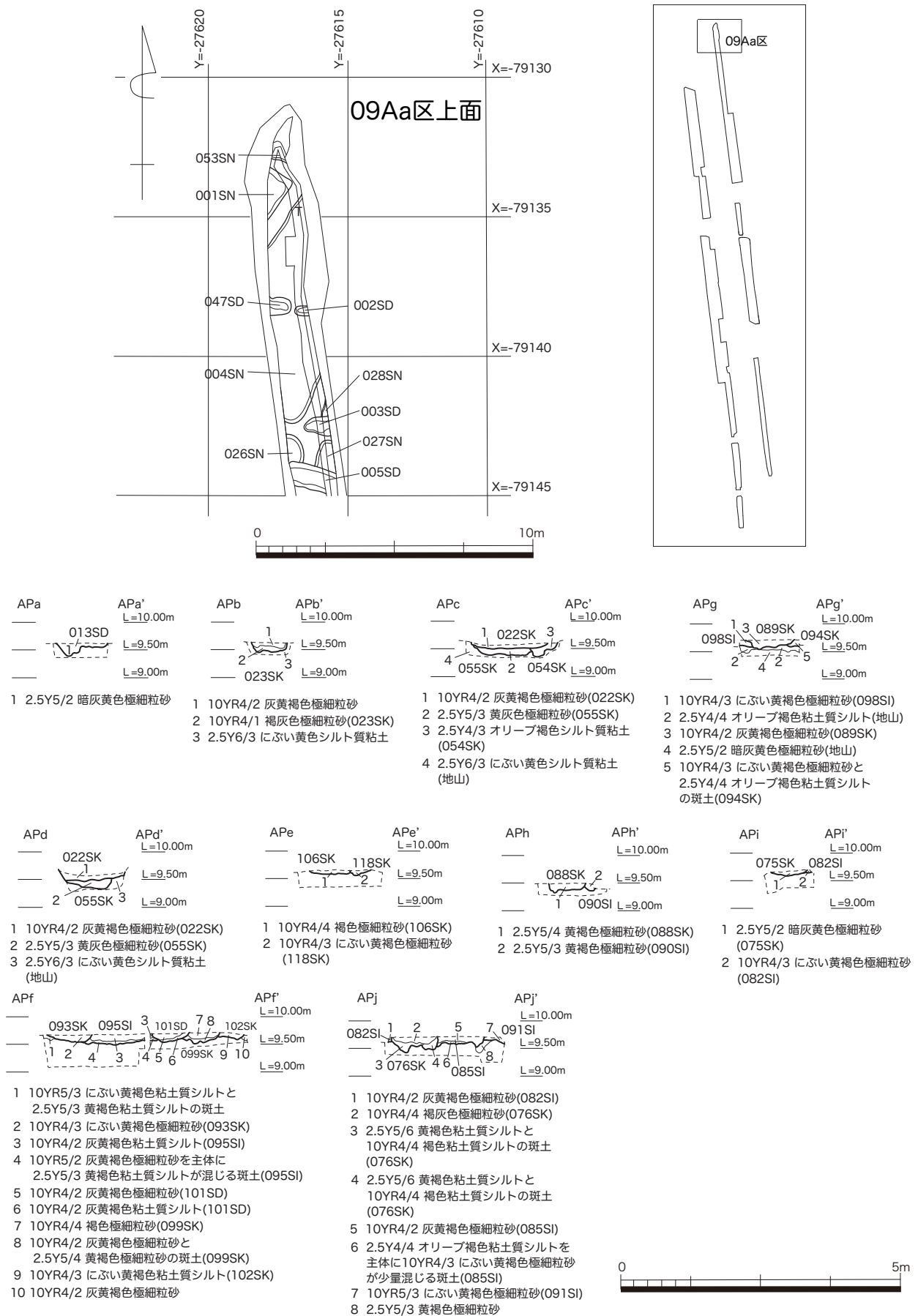
019SD・020SD・033SD・053SD

調査区の中央部南側で検出した溝 4 条で、N-80°-W の軸線をもつ東西方向の溝で、019SD・020SD・053SD は西壁際にて、南に折れるようである。溝の重複関係は、053SD が最も古く、019SD と 033SD がそれより新しい溝である。溝の形態は 019SD が幅 0.70m 前後、深さ 0.22m の断面丸底、020SD が幅は 1.0m 程で深さ 0.15m の断面丸底、033SD が幅 2.00m、深さ 0.20m の断面皿状の丸底、053SD が他の溝と上端が重複し幅は不明であるが、深さ 0.48m の断面丸底でやや深いものであった。埋土はどの溝も灰黄褐色粘土質シルトを主体とするものであった。溝の時期は重複関係の古い 053SD から中世の北部系統器とともに近世の陶器片が 1 点出土しており、この遺物を中心にと考えると、09Ed 区の遺構の大部分は江戸時代以後のものとなるが、層序を重視すると、中世後半期の時期と考えられる。033SD と 053SD の上から中世の遺物が出土している 021SK や 026SK・025SD が掘られている。

025SD・027SD 調査区中央部の 033SD の北で検出した溝で、N-20°-E の軸線もつ。溝の軌道は、南南西からのびて調査区内で西に折れている。溝の新旧関係は、南にある 033SD などより新しく、025SD より 027SD が新しく、027SD の北にある 029SD・030SD より古い、また 025SD の南側で 022SK・023SK・024SK により、025SD の北側で 052SK により掘り込まれている。どちらの溝も幅 1.00m～1.20m、深さ 0.20m 程の断面丸底で、埋土は 025SD が浅黄色極細粒砂に褐灰色極細粒砂が混じるもの、027SD が褐灰色極細粒砂に灰黄色極細粒砂が混じるものである。遺構の時期は、025SD から中世の北部系陶器と土師器の鍋片などが出土しており、15 世紀以後と思われる。

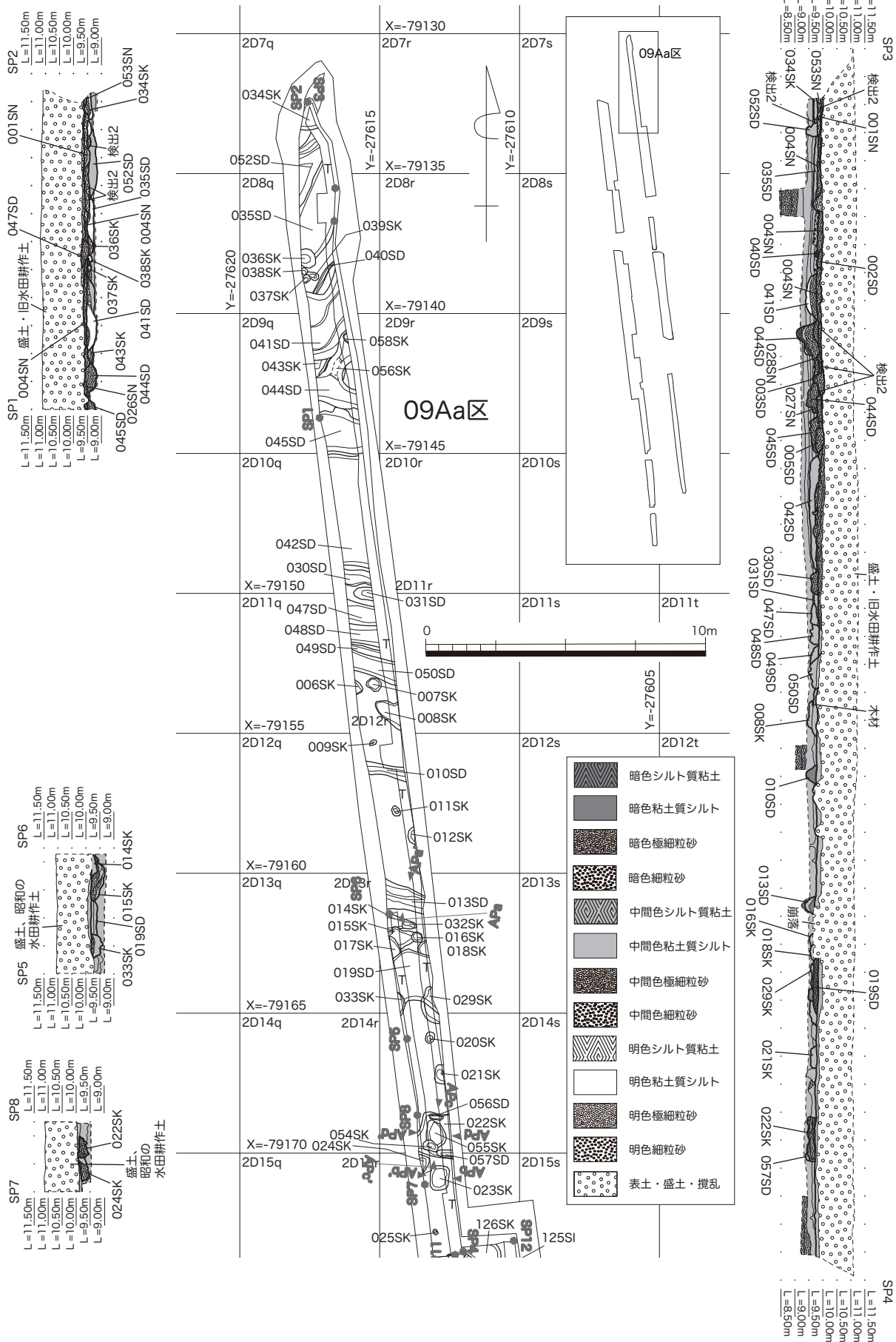
029SD・030SD 調査区中央部の 027SD の北側で検出した溝で、N-15°-E 前後の軸線もつ。溝の軌道は、

北北東からのびて調査区内で西に折れている。溝の新旧関係は、南にある 027SD などより新しく、030SD が 029SD より新しい。029SD は 030SD により西側上端が切られているが、幅 1.0m 前後、深 0.40m の断面丸底、030SD が幅 0.65m、深さ 0.30m の断面丸底である。埋土は 029SD が黄灰色極細粒砂とにぶい黄色極細粒砂の斑土、030SD が褐灰色極細粒砂とにぶい黄色極細粒砂の斑土である。遺構の時期は、029SD から古代の須恵器片が出土しているのみで、遺構の新旧関係を重視するならば、15 世紀～16 世紀以後と思われる。

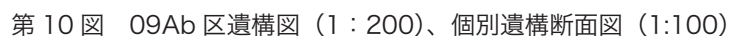


第 8 図 09Aa 区上面遺構図 (1 : 200)、個別遺構断面図 (1 : 100)

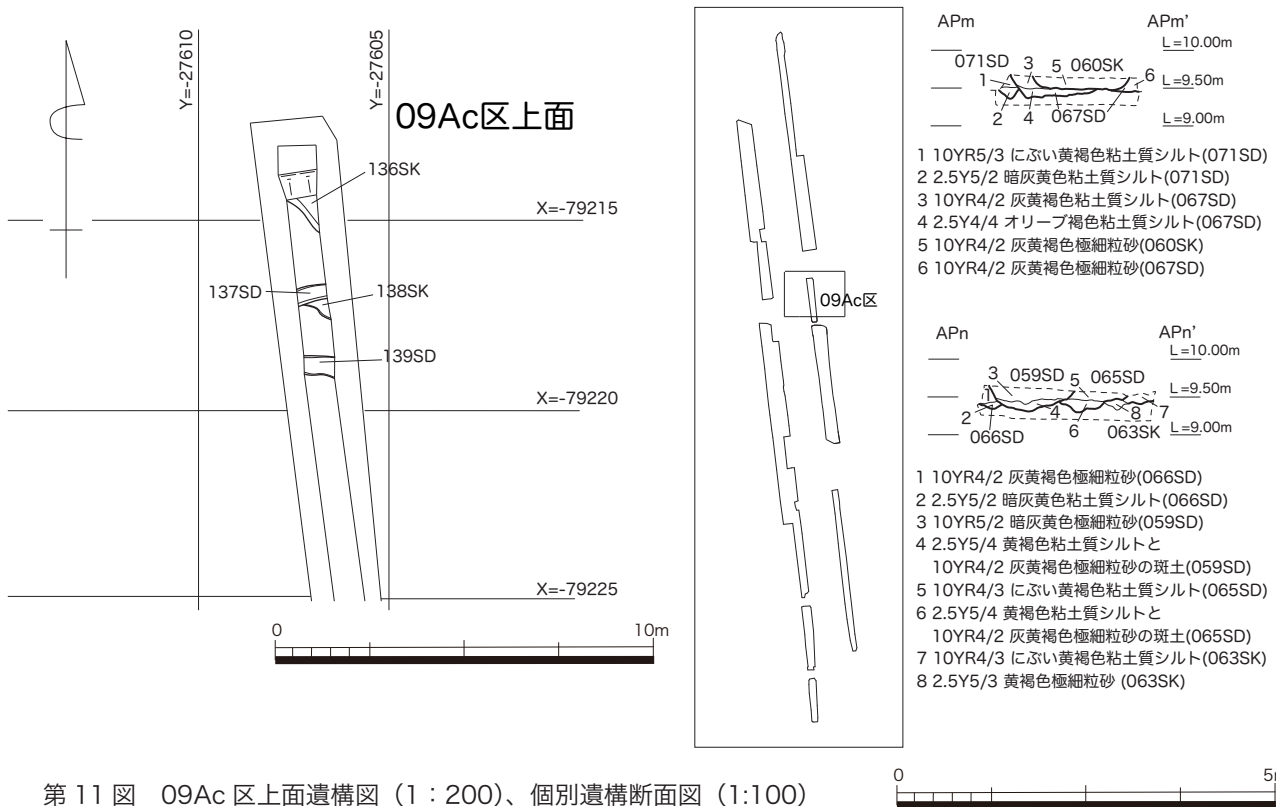
第2章 遺 構



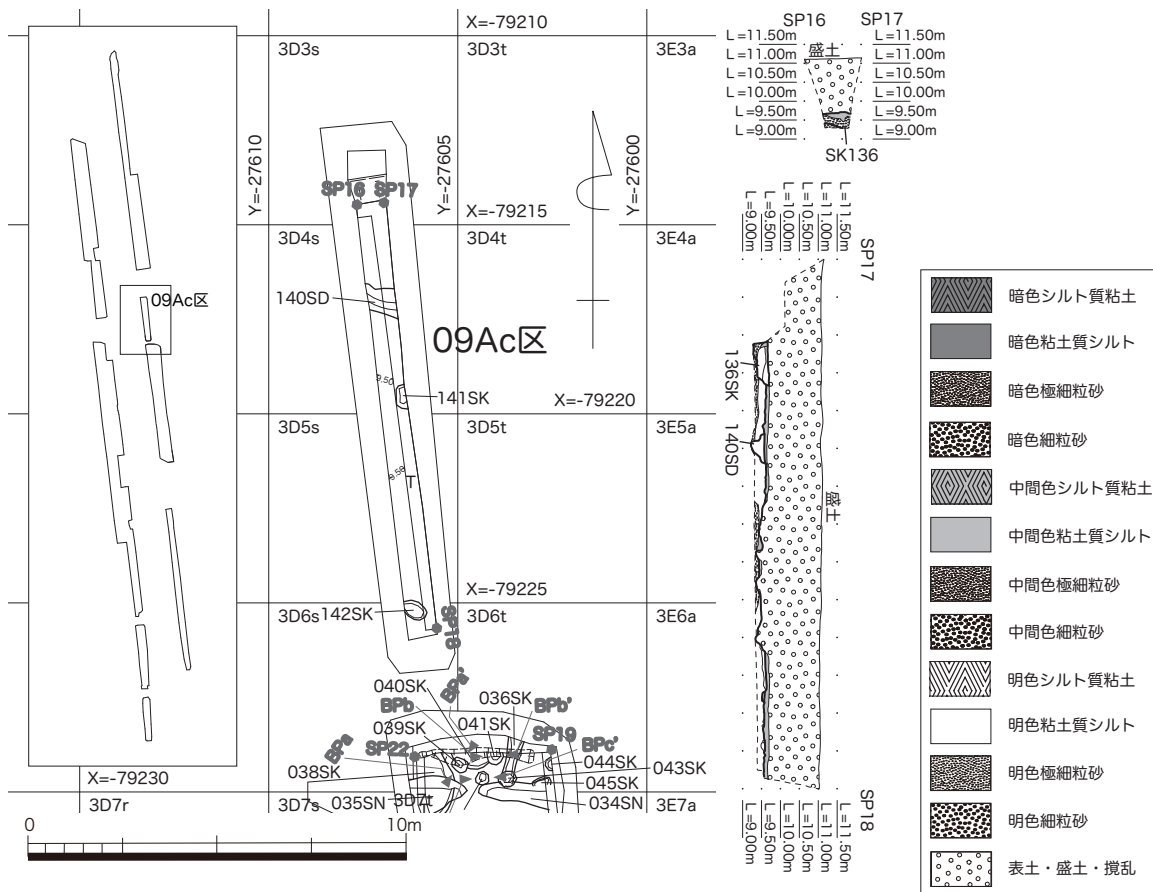
第9図 09Aa区遺構図 (1:200)



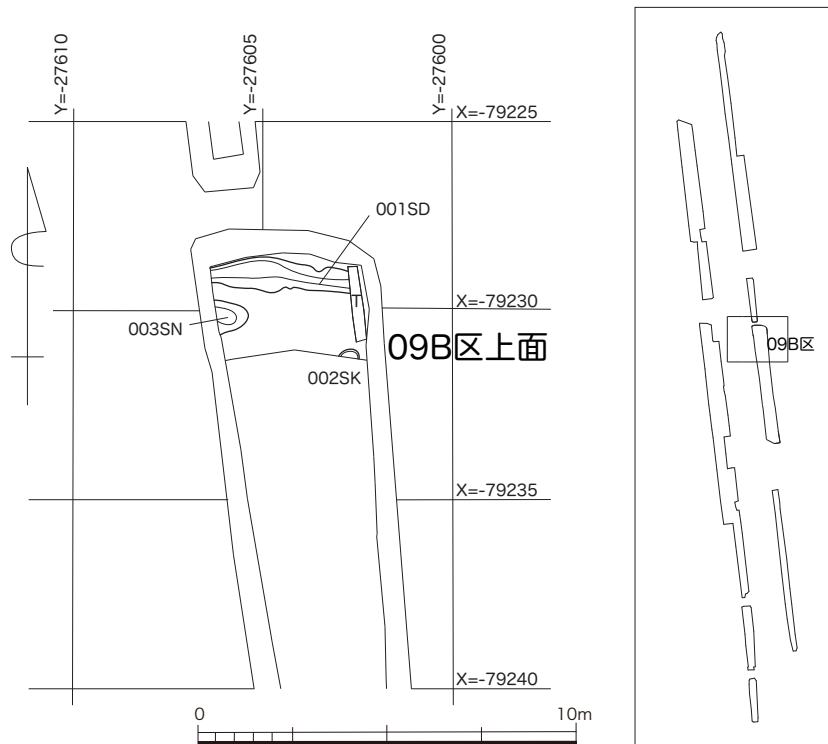
第2章 遺構



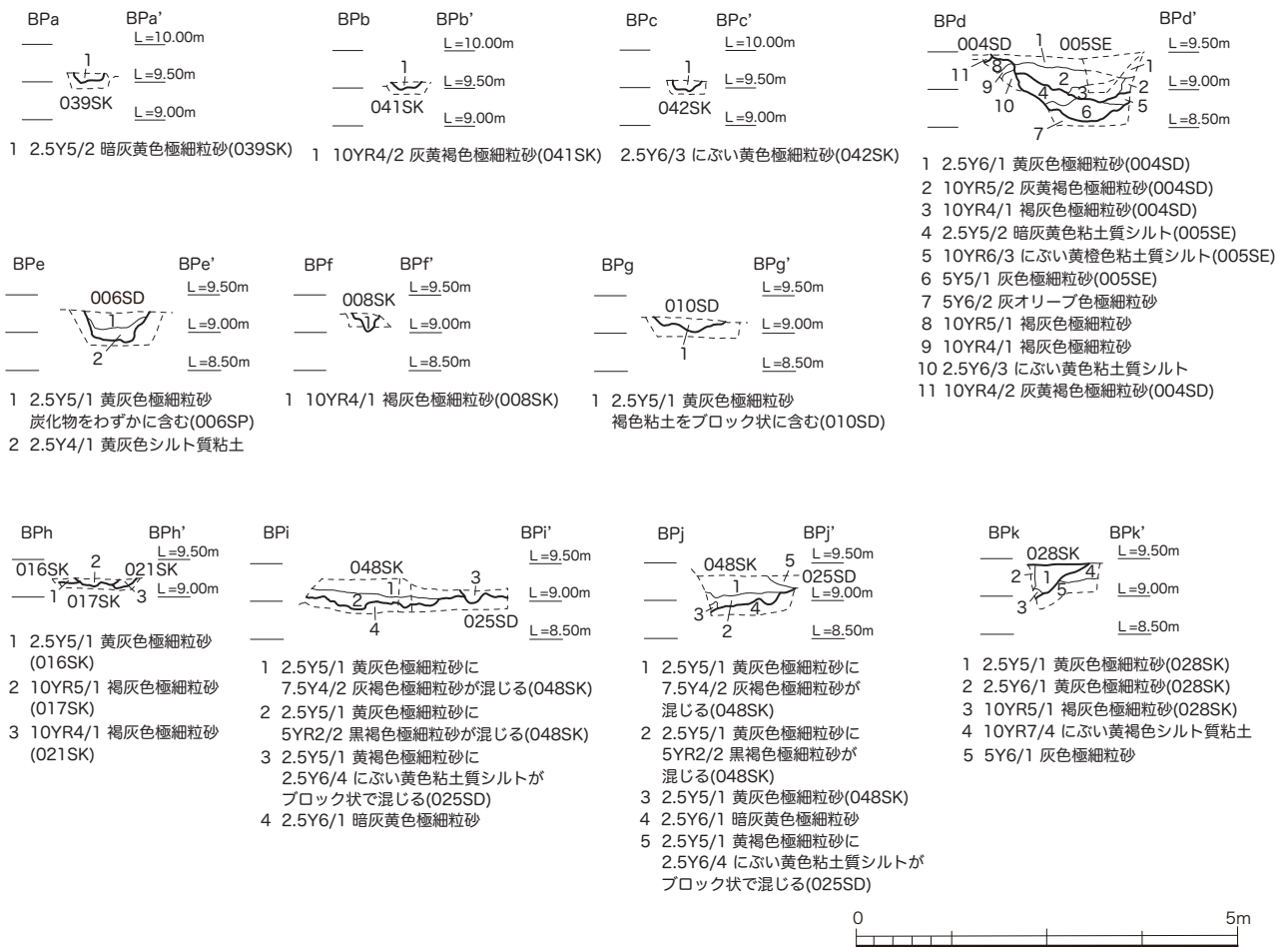
第 11 図 09Ac 区上面遺構図 (1 : 200)、個別遺構断面図 (1:100)



第 12 図 09Ac 区遺構図 (1 : 200)



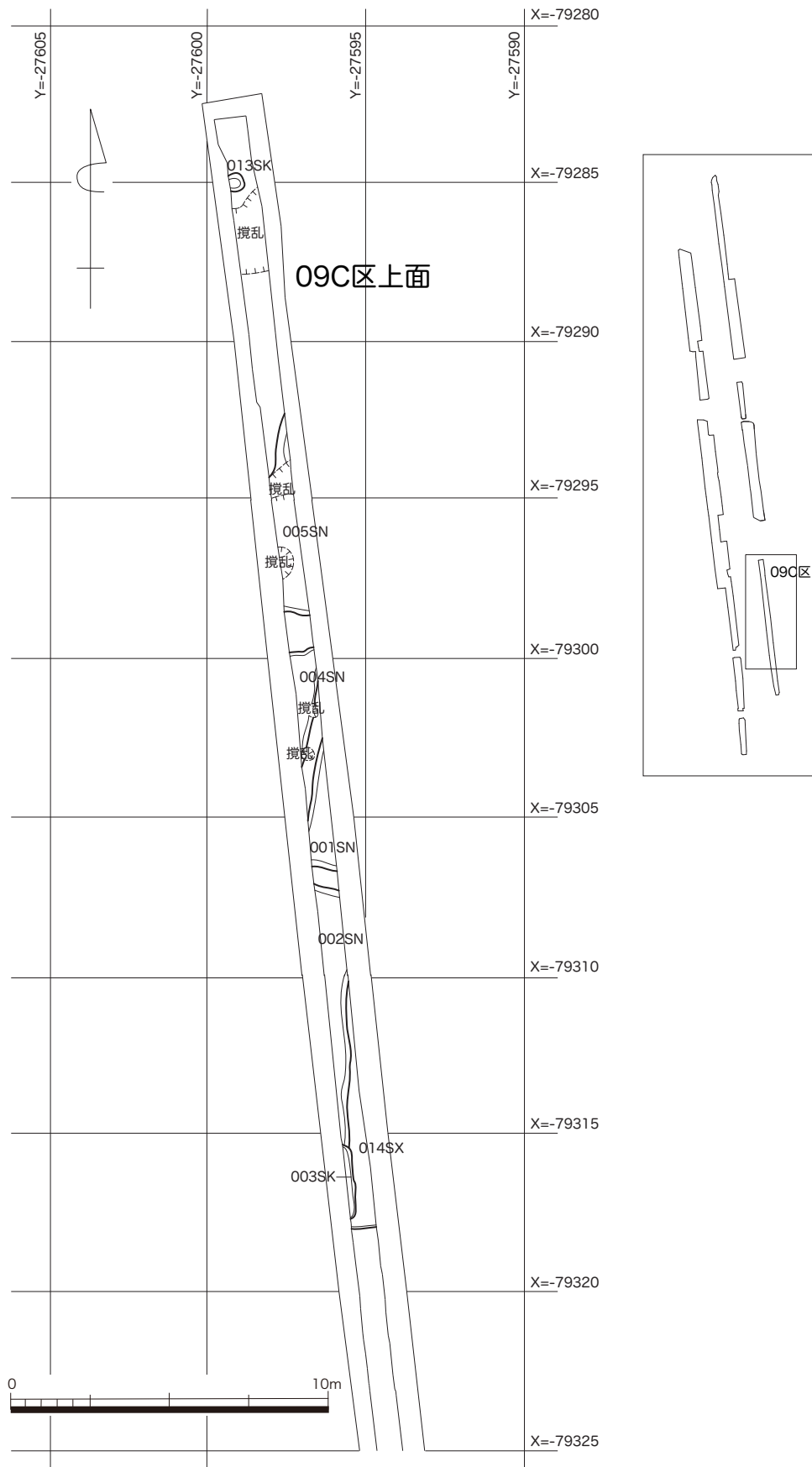
第 13 図 09B 区上面遺構図 (1 : 200)



第 14 図 09B 区個別遺構断面図 (1 : 100)

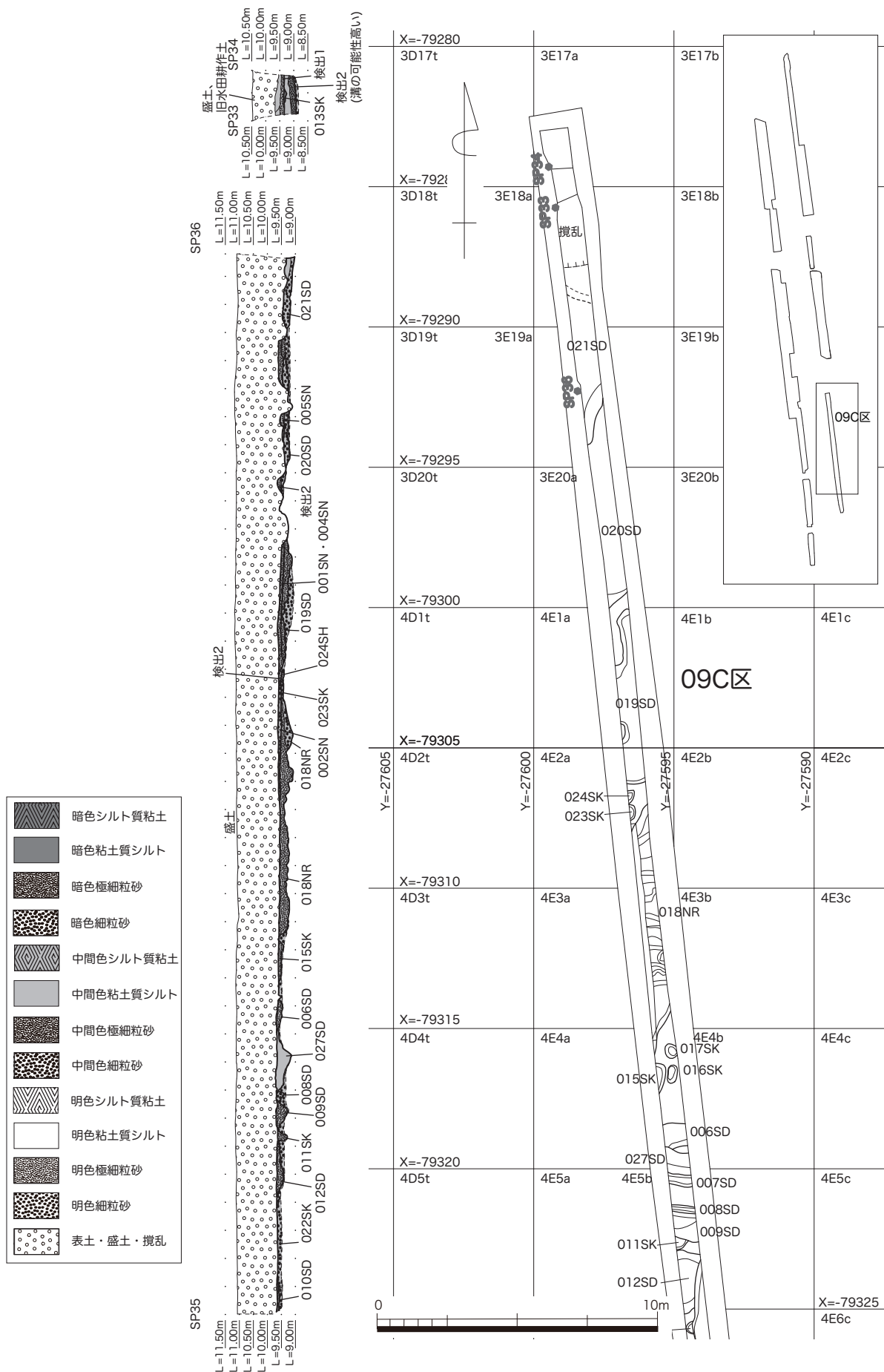
終了



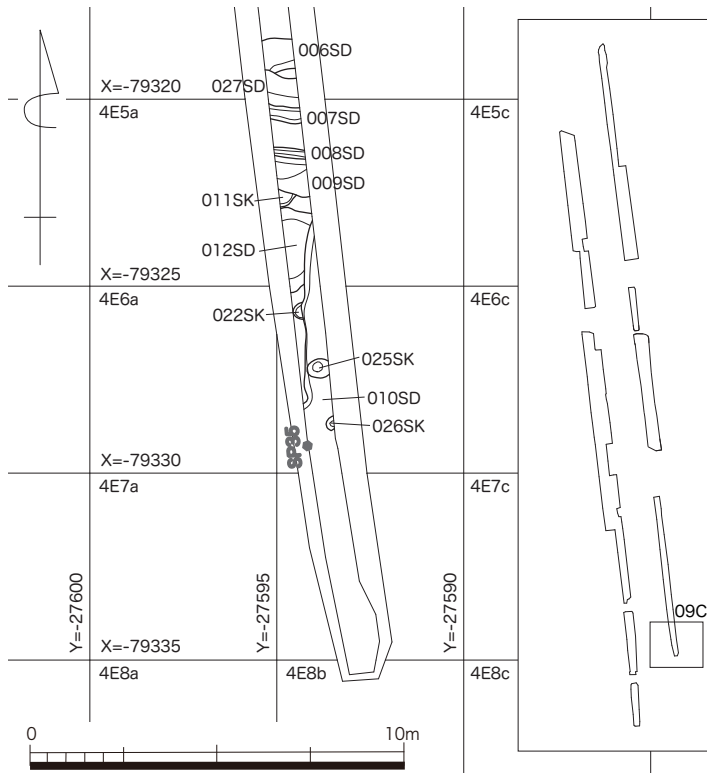


第 16 図 09C 区上面遺構図 (1 : 200)

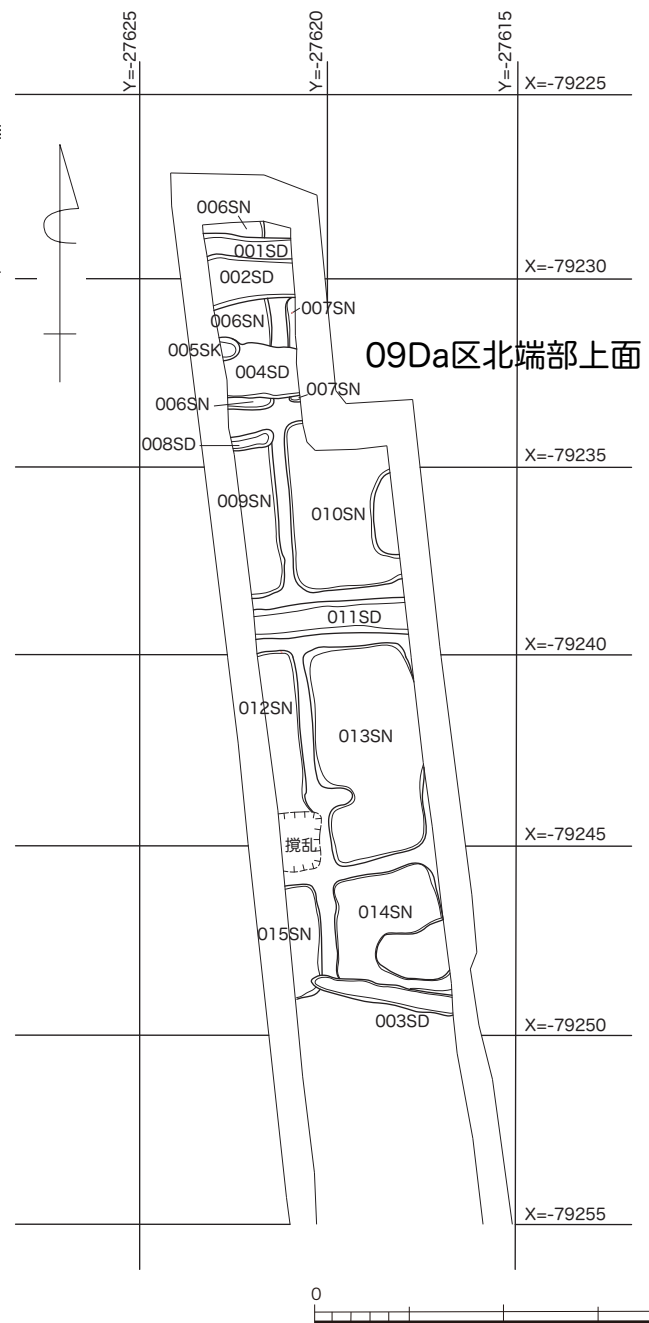
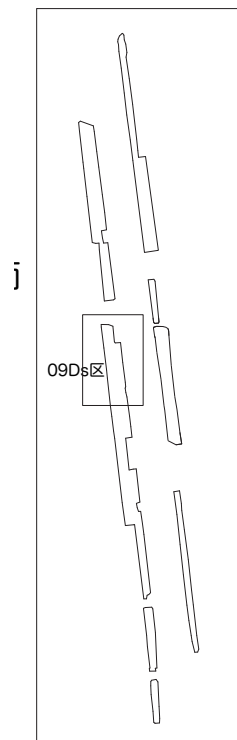
第2章 遺 構



第 17 図 09C 区遺構図 1 (1 : 200)

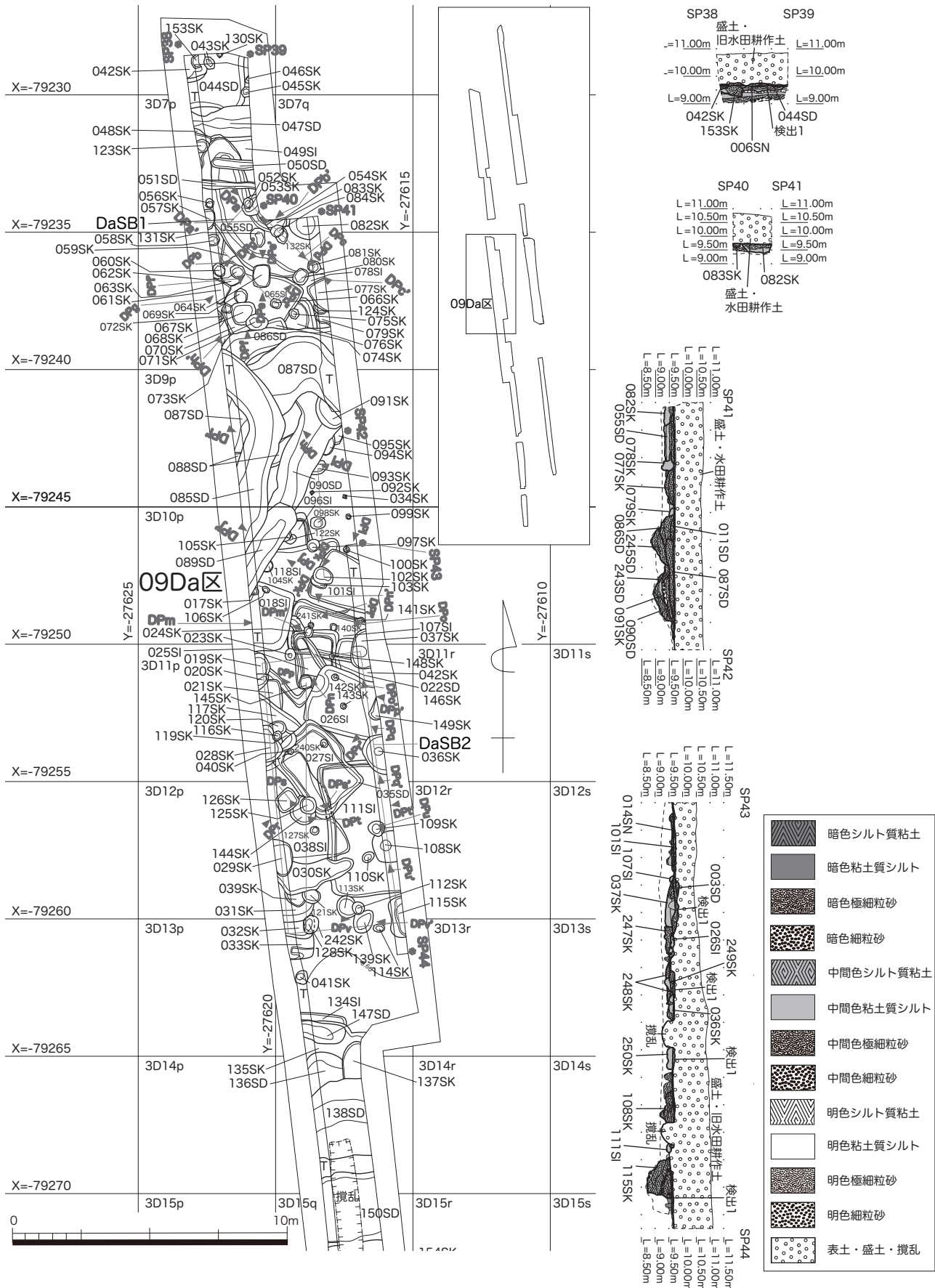


第 18 図 09C 区遺構図 2 (1 : 200)

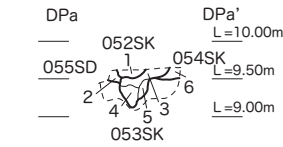
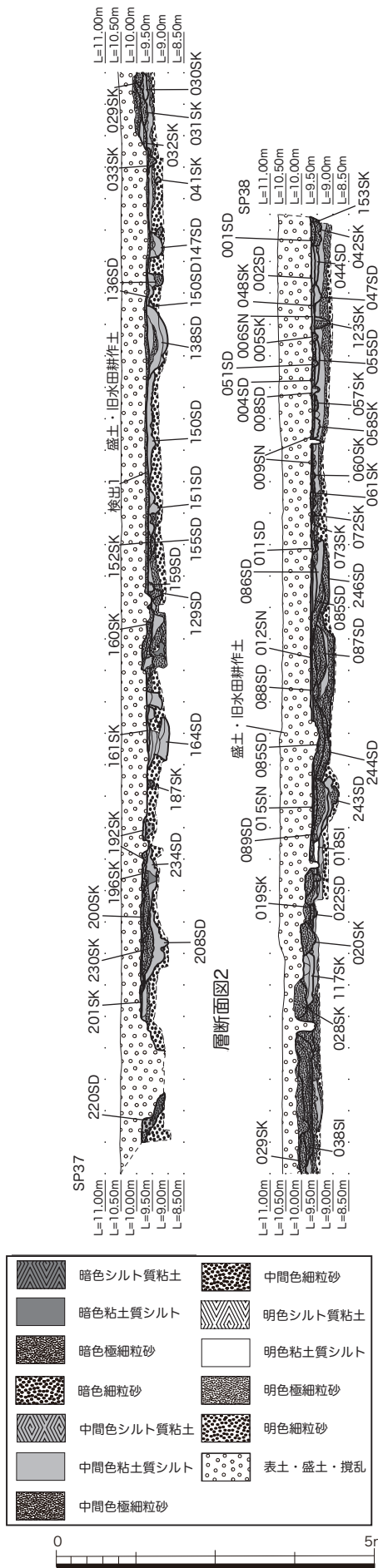


第 19 図 09Da 区北端部上面遺構図 (1 : 200)

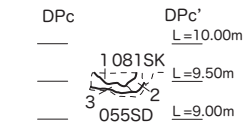
第2章 遺構



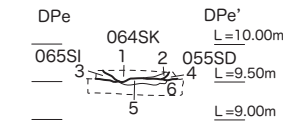
第 20 図 09Da 区北側遺構図 (1 : 200)



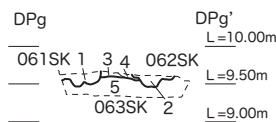
- 1 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂(052SK)
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト(055SD)
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂(053SK)
- 4 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂と 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土質シルトの斑土(053SK)
- 5 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト(053SK)
- 6 10YR4/4 褐色粘土質シルト(054SK)



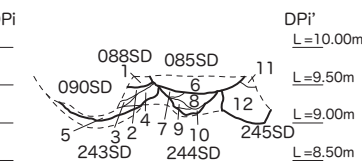
- 1 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂(081SK)
- 2 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂と 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土質シルトの斑土(055SD)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト(055SD)



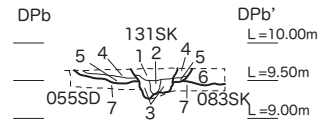
- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂(064SK)
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂(064SK)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂と 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂の斑土(065SI)
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト(055SD)
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂
- 6 2.5Y5/4 黄褐色極細粒砂



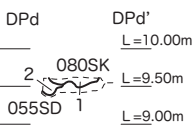
- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂と 2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトの斑土(061SK)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂(062SK)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト(063SK)
- 4 10YR5/4 黄褐色極細粒砂(063SK)
- 5 2.5Y5/4 黄褐色極細粒砂(地山)



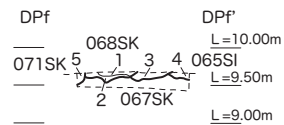
- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂(088SD)
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂と 10YR6/2 灰黄褐色極細粒砂の斑土(243SD)
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂(243SD)
- 4 10YR6/3 にぶい黄褐色細粒砂(243SD)
- 5 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂(243SD)
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂(085SD)
- 7 10YR6/3 にぶい黄褐色細粒砂(244SD)
- 8 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂と 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂の粗い互層(244SD)
- 9 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂と 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 混じりの細粒砂の粗い互層(244SD)
- 10 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂(244SD)
- 11 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂(245SD)
- 12 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂(245SD)



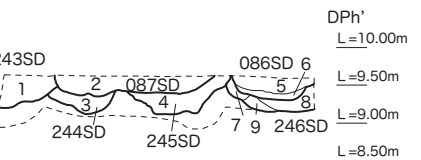
- 1 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂(131SK)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂(131SK)
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂と 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土質シルトの斑土(131SK)
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト(055SD)
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト(055SD)
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂(083SK)
- 7 2.5Y5/4 黄褐色極細粒砂(基盤砂層)



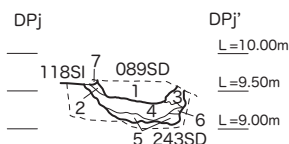
- 1 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂(080SK)
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂(055SD)



- 1 2.5Y5/2 暗黄灰色極細粒砂(068SK)
- 2 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂(068SK)
- 3 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂(067SK)
- 4 2.5Y5/2 暗黄灰色極細粒砂(065SI)
- 5 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂(071SK)



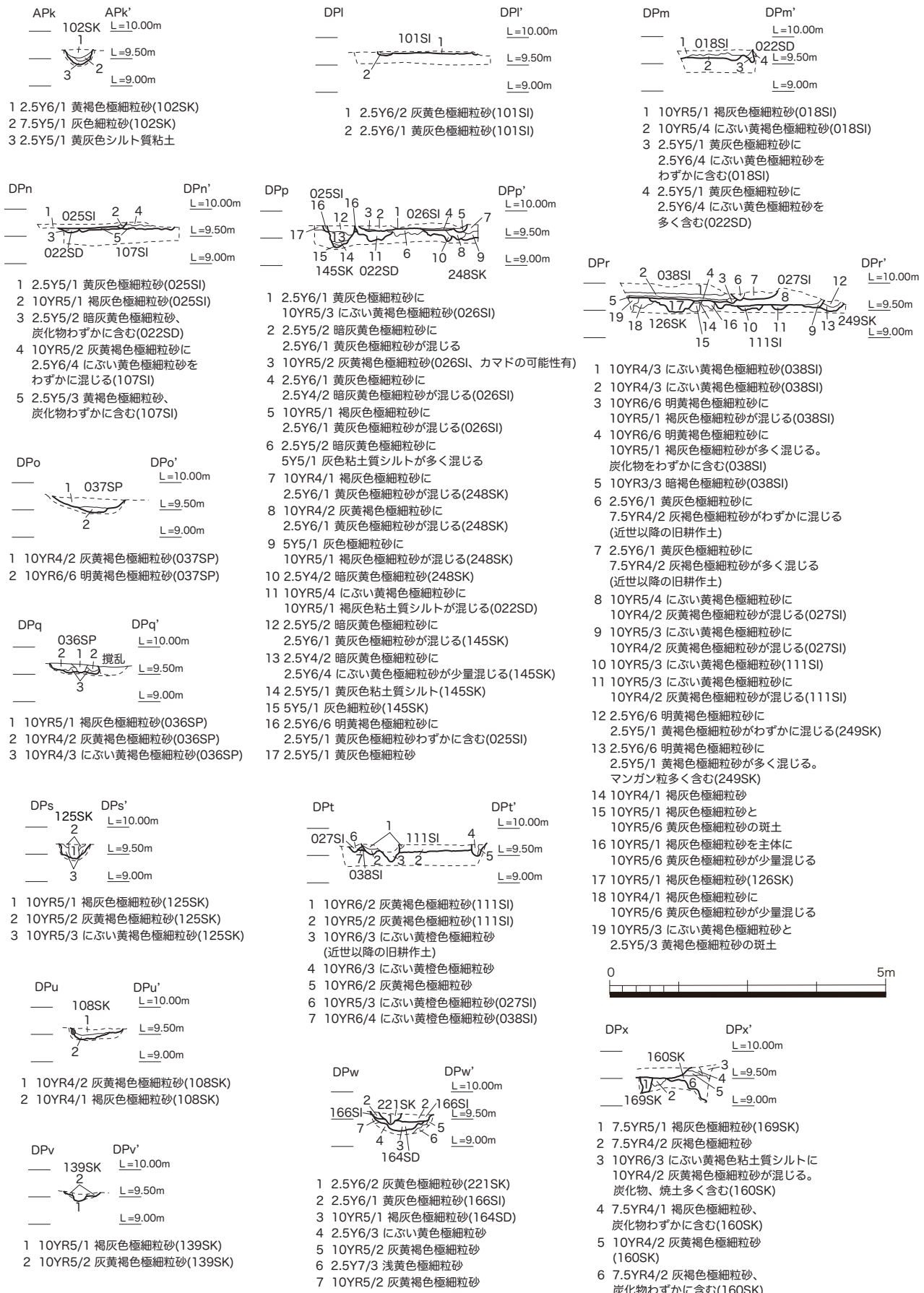
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂(243SD)
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂(087SD)
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂(244SD)
- 4 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂と 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂の斑土(245SD)
- 5 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂と 2.5Y5/3 黄褐色の細粒砂の斑土(086SD)
- 6 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト(086SD)
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルトと 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂の斑土(246SD)
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂(246SD)
- 9 2.5Y5/4 黄褐色極細粒砂(246SD)



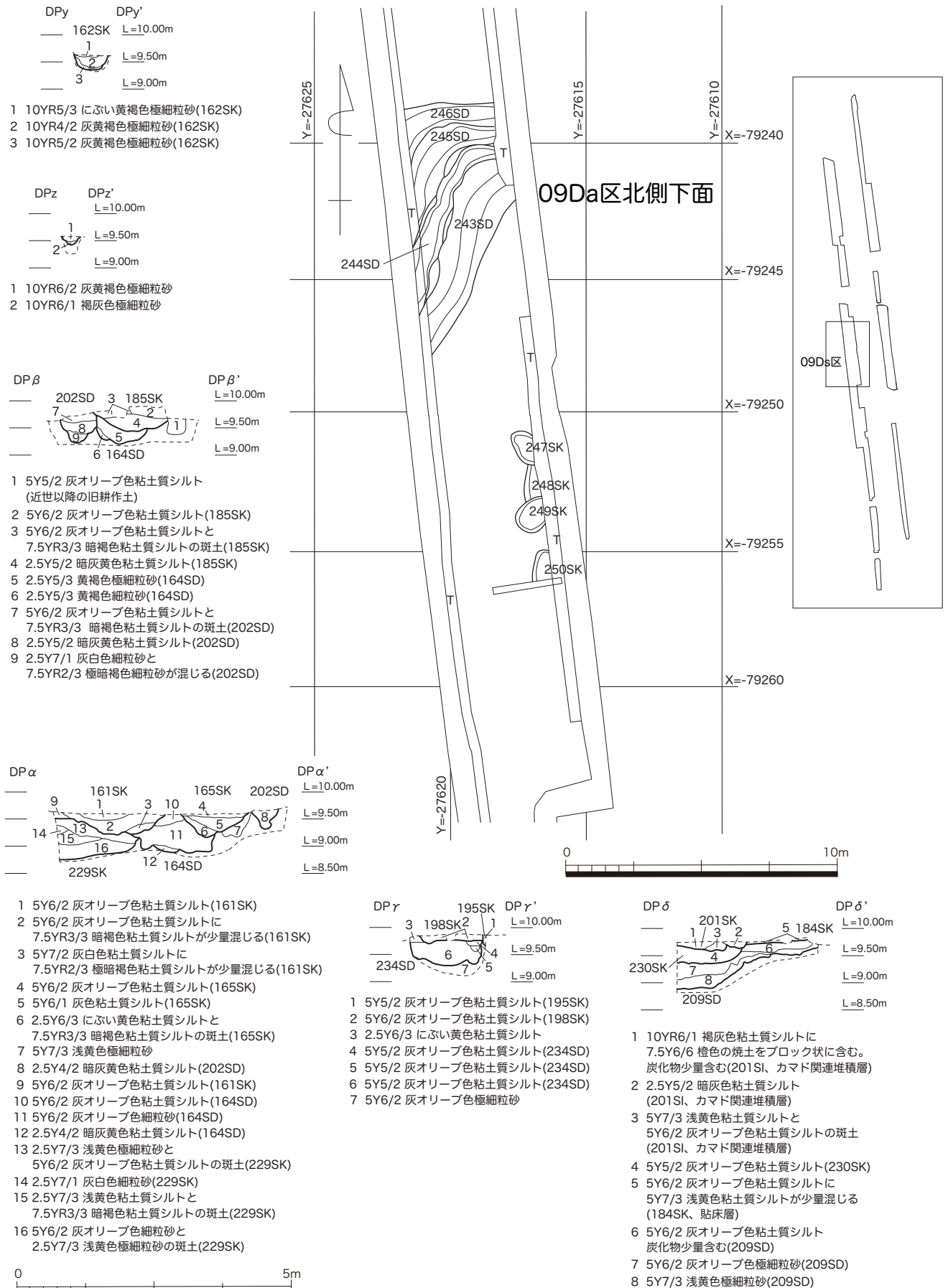
- 1 10YR6/1 褐灰色極細粒砂(089SD)
- 2 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂(243SD)
- 3 2.5Y6/2 灰黄色細粒砂に 10YR5/1 褐灰色粘土質シルトをわずかに含む(243SD)
- 4 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト(243SD)
- 5 10YR5/1 褐灰色粘土質シルトに 5Y6/2 灰オリーブ色粘土質シルトが混じる(243SD)
- 6 2.5Y6/2 灰黄色細粒砂(243SD)
- 7 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂(118SI)

第 21 図 09Da 区遺構断面図 (1 : 200)・個別遺構断面図 1 (1:100)

第2章 遺 構

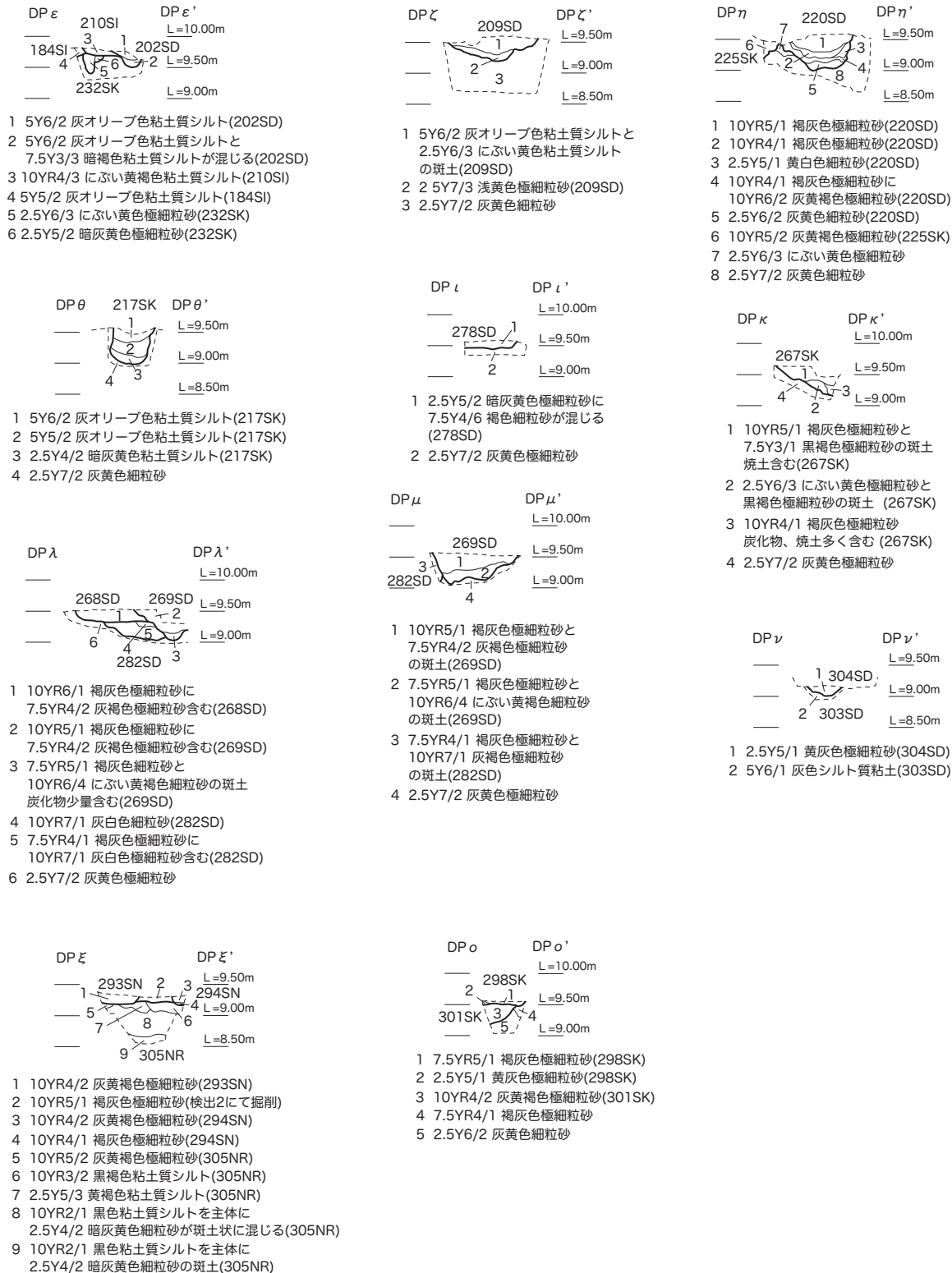


第 22 図 09Da 区個別遺構断面図 2 (1 : 100)

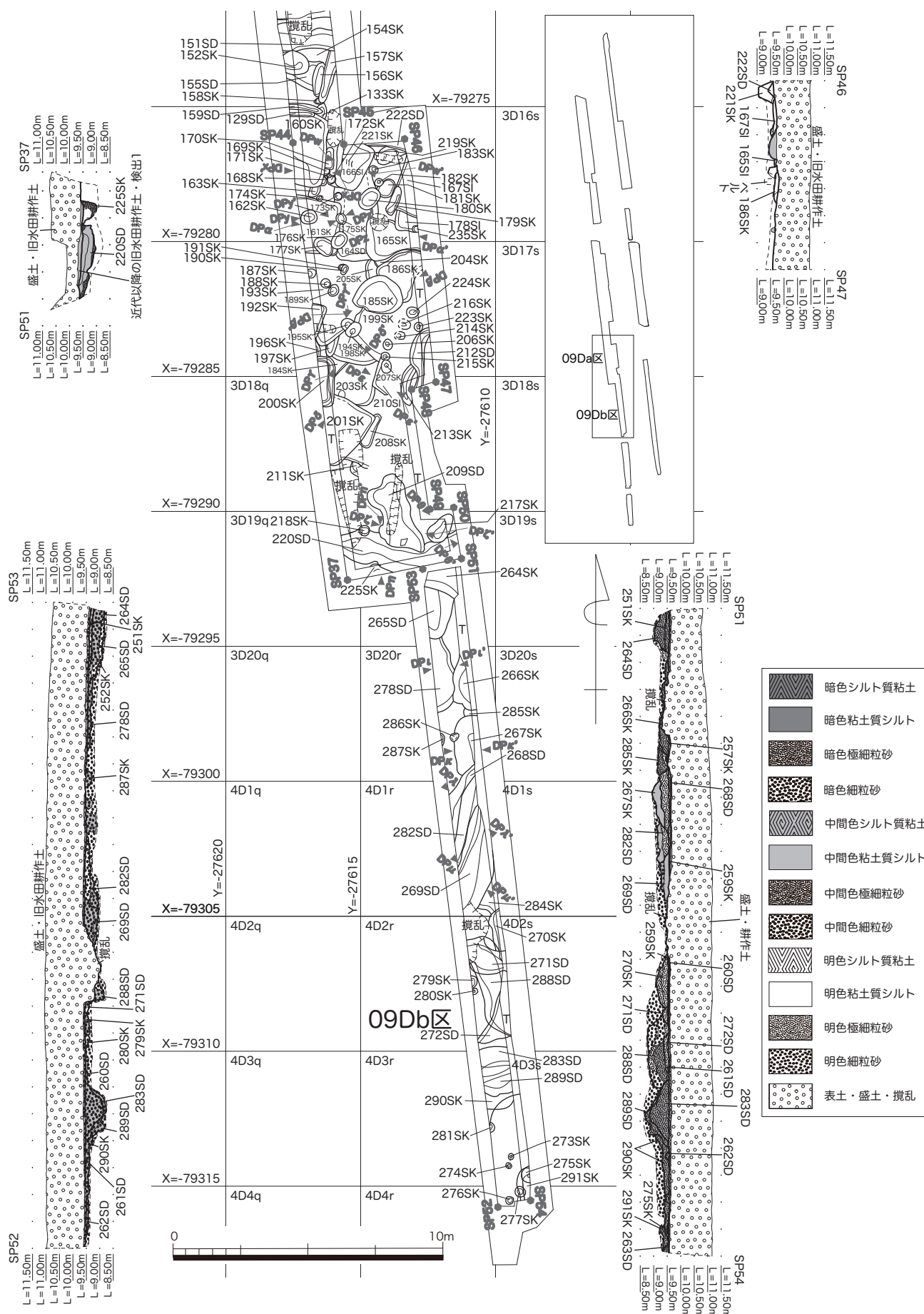


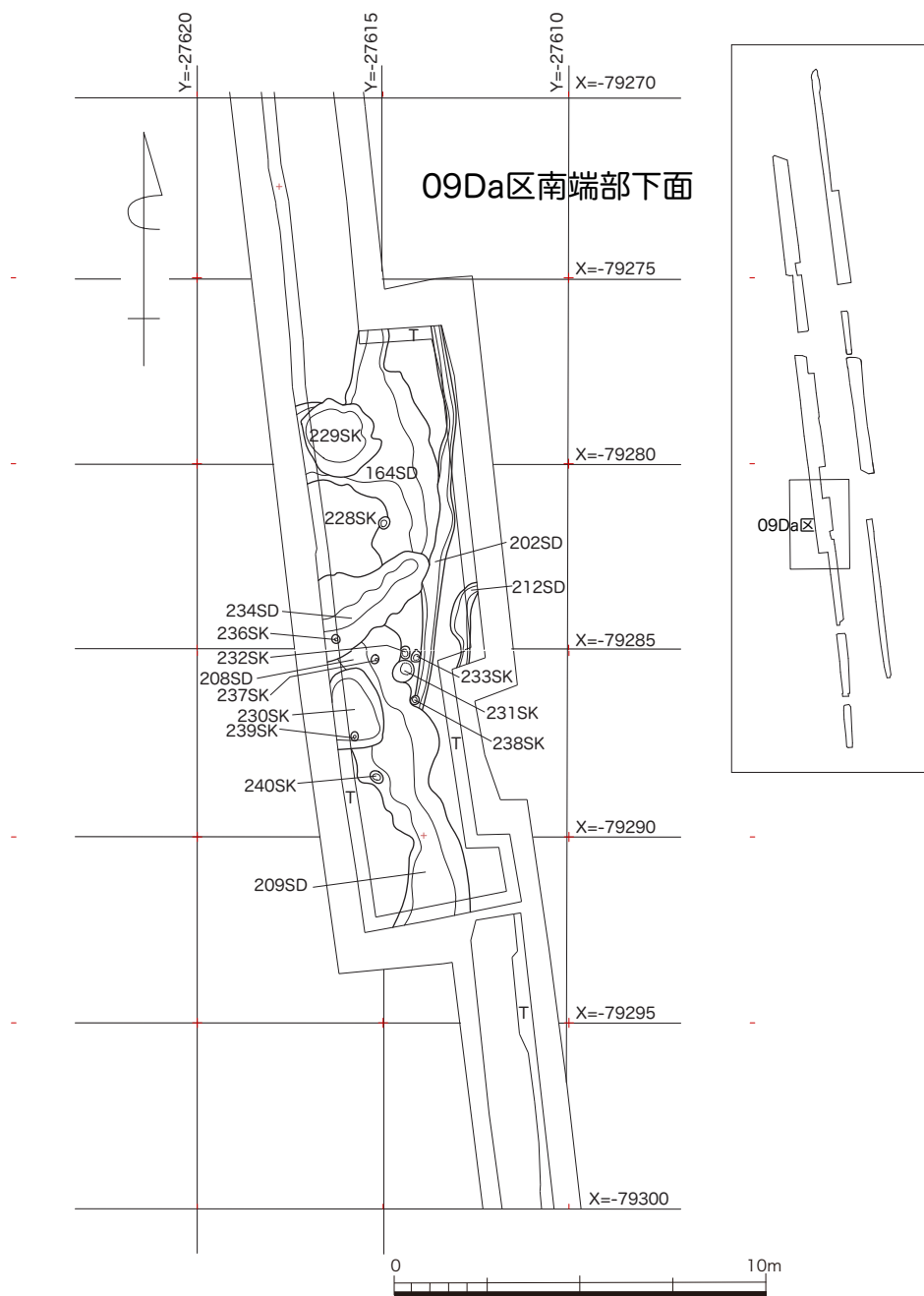
第 23 図 09Da 区北側下面遺構図 (1:200)、個別遺構断面図 3 (1:100)

第2章 遺構

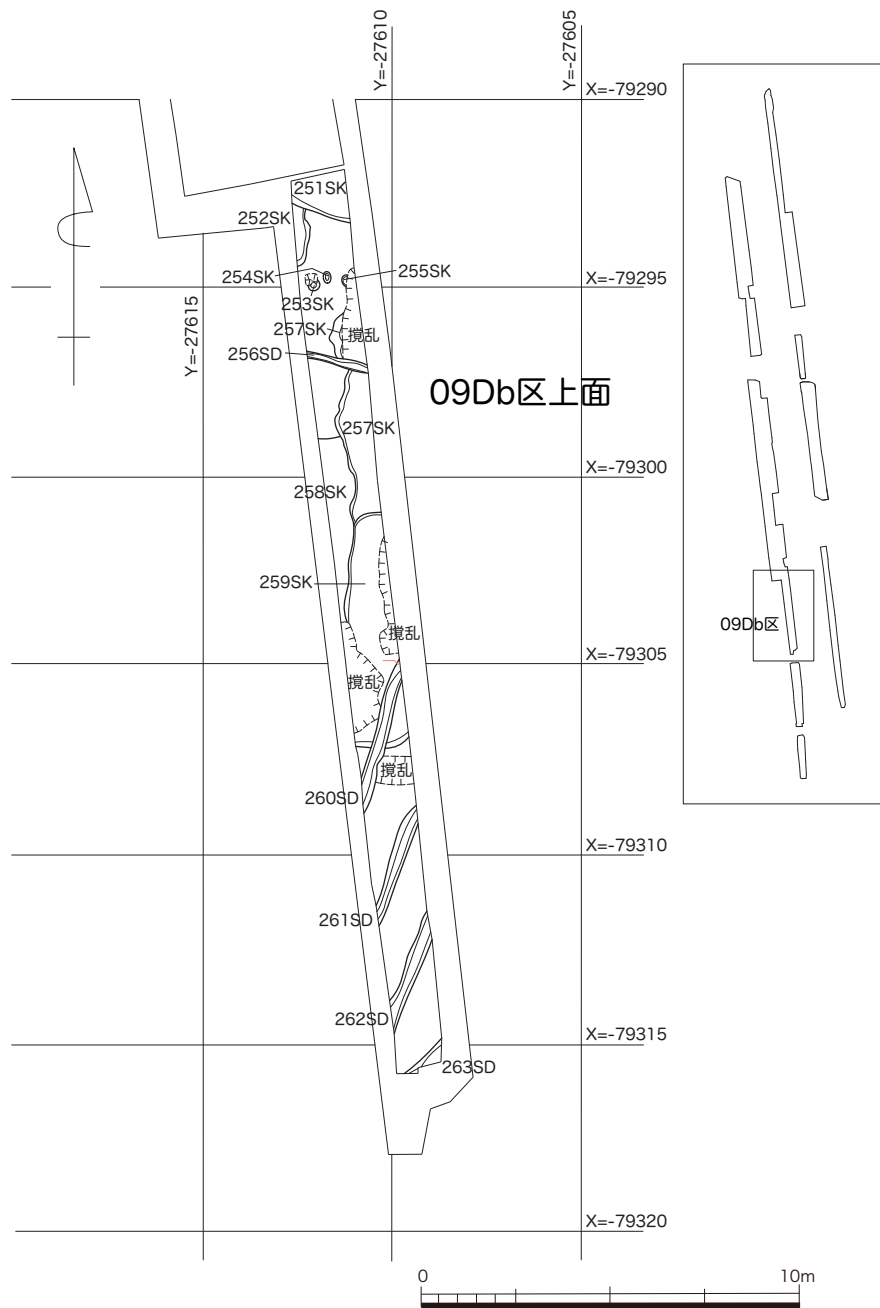


第 24 図 09Da 区個別遺構断面図 4 (1 : 100)



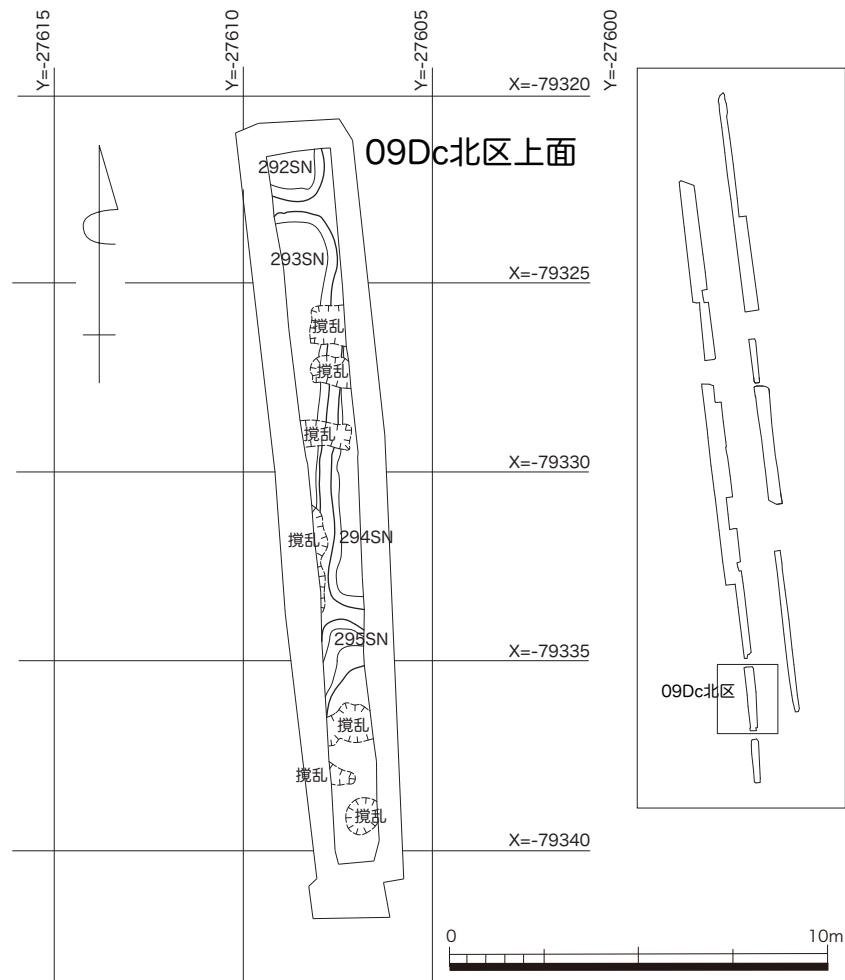


第 26 図 09Da 区南端部下面遺構図 (1 : 200)

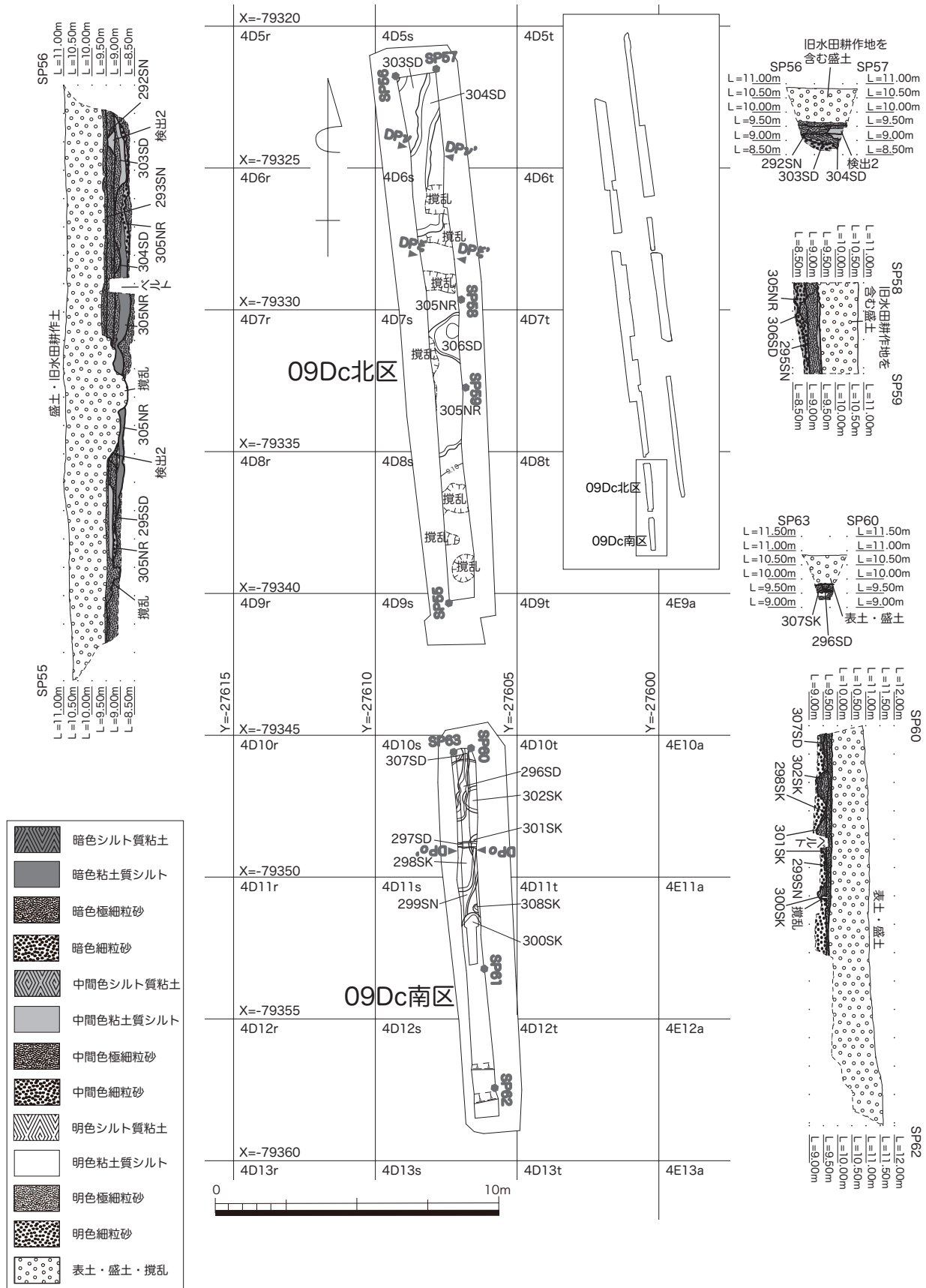


第 27 図 09Db 区上面遺構図 (1 : 200)

第2章 遺 構

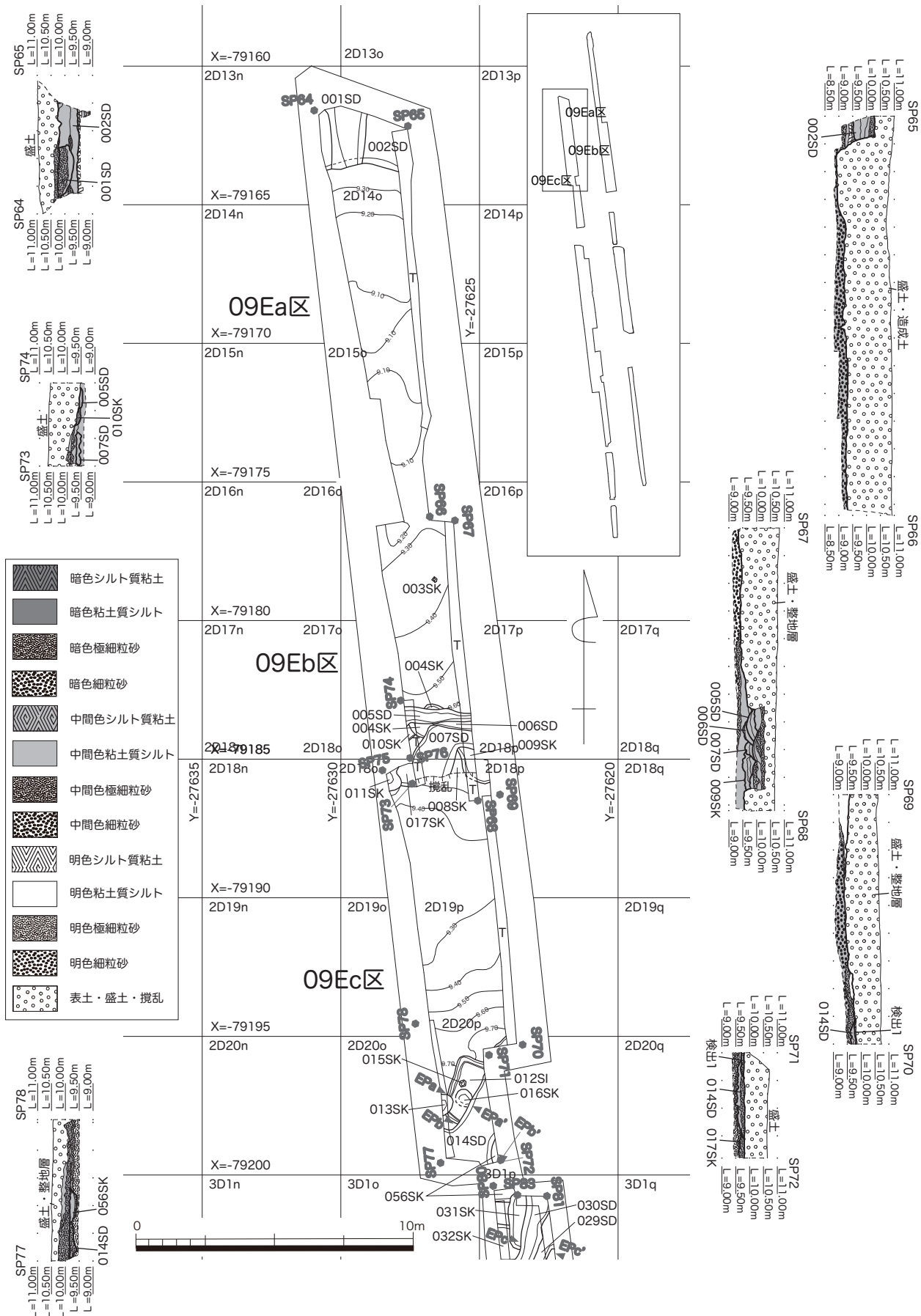


第 28 図 09Dc 北区上面遺構図 (1 : 200)

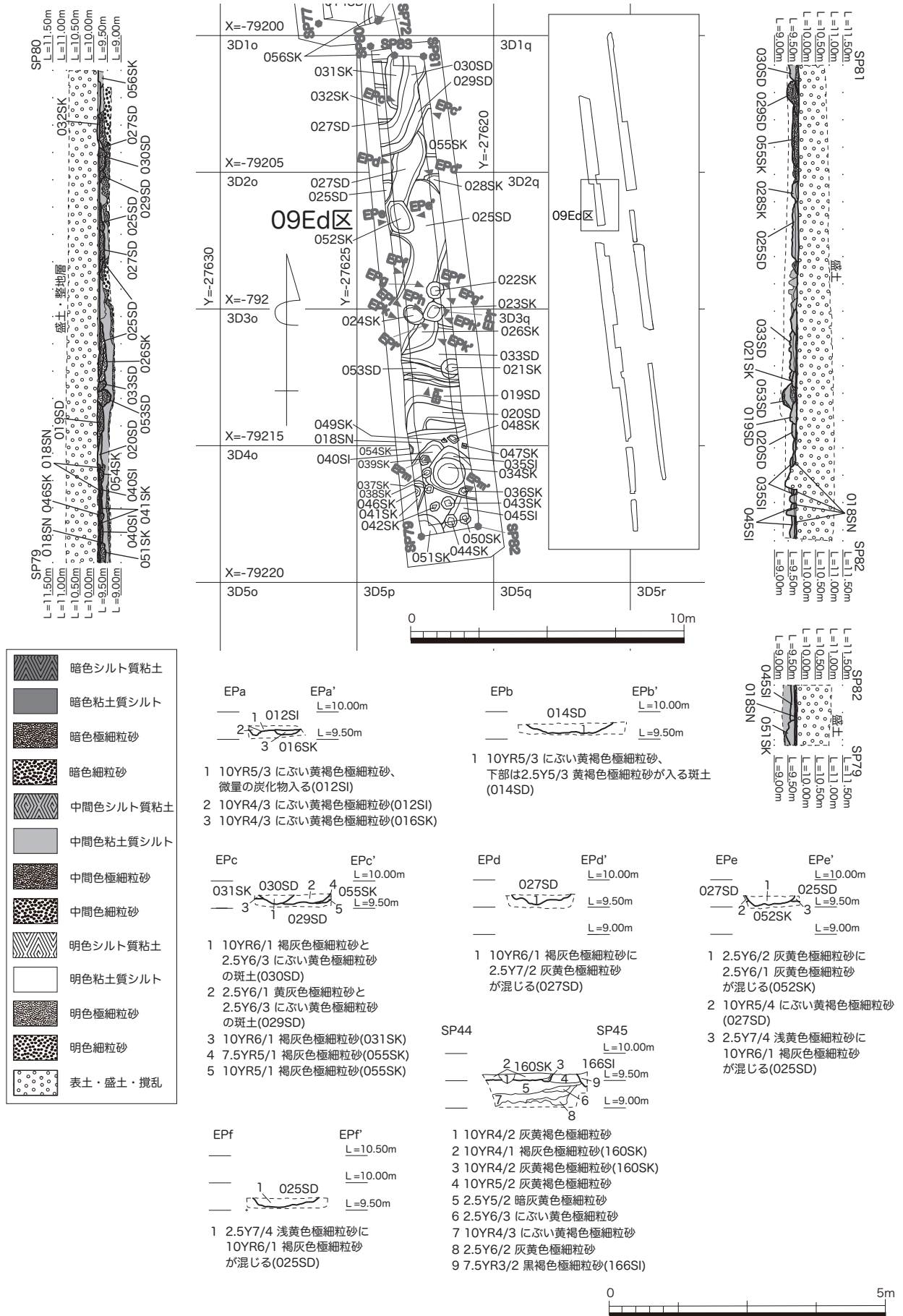


第 29 図 09Dc 区遺構図 (1 : 200)

第2章 遺 構

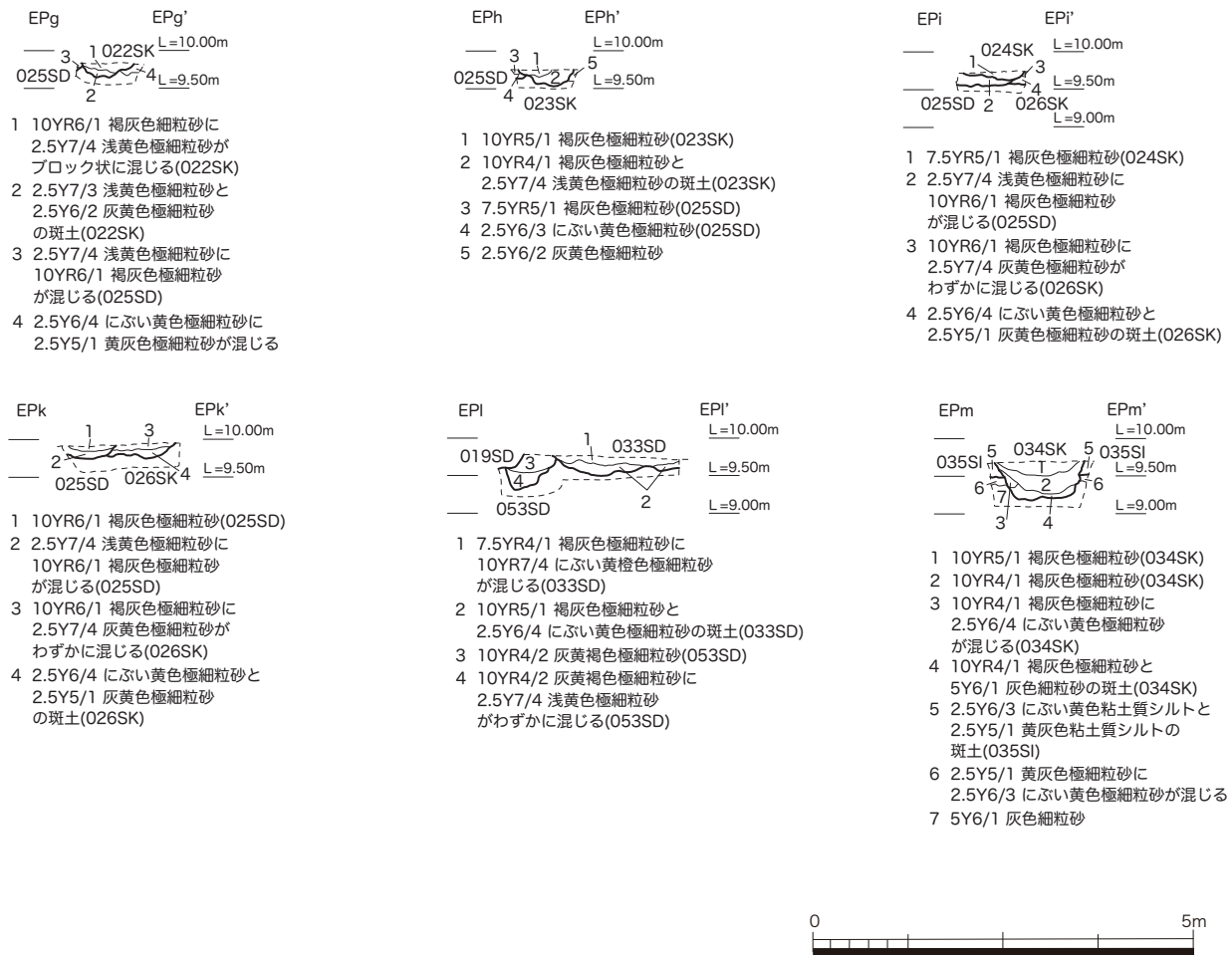


第 30 図 09Ea 区～09Ec 区遺構図 (1 : 200)



第 31 図 09Ed 区遺構図 (1:200)、個別遺構断面図 1 (1:100)

第2章 遺 構



第 32 図 09Ed 区個別遺構断面図 2 (1 : 100)

第3章 出土遺物

第1節 遺物整理の方法

今回の発掘調査では、コンテナに11箱の出土遺物があり、弥生時代から近代にいたるものまでがある。出土遺物は、土器・陶磁器、石製品、金属(鉄)製品があった。これらの分類の後、不完全ではあるが発掘調査でみつかった遺構の時期や性格を考えるために、土器・陶磁器の出土状況を各遺構・出土層位毎に出土破片点数をカウントした。そのための土器・陶磁器の主要なものは12種類あり、以下の通りである。

須恵器：古墳時代末の7世紀後半の杯・杯蓋・高杯などと奈良時代の杯・杯蓋・盤・長頸壺・瓶・甗・甕などがあり、奈良時代の須恵器は多くの遺構から出土した。猿投窯産のものが主体で、美濃須衛窯産のものが少数みられる。

古代の土師器：外面調整がハケ調整の甗とヨコナデ調整を施す杯・皿などがある。甗は口縁部が緩く外反し、口縁端部が上方に摘まみ上げてある伊勢型甗と長胴の器形で口縁部が断面「く」の字状に外反する濃尾型甗がある。図化できたものは多くないが、須恵器と同様に多くの遺構から出土している。

灰釉陶器：平安時代から多数みられるもので、内面や外面に灰釉が施されているもので、碗・皿・瓶などがみられる。出土点数は須恵器や古代の土師器程多くないが、比較的多くの遺構から出土した。猿投窯産のものと美濃須衛窯産のものがみられる。

南部系陶器：平安時代末からみられる、山茶碗と小皿、片口鉢である。瀬戸窯産、知多・常滑窯産などがみられる。多くの遺構から出土した。

北部系陶器：美濃産の山茶碗と小皿がある。多くの遺構から出土した。

中世土師器：中世のロクロ成形の小皿・皿、ヨコナデ調整の小皿・ナデ、口縁部を折り返して成形する伊勢型鍋などがある。小皿・皿は多くみられたが、伊勢型鍋は少ない。

古瀬戸陶器：鎌倉時代から室町時代の瀬戸窯産の施釉陶器で、天目茶碗・灰釉の皿類・鉢類・瓶類、鉄釉擦

鉢類・瓶類などがみられる。出土点数は多くないが、比較的多くの遺構から出土した。

大窯陶器：室町時代末・戦国時代の瀬戸・美濃窯産の施釉陶器で、天目茶碗・灰釉の皿類・鉢類・瓶類、鉄釉擦鉢類・瓶類などがみられる。出土点数は多くないが、比較的多くの遺構から出土した。

常滑産甗：中世常滑窯産の甗を中心に取上げた。出土点数と出土箇所は少ない。江戸時代以後のものも少数みられた。

中世土師器鍋：室町時代から戦国時代の内耳鍋、羽釜形鍋である。

近世陶磁器：江戸時代の瀬戸窯などで生産された陶器・磁器、他地域産の磁器などがみられる。江戸時代後期以後のものが多く、出土点数と出土箇所は少ない。遺構の分析においても、遺構の時期を検討する際、出土点数が少なく、遺構が古い層序のものは、混入のものが検討が困難なものが多い。

近世土師器：江戸時代の焙烙鍋がほとんどである。江戸時代後期のものが少量出土した。

以上の分類で、各遺構・出土層位毎に出土破片点数をカウントした上で、各遺構の時期を反映する遺物や図示することができる遺物を抽出し、実測図と一覧表を作成した。また主要な遺物に関しては、写真撮影を行い、写真図版にその遺物を掲載した。ただし、実測図を作成した遺物は、各遺構の時期より古いものが多く、全てが遺構の時期を反映する訳ではないので、各遺構の時期については、第2章 遺構に記載したものを参照されたい。器形の計測値では、端部の接地点で口縁部径、底部径などを計測しており、底部径で、高台のあるものは高台部の径を計測した。

尚、出土遺物について、観察表、出土遺物をカウントした出土状況の一覧表を添付DVDの中に収録した。

第2節 各調査区の出土遺物

・09Aa 区の出土遺物 (第33図)

須恵器 63 点、古代土師器 98 点、灰釉陶器 48 点、

南部系陶器 35 点、北部系陶器 34 点、中世土師器 17 点、古瀬戸陶器 2 点、大窯陶器 5 点いぶし瓦 2 点などがある。

006SD (E001) : E001 は南部系陶器の小皿で、細片ではあるが、口縁部がやや厚くなるものである。

010SD (E002) : E002 は中世のロクロ成形の土師器の皿である。底部径 6.0cm である。

011SD (E003・E004) : E003 は須恵器の高台付きの杯身、E004 は淡黄色の色調である大窯陶器の灯明皿で、口縁部径は 12.6cm と小型である。

013SD (E005～E013) : E005 は須恵器の杯蓋で、天井部と口縁部との稜が緩やかになっているもので、7 世紀後半のもの、口縁部径は 9.2cm である。E006 は須恵器の杯蓋で、口縁部が 14.0cm で、口縁端部が下に小さく折り曲げてある。E007 は、灰釉陶器の碗で、内・外面に灰釉が施されている。口縁部径は 18.0cm である。E008 も灰釉陶器の碗の底部で、やや内湾する高台をもつもので、底部径 7.0cm である。E009・E010 は北部系陶器の碗で、薄い作りのものである。E009 が口縁部径 14.0cm、E010 は底部径が 6.0cm で、底部からの立ち上がりが緩やかで、やや丸みをもつものである。E011・E012 は土師器の小皿で、内・外面ナデ・ヨコナデ調整によるもので、口縁部が底部から外反してひらくものである。E011 は口縁部径 6.0cm、底部径 4.0cm、器高 1.0cm、E012 は口縁部径 6.3cm、底部径 4.8cm、器高 1.1cm をはかる。これらは 15 世紀代のものである。E013 は体部上半が丸く内湾する内耳鍋で、口縁端部がヨコナデによる面をもつ。外面には煤が付着している。16 世紀前半のものと考えられる。

015SK (E014・E015) : E014・E015 は南部系陶器での碗で、E014 は内面に灰釉がみられる。E014 は口縁部径 14.1cm、底部径 7.0cm、器高 7.1cm で、底部から体部が斜めに比較的直線にひらくもので、内面の底部の縁にやや強いロクロナデが入る。E015 は底部径 6.0cm で、やや丸みをもって底部から体部が立ち上がるようである。

016SK (E016) : E016 は須恵器の広口壺で、口縁端部が断面三角縁で、口縁部下に 2 条の沈線直線文と櫛刺突文列がめぐる。7 世紀後半のものである。

017SK (E017) : E017 は灰釉陶器の碗で、内・外面に灰釉がみられる。口縁部径 15.0cm で、薄い器壁で、

口縁端部を外反させる。

019SD (E018・E019) : E018 は南部系陶器の碗で、底部径 6.0cm で、底部からの立ち上がりが、丸みを帯びて大きくひらく。E019 は北部系陶器の小碗で、断面比較的整った三角形高台で、底部径は 6.0cm である。外面に灰釉が付着する。

029SK (E020) : E020 は須恵器の杯身の小片である。

035SN (E021) : E021 は古瀬戸陶器の天目茶碗の底部片で、底部径 4.2cm の削り出し高台で、内面に鉄釉がみられる。14 世紀後半のもの。

052SD (E022～E025) : E022 は須恵器の杯身で、高台が付くものである。E023 は南部系陶器の碗で、口縁部径 15.2cm、口縁部が直線的にひらく。E024 は北部系陶器の碗で、刳殻痕が多い高台が付く。底部径は 4.0cm である。E025 は古瀬戸陶器の袴腰形香炉で、三足は欠落しているが、口縁部径 11.0cm、底部径 5.4cm、器高 4.6cm をはかる。形態は体部下半にて折れて立ち上がり、口縁部を強く外反させておわるもので、口縁部内面に稜をもつ、鉄釉が口縁部から内・外面に施されている。

検出 1 (E026・E027) : E026 は古代土師器の清郷型鍋で、少し肥厚させた口縁部が断面「く」字状に短く外反する。内・外面ナデ・ヨコナデ調整である。E027 は土錘で、幅 1.6cm、孔径 0.7cm である。

重機掘削 (E028・E029) : E028 は須恵器の大型壺で、膨らんだ体部から頸部がしまり、口縁部が短くひらくもので、口縁端部が丸く上方に摘まみ上げられている。口縁部径 16.6cm、頸部径 15.3cm をはかり、外面と内面口縁部に自然釉がかかる。E029 は丸底の土師器の杯身である。古代のものと思われる。

・09Ab 区の出土遺物 (第 33 図)

須恵器 28 点、古代土師器 50 点、灰釉陶器 8 点、南部系陶器 27 点、北部系陶器 7 点、中世土師器 4 点、古瀬戸陶器 5 点、大窯陶器 1 点、近世陶磁器 1 点、下呂石剥片 1 点、砥石 1 点などがある。

060SK (S001) : 下呂石の剥片である。図面の下から打撃を受けた痕跡が残り、片側に反った羽状の剥片である。剥離面のない側面には自然面が残る。長さ 3.4cm、幅 1.3cm、厚み 0.9cm をはかる。

073SK (E030) : 須恵器の杯蓋の摘み部である。摘み

部の径は 3.0cm。

101SD (E031・E032) : E031 は北部系陶器の碗で、口縁部径 11.0cm の小型のもの。E032 は古瀬戸陶器の灰釉卸目付大皿の口縁部で、口縁端部内面が強くヨコナデされて、帯状に肥厚する。片口部があり、内・外面に灰釉が施されている。

112SD (E033) : 須恵器の杯身で、無高台のものである。底部径は 10.0cm である。

東トレンチ (E034) : 須恵器の杯蓋で、天井部が欠けている。口縁部径 17.2cm で、口縁端部がやや内側に折り込まれている。8 世紀後半のもの。

重機掘削 (E035) : E035 は古瀬戸陶器の灰釉四耳壺の肩部である。内・外面に灰釉がかかり、外面に貼り付けの耳が付くものである。耳の上下には 3 条一組の沈線直線文がめぐる。

・09Ac 区の出土遺物 (第 33 図)

須恵器 4 点、古代土師器 1 点、灰釉陶器 1 点、南部系陶器 1 点、北部系陶器 1 点、中世土師器 3 点、大窯陶器 1 点などがある。

139SK (E036) : E036 は土師器の鉢状に口縁部が開き、口縁端部が内面に摘まみ上げられているもので、口縁部が 29.0cm をはかる。外面に煤が付着する。

140SD (E037・E038) : E037 は中世土師器の内耳鍋の口縁部と思われるもの、E038 は古瀬戸陶器の鉄釉祖母懷茶壺の体部片である。

・09B 区の出土遺物 (第 34 図・第 35 図)

須恵器 273 点、古代土師器 162 点、灰釉陶器 52 点、南部系陶器 118 点、北部系陶器 114 点、中世土師器 53 点、古瀬戸陶器 40 点、大窯陶器 30 点、常滑甕 14 点、中世土師器鍋 19 点、近世陶磁器 111 点、近世土師器 2 点、弥生土器 1 点、いぶし瓦 7 点、砥石 1 点などがある。

001SD (E039～E044) : E039 は 18 世紀の蓋物の身で、内・外面に灰釉が施されている。E040 は江戸時代の志野釉丸碗で、口縁部径 13.0cm である。E041 は江戸時代前期の鉄絵中皿で、内・外面に志野釉がかかり、内面に鉄絵がみられるものである。E042 は肥前産磁器の染付碗で、やや腰が張る器形のもので、内・外面に染付け文がみられる。E043 は瓦質土器の壺で、底部径 4.6cm の瓶状で、外面が灰白色の色調のものである。

E044 は常滑産甕で、頸部から短く直立する口縁部があり、口縁端部を外側に折り曲げて肥厚するものである。15 世紀後半のものと思われる。

004SD (E045・E046) : E045 は古瀬戸陶器の鉄釉搦鉢で、口縁部径 30.0cm 程のもので、口縁部が外側にやや丸く肥厚している。E046 は、中世土師器の羽釜型鍋で、鐳の出が大きく水平であり、鐳の下がやや丸みをもってすぐに底部に向かってすばまる形態であるので、15 世紀後半～16 世紀初頭の茶釜型鍋と思われる。

005SE (E047～E049) : E047 は 7 世紀後半の須恵器杯蓋である。口縁部径 8.8cm で、丸みをもって天井部に立ち上がるようである。E048 は灰釉陶器の皿で、内・外面に灰釉がみられる。底部径 6.1cm で、断面三角形の高台が付く。E049 は製塩土器の脚部で、径 1.3cm で被熱して色調が赤変している。

006SD (E050～E057) : E050 は灰釉陶器の碗で、口縁部 10.0cm の小型のもので内・外面に灰釉がみられる。E051 は南部系陶器の小碗で、底部径 5.0cm で高台がやや外にひらいた断面三角形高台が付く。E052 は南部系陶器の碗で、やや厚みのある底部で、断面ややつぶれた三角形高台が付く、内面底部縁に強くクロロナデが施されて凹み状にめぐる。E053 は北部系陶器の碗で、底部 4.0cm で高台が付くものである。E054 は中世土師器の小皿で、ナデとヨコナデ調整のもの、口縁部径 5.0cm、底部径 2.8cm、器高 0.8cm で、15 世紀後半～16 世紀のものと考えられる。E055 は中世土師器の羽釜型鍋で、鐳の出が大きく水平にあり、鐳のある部分に体部最大形のある丸い体部形態のものである、15 世紀後半～16 世紀初頭の茶釜型鍋と思われる。E057 は古瀬戸陶器の鉄釉搦鉢で、口縁端部外面がやや丸く肥厚するタイプのもので、15 世紀後半のものである。

025SD (E058) : E058 は北部系陶器の碗で、底部径 5.0cm で比較的しっかりした断面三角形高台が付く。高台の靱殻圧痕もあまり目立たない 13 世紀前半のものである。

027SD (E059～E061) : E059 は北部系陶器の碗で、緩く斜めに立ち上がり口縁部にいたるもので、色調が灰白色の 15 世紀後半のもの、E060 も北部系陶器の碗で、高台がないもの、色調が淡黄橙色で底部径 4.6cm

の15世紀前半のもの、E061は大窯陶器で灯明皿、色調が明褐灰色で口縁部径11.0cmの15世紀末～16世紀初頭のものと思われる。

028SK (E062・E063) : E062は須恵器の碗で、内・外面ロクロナデされ、外面底部に回転ヘラケズリを施す。E063は古瀬戸陶器の灰釉梅瓶で、底部径9.0cmのもの、外面は体部がロクロナデ、底部もナデで調整されている。内外面に灰釉がみられる。

029SK (E064・E065) : E064はナデ・ヨコナデ調整の土師器の小皿で、口縁部径6.8cm、器高1.0cmをはかる。底部から口縁部が短く外反する形態である。15世紀後半のものか。E065は古瀬戸陶器の鉄釉土瓶か釜と思われるもので、頸部から口縁部がほぼ上方に立ち上がり、口縁端面が上を向くものである。

034SK (E066) : 南部系陶器の碗で、高台が内湾気味の断面三角形が付くものである。底部径7.4cmである。

035SN (E067) : 南部系陶器の碗で、底部径が9.0cmと大きく、断面三角形の高台が付く。12世紀初頭のものである。

037SK (E068・E069) : E068は須恵器の杯身で、体部下半の部分である。E069は須恵器の甗で、内・外面をナデ・ヨコナデ調整の体部片である。

038SK (E070) : 土師器のハケ調整甗で、頸部から強く外反する口縁部をもつ。口縁部径23.0cm、頸部径20.6cmである。奈良時代のものである。

046SD (E071～E093・S011) : E071～E086・S011は046SDの1層・2層から出土したもので、近世後期以後の水田耕作土と考えられる堆積から出土したもので、E087～E093が3層の15世紀後半～16世紀前半の溝と考えられるものである。E071・E072は南部系陶器の碗で、靱殻圧痕がめだつ断面くずれた三角形高台のものである。E073～E076は北部系陶器の碗で、口縁部径はE073が15.0cm、E074が13.0cm、E075が11.4cmである。E073・E074は口縁部が比較的まっすぐ斜め外にひらいておわるもの、E075はやや丸みを帯びて体部が立ち上がり、口縁端部が内側に摘み上げられているものである。E076は口縁部が斜めに直線状になるもので、口縁部径12.0cmをはかる。E077・E078は土師器の小皿で、口縁部径が5.5cm前後、器高1.1cmの丸底をはかる。色調は

E077が浅黄橙色、E078がにぶい黄橙色で、ナデ・ヨコナデ調整のものである。E079は土師器の皿で、口縁部径が15.8cmをはかる大型のものである。色調は灰白色で、ナデ・ヨコナデ調整のものである。E080は土師器の皿の底部片で、色調は灰白色で、ヨコナデ調整のものである。E081は古瀬戸陶器の灰釉縁釉小皿で、口縁部が強く外反しておわるものである。口縁部径10.0cm、底部径4.4cm、器高2.5cmをはかる、15世紀中頃～後半のものである。口縁端部の内・外面に灰釉が施されている。E082は古瀬戸陶器の鉄釉縁釉小皿で、口縁部径11.0cmで、口縁端部の内・外面に鉄釉を施す。E083は古瀬戸陶器の天目茶碗で、内・外面井鉄釉を施す、口縁部は体部から稜をもって立ち上がり、口縁端部が外反する。E082・E083は15世紀後半～16世紀前半のものである。E084は古瀬戸陶器の鉄釉土瓶か釜で、口縁部径12.6cmで、E065と同様の形態のものである。E085は常滑窯産甗の口縁部片で、口縁部端部を外側に折り返した部分である。E086は江戸時代の肥前産の磁器碗で、内・外面に染付け文がみられる。E087は南部系陶器の碗で、底部径8.0cm、整った断面三角形高台が付くものである。E088は北部系陶器の小皿で、口縁部径8.7cm、底部径5.0cm、器高1.0cmをはかる。内面底部際が強く横方向になでられていて、盛り上がりがめぐる。口縁部も底部から大きくひらく形態である。E089は北部系陶器の碗で、高台が無いものである。底部からやや丸みをもって口縁部に至り、口縁端部を内面上方に摘み上げる。E090は古瀬戸陶器の鉄釉仏供と思われる小碗形態のもので、口縁部を内面に稜をもって強く外反させるものである、口縁部径11.4cm、底部径5.0cm、器高2.9cmをはかる。E091は古瀬戸陶器の鉄釉搗鉢で、口縁短部がやや内湾しておわるものである。E092は古瀬戸陶器の鉄釉搗鉢の口縁部片で、口縁部内面にヨコナデによる段がめぐりおわるものである。口縁部径は30.0cm程である。E093は大窯陶器の灰釉端反皿で、全面に灰釉が施されている。内面底部に菊花十六弁刻印がみられる。S011は凝灰岩製の砥石で、破面以外の部分に擦り方向が不定な砥面がある。残存長7.1cm、幅6.7cm、厚み2.6cm、重量150.7gである。

048SK (E094～E098) : E094～E096は古瀬戸陶

器で、E094 は口縁部径 16.5cm の内・外面に灰釉の施された灰釉折縁中皿、E095 は灰釉折縁深皿の口縁部片、E096 は灰釉瓶子の皿類とされる内・外面に灰釉が施されたもので、外面体部上半に沈線直線文がめぐり、体部径は 16.4cm をはかる。E097・E098 は大窯陶器で、E097 が口縁部が内湾口縁状になる鉄釉縁釉小皿で、口縁部径 13.0cm、E098 が小碗形態で、口縁部が強く外反しておわる鉄釉小杯である、口縁部径 7.5cm。

検出 1 (E099・E100) : E099 は須恵器の鉢で、丸底に近い底部から体部が丸みをもって立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部がひらくもので、口縁部径 12.8cm、底部径 3.2cm、器高 4.4cm の 7 世紀前半のものと思われる。E100 は 13 世紀中頃の北部系陶器の碗で、丸みをもって立ち上がる体部に、比較的粗穀圧痕がみられる断面三角形高台が付く、底部径 5.0cm である。

検出 3 (E101～E112) : E101 は 7 世紀前半の須恵器の杯蓋で、外面天井部に櫛刺突文列が 2 帯めぐり。E102 は南部系陶器の碗で、やや厚みにある器壁に、粗穀圧痕のみられる断面三角形が付く、底部径 6.0cm をはかる。E103～E108 は北部系陶器で、E104 は口縁部片で口縁部径 12.4cm、その他は底部片で、粗穀圧痕がみられる高台が付くものである。E109 は古瀬戸陶器の灰釉縁釉小皿の底部片で、底部径 4.2cm、E110 は青磁碗の底部片で、底部径 4.5cm、E111 は江戸時代後期の瀬戸窯産の鉄釉搦鉢で、口縁部径 31.0cm、底部径 13.2cm、器高 13.1cm のものである。E112 は須恵器の甕片を転用した加工円盤と思われるもので、長径 2.9cm、短径 3.1cm、厚み 1.1cm である。

表土掘削 (E113～E115) : E113 は土師器のナデ・ヨコナデ調整による小皿で、口縁部径 6.9cm、底部径 4.7cm、菊 1.1cm をはかり、色調は灰白色である。E114 は古瀬戸陶器の灰釉折縁深皿で、口縁部が内面側にやや稜をもって外反し、口縁端部がやや肥厚するものである。E115 は新しい瓦器で、鉢形である。

・09C 区の出土遺物 (第 35 図・第 36 図)

須恵器 103 点、古代土師器 24 点、灰釉陶器 21 点、南部系陶器 27 点、北部系陶器 52 点、中世土師器 14 点、古瀬戸陶器 12 点、大窯陶器 18 点、常滑甕 4 点、中世土師器鍋 16 点、近世陶磁器 29 点、弥生土器 1 点、下呂石未製品 1 点、チャート未製品 1 点、砥石 1 点など

がある。

002SD (E116・E117) : E116・E117 は江戸時代以後のもので、E116 は灰釉の施された内面に白色釉の雷文が描かれた大皿、E117 は鉄釉搦鉢片を転用した加工円盤で、長径 3.7cm、短径 3.1cm、厚み 1.2cm である。

005SN (E118・S002) : E118 は土師器の清郷型甕で、口縁部が体部から断面「く」の字状に外反するもの、口縁部径 28.0cm、頸部径 27.0cm 程である。S002 はチャートの打製製品の未製品と思われるもので、片側縁辺を小さく剥離している。長さ 2.90cm、幅 0.95cm、厚み 0.90cm、重さ 6.7g をはかる。

010SD (E119) : E119 は古瀬戸陶器の鉄釉縁釉小皿で、底部径 6.0cm をはかる。15 世紀のものである。

018NR (E120・E121) : E120 は 9 世紀後半の灰釉陶器の碗で、断面やや幅広く内湾する高台が付く。E121 は江戸時代的美濃窯産灰釉折縁輪髹鉢で、口縁部径 24.0cm である。

019SK (E122～E126) : E122～E124 は 7 世紀後半～8 世紀末の須恵器で、E122 は口縁部径 12.4cm、底部径 6.8cm、器高 4.5cm のやや深い無台の杯身、E123 は高杯の末広りの脚部片、E124 が甕の口縁部で、口縁端部が下垂し、頸部に櫛描き波状文がめぐり。E125 は北部系陶器の碗で、底部径 4.0cm の無高台のもの、E126 は古瀬戸陶器の鉄釉擦鉢で、口縁端部が内側に摘まみ上げられる形のもの、口縁部径 28.0cm である。

020SD (E127) : E127 は北部系陶器の小皿で、口縁部径 7.7cm、底部径 5.6cm、器高 0.8cm で、器壁が薄く、器の径に比べて器高が低い扁平なものである。14 世紀後半～15 世紀前半のものと思われる。

021SD (E128～E143・S012) : E128 は 7 世紀後半の須恵器の高杯の脚部で、杯部の底面に線刻がみられる。E129～E133 は北部系陶器である。E129 は 12 世紀末の碗で比較的厚い底部に方形の高台が付く。E130 は口縁部径 8.3cm、底部径 4.9cm、器高 1.1cm の小皿で、器壁が薄く全体が扁平なものである。E131～E133 は 15 世紀前半の碗で、高台が付かないタイプのもので、やや丸みをもって体部から口縁部にいたる。E134 は土師器の皿で、底部から体部がやや外反気味にひらくもの、色調が灰白色で、底部径 6.0cm をはか

る。E135は土師器の内耳鍋で、口縁部が緩く内湾する形態から、15世紀後半～16世紀前半のものと思われる。E136～E141は古瀬戸陶器で、15世紀のものである。E136は灰釉小杯で、口縁部径8.0cm、底部径4.0cm、器高2.5cmの小碗形態の内・外面に灰釉がかかるものである。E137は鉄釉縁釉小皿で、底部からやや丸みのある立ち上がりをもって口縁部にいたるもので、口縁部の内・外面に鉄釉が施されている、口縁部径11.8cm、底部径5.0cm、器高2.8cmである。E138は灰釉卸目付大皿で、口縁部が大きく広がり、口縁端部上面に受け口状にくぼみがめぐり、断面二股状になる。E139は灰釉盤類の体部片で、外面に灰釉がみられる。E140は上半部が欠けているが、鉄釉口広有耳壺で、鉄釉が体部下半まで施されている。底部径8.8cmである。E141は鉄釉搗鉢で、内面体部下半まで搗り目が入る。口縁端部は内面側につまみ出しが入り、断面二股状になる。E142は越前窯産と思われる擦り鉢で、色調がにぶい赤褐色で、全体に器壁が厚く、口縁部が丸みをもっておわる、内面の搗り目が口縁部の下までのびている。これは口縁部片であるが、破面に摩滅している部分がみられる。E143は常滑窯産の甕で、体部から頸部がほぼ上に立ち上がり口縁部にいたるもので、口縁部が外側に屈折され、さらに口縁端部が上方に摘まみ上げられる形で、受け口状になる。口縁部径34.0cm、頸部径32.2cmをはかる。S012は泥岩製の砥石で、砥面が2面残る。搗り目の方向は不定で、長径4.1cm、短径2.4cm、厚み2.0cm、重さ14.5gである。

検出3 (E144) : 須恵器の杯蓋で、口縁部径18.0cm、器高が2.0cm以上あり、比較的奥が深い蓋である。口縁端部の蓋当てが比較的明瞭にあるものである。

検出2 (E145・E146) : E145は古瀬戸陶器の鉄釉鉢で、口縁部20.0cmで15世紀後半のものと思われる。E146は江戸時代前期の瀬戸美濃陶器の白天目茶碗で、口縁部径11.0cm、内・外面に灰釉がかかるものである。外面体部下半はクロロナデの後、ヘラケズリ調整され、体部中程で折れて口縁部に真上に立ち上がるもので、口縁端部を強く外反させている。

地山検出 (E147) : E147は大窯陶器の天目茶碗で、口縁部径10.3cm、内・外面に鉄釉がみられる。体部上半で内湾気味に上方に折れて口縁部に至り、口縁端部

を外反させている。

・09Da 区出土遺物 (第36図～第41図)

須恵器613点、古代土師器714点、灰釉陶器139点、南部系陶器296点、北部系陶器254点、中世土師器183点、古瀬戸陶器71点、大窯陶器81点、常滑甕30点、中世土師器鍋50点、近世陶磁器75点、弥生土器28点、青磁器2点、白磁器3点、瓦器3点、いぶし瓦5点、土錘1点、下呂石製石鏃1点、チャート未製品1点、砥石4点、石臼1点などがある。

001SD (S004) : S004は下呂石製の打製石鏃で、凹基式のものである。先端部を欠損していて、幅1.3cm、厚み0.3cmをはかる。

018SK (E148) : E148は製塩土器の口縁部で、口縁部径8.0cm程である。口縁部がやや肥厚して丸くおわり、口縁部から塩垂れと思われるやや白色化した部分がみられる。

019SK (E149) : E149は焼成不良の時期不明のものであるが、須恵器の壺の高台の可能性もある。

027SI (E150) : E150は製塩土器の体部の底部分で、内面はヨコハケ調整とナデ調整がみられる。

029SK (E151) : E151は江戸時代の志野釉輪禿皿で、口縁部径10.0cmのものである。

038SK (E152～E154) : E152は須恵器の甕の体部片で、外面に縄目たたき痕がある。E153は土師器のハケ調整をほどこす甕で、緩やかに外反する口縁部から端部が摘まみ上げられる7世紀の伊勢型甕である。口縁部径19.0cm、頸部径15.7cmである。E154は青磁の碗で、口縁部径15.0cmである。

046SK (E155～E157) : E155は9世紀の須恵器の無高台の杯身で、底部径7.0cmをはかり、やや丸みをもって体部が立ち上がる。E156は10世紀の灰釉陶器の碗で、外面に灰釉がみられ、内湾する高台が付く、底部径8.0cmである。E157は中世土師器の内耳鍋で、口縁部径40.0cmと大型に復元できた。

047SD (E158) : E158は奈良時代の須恵器の杯身で、断面方形の高台が付く底部径16.0cmの比較的大型のものである。

051SK (E159) : E159は土錘で、長さ3.5cm、幅2.4cm、孔径0.9cm、重さ9.3gの太身のものである。

063SK (E160) : 奈良時代の須恵器の杯身で、口縁部

がやや斜めにひらくものである、口縁部径 16.0cm。

070SK (E161) : E161 は 8 世紀前半の須恵器の杯蓋で、口縁部径 18.0cm に比べて、器高が低い偏平な形態である。

081SK (E162) : E162 は奈良時代の須恵器の杯身で、口縁部 18.0cm である。

082SK (E163・E164) : E163・E164 は奈良時代の須恵器で、E163 は口縁部径 18.0cm で、口縁端部がやや小さく折り曲げる杯蓋、E164 は脚付盤で、皿状の身から、口縁部が短く立ち上がり、口縁端部をやや外反させるものである、口縁部径 22.0cm である。

085SD (E165～E168) : E165・E166 は北部系陶器の碗で、15 世紀後半の高台の無いものである、どちらも口縁部径 10.0cm で、底部から丸みをもって口縁部へ立ち上がる器形である。E167 は古瀬戸陶器の盤類で、底部径 12.0cm のものである。E168 は江戸時代以後の白色釉小皿で、口縁部径 10.0cm である。

086SD (E169～E171) : E169・E170 はにぶい黄橙色の色調の中世土師器の皿の底部で、ロクロ成形をした後、底部を糸切りするものである。どちらも底部径 6.0cm をはかる。E171 は大窯陶器の灰釉緑釉挟皿で、口縁部の内・外面に灰釉をかける碗に近い形状のものである。口縁部径 12.0cm、底部径 5.6cm、器高 2.8cm をはかり、底部から口縁部の立ち上がりやや丸みをもってひろがる。これらは 15 世紀後半～16 世紀前半にかけてのものである。

087SD (E172～E174・M005) : E172 は須恵器の杯身、外面底部に「×」の線刻がみられる。E173 は 13 世紀後半の北部系陶器の碗で、薄い器壁のもので、口縁部径 13.0cm をはかる。E174 は白磁の碗で、内面と外面の上半部に釉薬が施される。M005 は椀型鉄滓で、長径 7.4cm、短径 5.1cm、厚み 1.6cm、重さ 87.3g の中型のものである。上面の片側の縁辺に白色付着物がみられ、送風がこの部分からあった痕跡と思われる。

088SD (E175) : 8 世紀前半の須恵器の杯身で、やや「ハ」の字にひらく断面方形の高台が付く。底部径 10.0cm である。

089SK (E176～E182) : E176 は 8 世紀初頭の須恵器の杯身で、ほぼ直線的に斜めにひらく口縁部と底部が高台の位置から中央に向かい下がるものである。口

縁部径 14.0cm、底部径 11.0cm、器高 3.8cm である。E177 はにぶい黄橙色の色調の土師器の小皿で、ヨコナデ調整がされており、口縁部径 7.0cm である。E178 は灰白色の色調の土師器の小皿で、ロクロナデ調整がされるものである、底部径 3.5cm をはかる。E179 は口縁部がやや丸く内湾する中世土師器の内耳鍋で、口縁端面がほぼ水平になるものである、口縁部径 20.0cm をはかる。E180 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の鉄釉插鉢で、底部径 10.0cm である。E181 は白磁の碗で、口縁部外面が肥厚して玉縁状になるものである、口縁部径 18.0cm である。

090SD (E182～E189) : E182 は 12 世紀末～13 世紀初頭の南部系陶器の碗で、比較的整った断面三角形の高台が付く。底部径 8.0cm をはかる。E183・E184 は中世土師器の小皿で、どちらも灰白色の色調をもつナデ・ヨコナデ調整によるものである、E183 は口縁部径 5.4cm、底部径 4.5cm、器高 1.0cm、E184 は口縁部径 6.5cm、底部径 4.5cm、器高 1.0cm をはかる。E185 はロクロナデ調整による中世土師器の皿で、口縁部径 14.0cm をはかる、15 世紀後半以後のものと思われる。E186・E187 は中世土師器の内耳鍋で、どちらも口縁部が内湾してやや丸みをもつもので、口縁部径 22.0cm をはかる、15 世紀後半以後のものである。E188 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の天目茶碗での底部片で、ケズリ出し高台のものである、底部径 4.5cm で内・外面に鉄釉がみられる。E189 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の鉄釉插鉢で、口縁部径 32.0cm をはかる、口縁端部がやや内湾する。

091SK (E190) : E190 は古代の製塩土器で、口縁部がやや肥厚する鉢形のもので、口縁部径 8.8cm をはかる。

095SK (E191) : E191 は灰釉陶器の碗で、内・外面に灰釉が施されているもの、口縁部径 13.0cm をはかる。

096SI (E192～E194) : E192・E193 は須恵器の杯身で、E192 は口縁部径 15.8cm、E194 は古代の製塩土器で、口縁部がやや肥厚して丸くおわるもの、口縁部径 9.0cm で、二次被熱をしている。

097SK (E195～E197) : E195 は口縁部径 12.0cm の須恵器の杯身で、黒褐色の色調をもつ。E196 は古代

の製塩土器で、口縁部径 6.0cm の器壁が薄いものである。E197 は土師器の甕で、口縁部がヨコナデ調整され外反しておわるものである。

108SK (E198・E199) : E198 は 8 世紀後半の須恵器の甕で、タタキ痕のある底部片である、底部径 20.0cm をはかる。E199 は古墳時代の土師器の台付甕の脚部で、脚部下端を内側に折り返している、脚部径 7.7cm である。

125SK (E200) : 古代の土師器の伊勢型甕で、外反する口縁部から口縁端部が上方に摘まみ上げられておわるもので、内・外面にハケ調整がみられる。

135SK (E201) : 青磁の碗で、口縁部径 13.0cm をはかる。

136SD (E202～E204) : E202 は 13 世紀中頃の北部系陶器の碗で、靱殻圧痕があまりなく、やや外側につぶれた断面三角形高台が付く、底部径 6.0cm である。E203 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の鉄釉袴腰形香炉である、外面に鉄釉が流れ、三足が付く。E204 は大窯陶器の鉄釉插鉢で、口縁部端部が上方に摘まみ上げられたようになっている、口縁部径 27.0cm である。

138SD (E205～E217・M006・S009) : E205 は 8 世紀後半の須恵器の鉢で、やや深い筒状の鉢形になるもので、底部は糸切りされている。E205 は胎土がきめ細かく、色調が明るい須恵器の大型壺で、美濃須衛窯産のものと思われる。E207 は灰釉陶器の碗で、内湾して下端部がとがる高台がつく、底部径 7.0cm をはかる。E208 は灰釉陶器の壺の口縁部で、広口になるものである。E209 は 15 世紀前半の北部系陶器の碗で、高台の有無は不明であるが、体部が丸みをもって立ち上がりもので、口縁部径 14.0cm である。E210 は中世土師器の内耳鍋で、口縁部が内湾する形態のものである、口縁部径 22.0cm で、15 世紀後半～16 世紀前半のものである。E211・E212 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器で、E211 は口縁部径 25.0cm 程で、口縁部がやや受け口状になる灰釉鉋鉢、E212 は底部径 8.4cm の灰釉尊式花瓶である。E213～E216 は 15 世紀末～16 世紀前半の大窯陶器で、E213 が灰釉緑釉挾皿で、口縁部径 12.0cm の碗形態に近いもの、E214 は無釉の灯明皿で、口縁端部が摘まみ上げられるもの、口縁部径 11.8cm をはかる、E215・E216 は口縁部付近まで摺り目が入

る鉄釉插鉢で、E215 は口縁部径 31.0cm で、口縁端部が上方に摘まみ上げられるような受け口状になるもの、E216 は底部径 9.7cm である。E217 は常滑窯産の甕の底部である、底部径 13.0cm をはかる。M006 は椀型鉄滓で、長径 6.6cm、短径 5.2cm、厚み 2.1cm、重さ 98.2g のものである。下面に植物質痕がみられる。S009 は茶臼の下臼で、玄武岩製である。外面は敲打痕が残し、内面はきれいに研磨されている。

141SK (E218・E219) : E218 は中世土師器の小皿で、口縁部径 12.0cm をはかり、灰白色の色調で、ヨコナデ調整のものである。E219 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の灰釉緑釉腰折皿で、内・外面に灰釉が施されており、口縁部径 11.6cm である。

147SD (E220・E221) : E220 は 9 世紀後半の灰釉陶器の碗で、内・外面に灰釉がみられ、比較的高い高台が付く、底部径 8.2cm である。E221 は 13 世紀前半の南部系陶器の碗で、底部径 9.0cm、つぶれた断面三角形高台が付く。

152SK (E222) : E222 は北部系陶器の碗で、14 世紀後半～15 世紀前半のものである、体部下半に丸みを帯びて口縁部にいたるもので、口縁部径 13.8cm をはかる。

155SD (E223) : E223 は古代の土師器の甕で、口縁部が外反し、口縁端部を少し上方につまむ痕跡がみられるものである、口縁部径 15.7cm をはかる。

160SK (E224～E226) : E224 は弥生時代後期のワイングラス形の高杯である。杯部には口縁部の下から赤彩がなされ、タテミガキがみられる、口縁部には沈線直線文が 5 条みられる。E225 は 9 世紀後半の灰釉陶器の皿で、薄い器壁で口縁端部を強く外反させておわる、口縁部径 16.0cm をはかる。E226 は 13 世紀後半の北部系陶器の碗で、底部径 4.0cm、全体に薄い器壁で、靱殻圧痕が目立つ断面三角形高台が付く。

161SK (E227～E229・S013) : E227 は 15 世紀後半の北部系陶器の無高台の碗で、底部径 4.0cm である。E228 は中世土師器の内耳鍋で、口縁部が内湾するものである。E229 は大窯陶器の灰釉皿で、口縁部径 12.0cm、16 世紀前半のものである。S013 は凝灰岩製の砥石で、砥面に残る摺り目の方向は不定である、破面にも摩滅痕がみられる、長径 4.9cm、短径 1.9cm、

厚み 1.0cm、重さ 13.8g である。

164SD (E230 ～ E240) : E230・E231 は奈良時代の須恵器の杯身で、E230 は口縁部径 14.5cm、E231 は底部径 9.5cm である。E232 は美濃須衛窯産と思われる灰釉陶器の碗で、緻密な胎土である、底部径 8.0cm で、内湾する比較的高い高台が付く。E233 は南部系陶器の片口鉢で、13 世紀前半のものである、口縁部径 23.3cm をはかる。E234 は 13 世紀末～14 世紀前半の北部系陶器の碗で、薄い器壁で体部から口縁部が直線的にのびるものである、口縁部径 14.0cm をはかる。E235 は 15 世紀後半の北部系陶器の無高台の碗で、薄い器壁でまるみをもって体部から口縁部に至り、口縁端部をやや内側に摘まみ上げる、口縁部径 10.0cm、底部径 4.0cm、器高 2.2cm をはかる。E236 は丸底の土師器の小皿で、ナデ・ヨコナデ調整によるものである、口縁部径 6.0cm、器高 1.0cm である。E237 は甕のようであるが、口縁端面にハケ刻みがあり、弥生土器の可能性がある。E238 ～ E240 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器で、E238 は鉄釉天目茶碗の口縁部で口縁部径 11.0cm、E239 は底部削り出し高台の鉄釉天目茶碗で、底部径 4.2cm、E240 は灰釉鉋目付大皿の口縁部で、口縁部の内面がやや摘まみ上げられて、帯状にめぐり。

165SK (E241 ～ E243・M007) : E241 は 14 世紀後半～15 世紀前半の北部系陶器の碗で、口縁部径 12.0cm である。E242 は 15 世紀後半の北部系陶器の無高台の碗で、底部から直線的に口縁部に立ち上がり、口縁端部を内側にやや折り曲げる、口縁部径 9.8cm、底部径 4.0cm、器高 1.8cm である。E243 は中世土師器の内耳鍋で、やや内湾する口縁部片である。M007 は小型の椀型鉄滓で、長径 4.4cm、短径 2.8cm、厚み 1.9cm、重さ 39.6g をはかる。

192SK (E244) : E244 は土錘の破片で、復元径 2.2cm、復元孔径 0.9cm である。

201SK (E246) : E246 は中世土師器の内耳鍋で、口縁部が内湾するものである。

202SD (E247 ～ E249) : E247 は北部系陶器の小皿の底部で、底部径 5.0cm をはかる、14 世紀後半～15 世紀前半のものと思われる。E248・E249 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器である。E248 は灰釉縁釉小皿で、口縁部の内・外面に灰釉がかかる、口縁部径 12.0cm であ

る。E249 は鉄釉袴腰形香炉で、鉢に近い形状で、口縁部が強く外反し、受け口状になる。口縁部径 11.0cm、口縁部から内・外面に鉄釉が施されている。

209SD (E250 ～ E254) : E250 は弥生時代中期後葉の櫛条痕調整の深鉢である。口縁部が摘まみ上げて三角形の突起になる箇所がある。外面はタテ羽状櫛条痕調整、内面はヨコナデ調整で、口縁部を櫛条痕刺突文列と櫛条痕波状文がめぐる。口縁部径 24.5cm をはかる。E251 ～ E253 は北部系陶器の碗である。E251・E252 は 15 世紀後半のもので、口縁端部が内面側につまみ上げられておわるもので、E251 は口縁部径 10.6cm、底部径 4.0cm、器高 2.0cm、E252 は口縁部径 10.2cm をはかる。E253 は 14 世紀後半のもので、底部径 3.8cm、靱殻圧痕がみられ、つぶれた高台が付く。E254 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の灰釉縁釉小皿で、口縁部径 11.0cm をはかる。

212SD (M001) : M001 は鉄製品の本体はほとんど消失しているもので、山形状の扁平な鉄金具と思われる。

217SK (E255・M002) : E255 は 15 世紀後半の北部系陶器の碗で、口縁端部が内面側に摘まみ上げられておわるもの、口縁部径 11.0cm をはかる。M002 は鉄釘と思われるもので、東部を欠損していて径 0.8cm ～ 0.9cm である。

218SK (E256) : E256 は大窯陶器の鉄釉縁釉挾皿で、底部から丸みをもって体部が立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する形態で、鉄釉が口縁部から施されている、口縁部径 14.6cm、底部径 6.0cm、器高 2.9cm である。15 世紀末～16 世紀前半のものと思われる。

220SD (E257 ～ E259・S008) : E257 は北部系陶器の小皿で、薄い器壁で底部から口縁部が直線的にひらくものである。外面底部に墨書がある。口縁部径 8.0cm、底部径 5.5cm、器高 1.2cm で、14 世紀後半～15 世紀前半のものである。E258 は中世土師器の茶釜形鍋で体部径は 24.0cm である、16 世紀前半のものと思われる。E259 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の鉄釉口広有耳壺の体部片で、体部径 17.9cm 程である。S008 は石製の茶臼の下臼で、外径は 38.0cm 前後になるものと考えられる。外面に敲打痕が残り、内面が研磨されている。09Da 区の 138SD 出土の S009 と形態が類似するもので、出土遺物からは 15 世紀後半～16 世紀前半のもの

と考えられる。

221SK (E260・M003) : E260 は中世土師器の丸底の小皿で、ナデ・ヨコナデ調整のものである、灰黄褐色の色調で、口縁部径 6.8cm、器高 1.2cm をはかる。M003 は不明の鉄製品で、江戸時代以後のものかと思われる。形態は断面長方形の鉄製の棒が上下二列に並んだもので、長さ 2.8cm 分があるのみである。

234SD (E261・E262) : E261 は 15 世紀後半の北部系陶器の碗で、口縁部径 10.5cm、外面のヌタ痕が顕著である。E262 は中世土師器の小皿で、ナデ・ヨコナデ調整のもので、指ナデの痕跡が顕著である、色調は浅黄橙色で、丸底である、口縁部径 6.8cm、器高 1.2cm をはかる。

244SD (E263～E265) : E263・E264 は 8 世紀後半の須恵器で、E263 はやや「ハ」の字にひらく断面方形の高台が付く杯身で、底部径 11.9cm をはかる。E264 もやや「ハ」の字にひらく断面方形の高台が付く壺で、底部径 13.8cm をはかる。E265 は南部系陶器の碗で、断面三角形の高台が付くものである、底部径 6.2cm で、12 世紀後半～13 世紀初頭のものと思われる。

245SD (E266～E268) : E266 は須恵器の大甕で、口縁部があまり外反せずにひらき、口縁端部下にて一度内側にくぼませて上端を外側に出す形態である、口縁部径 17.6cm、頸部径 16.2cm で、灰白色の色調で緻密な胎土の特徴から、8 世紀後半の美濃須衛窯産のものと思われる。E267 は 13 世紀後半の北部系陶器の碗で、底部径 5.0cm、扁平な高台が付く。E268 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の灰釉四耳壺で、口縁端部が外側に折り返されて肥厚している、口縁部径 10.0cm、頸部径 8.2cm である。

247SK (E269) : E269 は製塩土器で、薄い器壁で、内湾する口縁部である。口縁部径 8.6cm をはかる。

検出 1 (E270～E278・S014・S015) : E270 は 12 世紀後半～13 世紀初頭の南部系陶器の碗で、断面台形状の高台が付く、底部径 7.6cm をはかる。E271 は南部系陶器の碗で、底部径 6.0cm をはかり、断面三角形の高台が付く、胎土などの特徴から渥美窯産のものと思われる。E272・E273 は 15 世紀後半の北部系陶器の碗で、ヌタ痕が顕著にみられ、E272 は口縁端部が内側に摘まみ上げられている、E272 が口縁部径

13.6cm、E273 が口縁部径 12.0cm である。E274 は中世土師器の小皿で、浅黄橙色の色調で、ナデ・ヨコナデ調整の丸底のものである、口縁部径 5.8cm、底部径 3.0cm、器高 1.0cm をはかる。E275 は中世土師器の皿で、ロクロナデ調整の色調がにぶい黄褐色のもので、15 世紀後半のものと思われる。内・外面に煤が付着する。E276 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の灰釉縁釉小皿で丸みのある立ち上がりである、口縁部径 9.8cm である。E277 は 14 世紀後半の古瀬戸陶器の灰釉卸皿で、口縁部から内・外面に灰釉が施される、口縁端面が内面に有段状になっている、口縁部径 14.0cm をはかる。E278 は江戸時代の瀬戸・美濃産陶器の灰釉徳利で、体部に線刻文がみられる。S014・S015 は凝灰岩製の砥石で、砥面にある掘り目は方向が不定である。S014 が長径 4.3cm、短径 3.3cm、厚み 1.3cm、重さ 19.1g、S015 が長径 3.0cm、短径 3.0cm、厚み 0.6cm、重さ 7.3g の板状である。

検出 2 (E279・E280・M008・S016) : E279 は 8 世紀前半の須恵器の杯身で、底部径 10.8cm、断面方形の高台が付く。E280 は土師質の土玉で、径 2.7cm 戦後、重さ 15.4g である。M008 は 2 分の 1 分割碗型鉄滓で、長径 6.5cm、短径 5.8cm、厚み 2.4cm、重さ 90.7g をはかる。S016 は凝灰岩製の砥石で砥面にある擦り目の方向は不定で、破面の一部にも摩耗が見られる、長径 7.4cm、短径 7.1cm、厚み 4.2cm、重さ 253.9g の角礫状のものである。

西壁トレンチ (E281) : E281 は黒色塗りの土製品で、浅い鉢から皿状の奇警になるものと思われる。

重機掘削 (E282～E285・S005) : E282 は 7 世紀後半の土師器の伊勢型甕で、丸みのある体部から口縁部が「く」の字状に外反し、口縁端部が上方に摘み上げられるもので、体部の内・外面がハケ調整で、口縁部から頸部がヨコナデ調製されている。色調は浅黄橙色で、口縁部径 33.2cm、頸部径 29.4cm である。E283 は江戸時代の鉄釉摺鉢片を転用したもので、側面の破面に研磨がみられる。E284 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の灰釉縁釉小皿で底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部がやや外反して広がる。口縁部径 10.4cm で、口縁部の内・外面に灰釉が施されている。E285 は江戸時代的美濃窯産陶器の灰釉壺蓋と思われるものである。

S005 はチャート製の両極石器で、平面台形状の形態で、打製石器を作る過程のものである。縁辺の一部に連続した小剥離がみられ、長径 3.30cm、短径 1.75cm、厚み 1.60cm、重さ 25.7g をはかる。

・09Db 区の出土遺物（第 41 図・第 42 図）

須恵器 107 点、古代土師器 213 点、灰釉陶器 27 点、南部系陶器 59 点、北部系陶器 41 点、中世土師器 28 点、古瀬戸陶器 21 点、大窯陶器 9 点、常滑甕 2 点、中世土師器鍋 4 点、近世陶磁器 26 点、弥生土器 4 点、青磁器 2 点、いぶし瓦 1 点などがある。

251SK (E286～E289)：E286～E289 は中世土師器の小皿で、ナデ・ヨコナデ調整によるものである。色調は E286・E287 がにぶい黄褐色で、E288 は灰白色である。E286 は丸底で、口縁部径 6.0cm、器高 1.6cm、E287 は口縁部径 6.8cm、底部径 4.2cm、器高 1.0cm、E288 は口縁部径 7.0cm、底部径 5.2cm、器高 1.1cm である。E289 は 15 世紀前半～中頃の古瀬戸陶器の鉄釉縁釉小皿で、底部径 5.0cm である。底部に墨痕がみられる。

257SK (E290・E291)：E290 は 7 世紀後半の須恵器の杯蓋で、口縁部と天井部の境の稜がやや不明瞭になっている。口縁部径 10.6cm である。E291 は江戸時代後期の瀬戸窯産陶器の灰釉碗で、断面方形の高台が付く、底部径 3.8cm である。

259SK (E292～E295)：E292 は 7 世紀後半の須恵器の杯蓋で、口縁部に返りがあるものである。口縁部径 10.5cm である。E293 は須恵器の杯身で、口縁部が斜め上に広がっておわる、口縁部径が 15.0cm で 8 世紀のものである。E294 は古代の土師器の甕で、表面が摩滅して調整などは不明である。口縁部が外反して、口縁端部が丸くおわる。口縁部径 13.0cm、体部径 10.4cm をはかる。E295 は古代の土師器の清郷型鍋で、ヨコナデ調整された口縁部が短く外反しておわる。口縁部径 30.6cm、頸部径 30.0cm である。

261SD (E296)：E296 は 15 世紀前半の北部系陶器の無高台の碗で、底部径 5.0cm をはかり、内・外面に煤が付着する。

262SD (E297)：E297 は須恵器の大型浅鉢で、底部径 26.0cm をはかり、体部外面はヘラケズリ調整がされている。7 世紀後半～8 世紀前半のものと思われる。

265SD (E298・E299)：E289 は口縁部径 19.0cm の深鉢形土器で、体部にタテハケ調整がみられ、内・外面の口縁部はヨコナデ調整である。E299 は弥生時代中期の櫛条痕調整の深鉢の底部で、内面はヨコナデ調整で、底部外面に布圧痕がみられる。

269SD (E300)：E300 は古代の土師器の濃尾型甕で、平底の底部から外面がハケ調整の体部が丸みをもって立ち上がる、体部の内面はナデ・ヨコナデ調整である。底部径 6.8cm である。

270SK (E301)：E301 は南部系陶器の碗で、13 世紀前半のものである、口縁部径 12.4cm で、ほぼ直線的に立ち上がる体部から口縁部がやや外折しする。

271SD (E302～E304)：E302 は 15 世紀前半の北部系陶器の無高台の碗で、底部径 5.2cm である。E303 は中世土師器のナデ調整と思われる小皿で、色調は灰白色で、口縁部径 5.2cm、底部径 2.6cm、器高 0.8cm をはかる。E304 も中世土師器の小皿で、色調は淡黄色のナデ・ヨコナデ調整によるものである。口縁部径 9.0cm で、口縁部外面に煤・タール状のものが付着する。

282SD (E306)：E306 は口縁部径 7.3cm の薄手の製塩土器である。二次被熱のために赤変している。

283SD (E307～E313)：E307 は須恵器の杯身で、口縁部径 13.0cm のもの、E308 は 10 世紀後半の灰釉陶器の碗で、底部径 6.0cm をはかり、丸みのある内湾する高台が付く、E309 は 15 世紀前半の北部系陶器の無高台の碗で、底部径 5.5cm、外面にヌタ痕がみられる。E310 は中世土師器の小皿で、指ナデ・ヨコナデ調整がよく観察できるものである、底部が下に突出し、口縁部は強いヨコナデにより形成されて外反している。口縁部径 6.8cm、底部径 6.0cm、器高 1.1cm をはかり、にぶい橙色の色調である。E311 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の鉄釉燭台の脚部である、脚部から上半部につなぐ膨らみの部分が特徴的である。E312 は 15 世紀前半～中頃の古瀬戸陶器の鉄釉瓶子の皿類に分類されるものである。細い頸部から大きく膨らんだ体部上半に櫛描波状文がめぐる。E313 は大窯陶器の灯明皿で、口縁部径 12.0cm の口縁部を内側上方に摘まみ出す、無有のものである。15 世紀末～16 世紀前半のものである。

289SD (E314・E315)：E314 は 15 世紀後半の北部

系陶器の無高台の碗で、底部からやや丸みをもって口縁部に至り、口縁端部が内側にやや摘み上げられている。口縁部径 10.0cm、底部径 3.8cm、器高 2.3cm をはかる。E315 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の灰釉稜花皿で、口縁部径 11.5cm、底部径 4.2cm をはかる。高台は貼り付け高台で、底部から口縁部が大きく外反してひらく。内・外面に灰釉が施されている。

検出 2 (E316 ～ E318) : E316 は 8 世紀後半の須恵器の杯蓋で、口縁部径 16.0cm で、口縁端部が短く下方に折れる。E317 は 7 世紀後半の須恵器の高杯で、杯部の体部と口縁部の稜がやや不明瞭なもので、口縁部径 9.4cm をはかる。E318 は古代の土師器の濃尾型甕で、内・外面にハケ調整がみられ、口縁部が頸部から強く外反しておれる 8 世紀のものと思われる。口縁部径 19.4cm、頸部径 15.5cm をはかる。

・ 09Dc 区の出土遺物 (第 42 図～第 44 図)

須恵器 819 点、古代土師器 286 点、灰釉陶器 52 点、南部系陶器 47 点、北部系陶器 46 点、中世土師器 88 点、古瀬戸陶器 10 点、大窯陶器 10 点、常滑甕 6 点、中世土師器鍋 5 点、近世陶磁器 18 点、弥生土器 1 点、いぶし瓦 3 点、打製石鏃 1 点などがある。

292SN (E319 ～ E329) : 近世後期～近代の水田遺構からの出土遺物で、E319 ～ E324 が須恵器で、E319・E322 は 8 世紀前半の杯身で、どちらも高台の外側が斜め上を向く断面方形の高台が付く、E319 は口縁部径 15.0cm、底部径 9.3cm、器高 3.9cm、E322 は底部径 9.0cm をはかる。E320 は色調が灰白色で胎土が緻密な美濃須衛窯産のもので、8 世紀後半の杯身と思われる、口縁部径 15.0cm、底部径 9.3cm、器高 3.9cm である。E321・E323・E324 は 8 世紀後半の杯身

で、E321 は口縁部径 11.4cm のやや深い器形である、E323・E324 は断面方形の高台の内面側が下から浮く形態のものである、E323 が底部径 11.2cm、E324 が底部径 8.4cm である。E325 ～ E328 は灰釉陶器の碗で、E325・E326 は 9 世紀後半の器壁が薄く、体部下半に丸みを持ち、口縁端部が大きく外反するもので、E325 が口縁部径 18.0cm、E326 が口縁部径 17.9cm と大型のものである。E327・E328 は 10 世紀前半のもので、E327 は口縁部径 10.0cm と内・外面に灰釉がみられる小碗に近い形状のもの、E328 はやや高く断面「ハ」の

字にひらく高台が付くもので、底部径 7.0cm をはかる。E329 は南部系陶器の碗で、高台部分の底部の器壁が厚く、底部中央付近が薄くなるもので、断面小さい三角形高台が付く、底部径 7.8cm である。

293SN (E330 ～ E342) : E330 ～ E338 は須恵器で、E330 ～ E332 は 8 世紀後半の杯蓋で、E330・E331 は径 2.6cm の中央がややへこむ摘みが付く、E330・E332 の口縁部はやや外側にひらいて折れる形態である、口縁部径は E330 が 14.5cm、E332 が 13.5cm をはかる。また E330 は器高が 3.0cm あり、膨らみのある蓋である。E333 はやや明るい灰色の色調で緻密な胎土である 8 世紀の美濃須衛窯産の杯身と思われるもので、口縁部径 15.7cm、底部径 11.3cm、器高 3.6cm をはかる。E334 は 8 世紀後半の杯身で、口縁部径 15.0cm のものである。E335 は 8 世紀前半の短頸壺で、口縁部が体部から内傾してのびる、口縁部径 17.0cm、頸部径 18.5cm である。E336 は 8 世紀後半の短頸壺で、E335 と同様に口縁部が体部から内傾して短くのびるものである、口縁部径 11.0cm、頸部径 11.5cm をはかる。E337 は 8 世紀後半の断面「く」の字状に口縁部が外反する甕で、外面の体部をタタキ調整の後口縁部のヨコナデ調整が残る、口縁部径 26.0cm、頸部径 23.4cm をはかる。E338 は外面にタタキのある甕の体部片で、内面に焼成時に形成された黒色痕跡がみられる。E339 は 15 世紀後半の北部系陶器の碗で、口縁部径 10.0cm、底部径 4.8cm、器高 2.3cm で、底部に高台の可能性のある粘土の貼り付けがみられる。E340 は口縁部が肥厚する製塩土器で、口縁部径 8.4cm である。E341 は 15 世紀後半以後の中世土師器の皿で、底部から口縁部は斜め上方にひらく形態である。色調は浅黄橙色のロクロナデ調整によるもので、口縁部径 11.4cm、底部径 6.2cm、器高 2.4cm をはかる。E342 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の鉄釉縁釉小皿で、鉄釉が口縁部内・外面に施されている。口縁部径 9.0cm、底部径 5.0cm、器高 2.0cm をはかる。

294SN (E343) : E343 は 15 世紀後半の古瀬戸陶器の鉄釉擦鉢で、口縁端部が受け口状にやや内湾しておわるもの、口縁部径 32.0cm である。

298SK (E344・E345) : E344 は弥生土器の広口壺の体部片で、櫛描き波状文がみられる、弥生時代後期の

ものである。E345は8世紀後半～9世紀の須恵器の無高台の杯身で、体部下半にやや丸みがある椀形になるものか、底部径7.5cmである。

303SD (E346～E352) : E346・E348・E350・E351は8世紀後半の須恵器である。E346は杯蓋で、口縁部やや外側下方に折れるもので、口縁部径13.6cmをはかる。E348は体部が丸みをもつ杯身で、口縁部径11.6cmをはかる。E350は丸みのある体部をもつ高杯の杯部で、口縁端部が内側にやや面をもつ。E351は大型壺の口縁部で、口縁部径31.2cm、頸部に櫛描波状文がみられる。E347は8世紀初頭の須恵器の杯身で、断面三角形の高台の外側が下から浮くものである、口縁部径16.2cm、底部径10.3cm、器高4.1cmをはかる。E349は瓦器質の高台が付く椀状の杯身で、底部が下に突出している。底部径8.0cmをはかり、焼成不良で軟質なもので、外面に煤が付着している。E352は15世紀後半の古瀬戸陶器の鉄釉祖母懷茶壺で、肩部に把手を付ける。

304SD (E353～E369) : E353～E358は8世紀の須恵器の杯蓋で、E353～E356は天井部を欠くもので、口縁部径はE353が13.0cm、E354が13.5cm、E355が15.6cm、E356が20.0cmで、E356は器高が高い大型のものである。E357・E358は天井部のもので、摘み部が残るもので、E357は8世紀前半のもの、摘み部の中央がへこむもの、E358は摘み部中央がやや高まるものである。E359～E362は8世紀の須恵器の杯身で、E359は口縁部径13.0cmをはかる口縁部片、E360は底部径9.3cmをはかる高台がやや外側にひらく断面方形高台が付くもの、E361は底部径6.0cmで椀形に近い無高台のもの、E362は色調は灰白色で緻密な胎土である美濃須衛窯産のもので、底部径8.0cmをはかり、無高台である。E363は須恵器の高杯の杯部片で、外面に3条の線刻がみられる。E364は8世紀前半の須恵器の鉢で、丸みのある体部をもつ、口縁部径18.8cmをはかる。E365は須恵器の甗で、体部径27.6cmをはかる、先端が丸くなった角状把手が付く。E366は須恵器のタタキ調整がある甗で、丸みのある体部から頸部で断面「く」の字状に口縁場が外反し、口縁端部を上方に摘み上げるものである、口縁部径24.0cm、頸部径22.2cmをはかる。E367は色調が灰

白色で緻密な胎土をもつ美濃須衛窯産の須恵器の甗で、口縁部径が28.0cmをはかり、受け口口縁になるものである。E368は9世紀後半の灰釉陶器の椀で、内・外面に灰釉がみられる。底部径8.0cmで、内湾する比較的高い高台が付く。E369は製塩土器の口縁部片で、色調が灰白色で口縁部径6.0cmをはかる。

305NR (E370～E379) : E370は8世紀前半の須恵器の杯蓋で、口縁部径18.0cmで、口縁端部が断面三角形に小さく下方に折れる。E371・E372は8世紀後半の須恵器の無高台の杯身で、E371が口縁部径11.5cm、底部径7.0cm、器高3.5cm、E372が口縁部径11.8cm、底部径6.9cm、器高3.7cmで、E371よりE372の方が、底部から口縁部が斜めにひらく。E373は土師器の杯身と思われるもので、底部径6.0cmで、色調は浅黄橙色である。E374は8世紀前半の須恵器の鉢で、丸底の体部から頸部が上方に折れて立ち上がり、口縁部がやや斜めにひらく、口縁部径9.5cm、頸部径9.2cm、器高4.8cmをはかる。底部に線刻がみられる。E375は8世紀前半の須恵器の短頸壺で、口縁部外面にハケ目が残し、受け口口縁になる、口縁部径17.2cm、頸部径14.0cmをはかる。E376は土師器の甗で、内面にヨコハケ調整がみられる、頸部径22.0cmで、E365よりやや太い角状把手が付く。E377は須恵器の甗で、丸みのある体部から屈曲して頸部から口縁部がひらく形態である、頸部径21.5cmをはかる。E378は器壁がやや薄い製塩土器で、口縁部外面に潮垂れがみられる、口縁部径6.5cmである。E379は7世紀後半の土師器の伊勢型甗で、口縁部が頸部から断面「く」の字状にやや緩く外反し口縁端部を上方に摘み上げる、外面と内面の口縁部にハケ調整がみられる。口縁部径18.0cm、頸部径15.6cmをはかる。

検出1 (E380) : E380は古代の製塩土器で、比較的厚い器壁で口縁端部が丸くおわるもの、口縁部径6.5cmで、被熱を受けている。

検出2 (E381～E385) : E381は8世紀後半の須恵器の無高台の杯身である。口縁部が底部から斜め上に直線的にひらく、口縁部径11.0cm、底部径7.2cm、器高3.3cmをはかる。E382は色調が灰白色で緻密な胎土をもつ美濃須衛窯産の須恵器の杯身と思われるもの

で、底部径 9.0cm をはかる、底部は断面方形の高台が付き、中央が下がる形態である。E383 は 8 世紀前半の須恵器の無台盤で、底部がやや丸みをもつもので、口縁部が短く斜め上に立ち上がるものである、口縁部径 15.0cm、底部径 14.0cm、器高 2.0cm をはかる。E384 は 8 世紀の浄瓶の体部片で、肩部が稜をもつものである、体部径 23.0cm をはかる。E385 は中世土師器の内耳鍋で、口縁部が丸みをもちながら立ち上がっておわるものである。内・外面に煤が付着する、15 世紀後半のものと思われる。

攪乱 (E386 ～ E390・S006) : E386 は 8 世紀後半の須恵器の杯蓋で、天井部に中央部が盛り上がる摘みが付く、口縁部径 15.0cm、器高 3.8cm で、口縁部端部が下方に断面三角形におれる。E387 は 8 世紀前半の杯蓋で、口縁部径 16.4cm で天井部を欠く。E388 は 7 世紀の須恵器の平瓶の口縁部で、口縁部径 8.0cm である。E389 は 8 世紀の須恵器の甕で、口縁部が大きく斜め上方にひらくもので、口縁端部を垂下させるものである、口縁部径 22.0cm をはかる。E390 は製塩土器で、比較的薄い器壁である、口縁部径 8.0cm である。S006 は下呂石製の打製石鏃の未製品と思われるもので、長さ 1.93cm、幅 0.55cm、厚み 0.65cm、重さ 1.6g をはかる。

重機掘削 (E391 ～ E399) : E391 ～ E395 は 8 世紀の須恵器の杯身で、E391 は口縁部径 11.0cm、E392 は 8 世紀後半の断面方形の高台が付くもので、口縁部径 14.1cm、底部径 10.0cm、器高 3.8cm をはかる。E393 ～ E395 は高台が付く底部片で、底部径は E393 が 10.0cm、E394 が 11.8cm、E395 が 20.0cm をはかる、E393 は 8 世紀後半、E395 は 8 世紀前半のものと思われる。E396 は 8 世紀前半の須恵器の広口壺か甕の口縁部で、外面に沈線直線文 5 条と沈線間に櫛描波状文が 2 帯みられる。E397 は 12 世紀中頃の南部系陶器の椀で、底部には幅広い断面三角形高台が付く、底部径 6.3cm である。E398 は 12 世紀後半～ 13 世紀初頭の南部系陶器の椀で、底部径 8.0cm で、ややつぶれた断面三角形高台が付く。E399 は中世土師器の鉢か内耳鍋と思われる口縁部片で、口縁部径 26.8cm をはかる。

・ 09Ea 区の出土遺物 (第 44 図)

調査区の北端部から出土したものである。須恵器 8

点、古代土師器 6 点、灰釉陶器 4 点、南部系陶器 2 点、北部系陶器 6 点、中世土師器 4 点、古瀬戸陶器 2 点、近世陶磁器 3 点などがある。

001SD (E400 ～ E403) : E400 は 8 世紀後半の須恵器の杯蓋で、口縁端部が外側にやや広がって下方に折れるもの、口縁部径 13.8cm である。E401 は 14 世紀後半～ 15 世紀前半の北部系陶器の椀で、口縁部径 11.6cm である。E402 は中世土師器の小皿の底部片で、色調は浅黄橙色のロクロナデ調整のもので、底部径 4.2cm をはかる。E403 は 15 世紀の古瀬戸陶器の灰釉八稜皿で、口縁部が外反してひらき、口縁端部が花卉状に成形されている。内・外面に口縁部から灰釉が施されており、口縁部径 8.7cm をはかる。

・ 09Eb 区の出土遺物 (第 44 図)

調査区の南端部から出土したものである。須恵器 4 点、古代土師器 5 点、灰釉陶器 2 点、南部系陶器 1 点、北部系陶器 2 点、中世土師器 1 点、古瀬戸陶器 1 点などがある。1 点のみ実測を行なった。

重機掘削 (E404) : E404 は 9 世紀後半の灰釉陶器の椀で、内・外面に灰釉がみられる、口縁部径 15.0cm で、丸みを帯びた体部で、口縁端部を外反させておわる。

・ 09Ec 区の出土遺物

調査区の南端部から出土したものである。須恵器 7 点、古代土師器 10 点、灰釉陶器 1 点、南部系陶器 4 点、古瀬戸陶器 1 点などがある。遺構などから出土したもので図化できるものが無かった。

・ 09Ed 区の出土遺物 (第 45 図)

須恵器 54 点、古代土師器 27 点、灰釉陶器 18 点、南部系陶器 15 点、北部系陶器 8 点、中世土師器 4 点、古瀬戸陶器 2 点、常滑甕 1 点、中世土師器鍋 2 点、近世陶磁器 14 点、下呂石剥片 1 点などがある。

018SN (E405) : E405 は須恵器の甕片を転用した加工円盤で、長径 2.3cm、短頸 2.2cm、厚み 0.9cm をはかる。

025SD (S007) : S007 は下呂石の剥片で、上下からの打撃による剥離がみられ、自然面が残る。長径 3.20cm、短径 2.75cm、厚み 1.00cm、重さ 6.9g をはかる。

027SD (E406) : 奈良時代の須恵器の杯蓋の天井部で、径 2.4cm の中央が盛り上がる摘みが付く。

034SK (E407) : 8 世紀後半の須恵器の盤で、口縁

端部を斜め上方に短く折り曲げておわる、口縁部径
18.0cmをはかる。

09Aa 区 006SD (E001) 09Aa 区 010SD (E002) 09Aa 区 011SK (E003 ~ E004)



E001



E002



E003

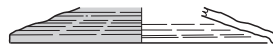


E004

09Aa 区 013SD (E005 ~ E013)



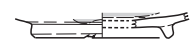
E005



E006



E007



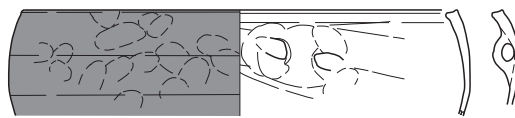
E008



E009



E010



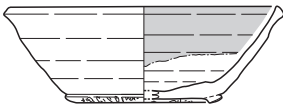
E011



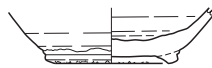
E012

E013

09Aa 区 015SK (E014 · E015)



E014



E015

09Aa 区 016SK (E016)



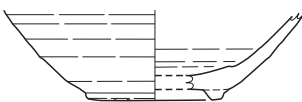
E016

09Aa 区 017SK (E017)

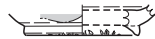


E017

09Aa 区 019SK (E018 · E019)



E018



E019

09Aa 区 029SK (E020)



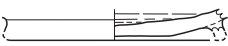
E020

09Aa 区 035SN (E021)

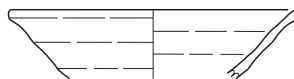


E021

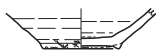
09Aa 区 052SD (E022 ~ E025)



E022



E023

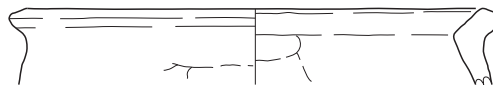


E024



E025

09Aa 区 検出 1 (E026 · E027)



E026



E027

09Aa 区 重機掘削 (E028 · E029)



E028



E029

09Ab 区 060SK (S001)



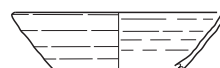
S001

09Ab 区 112SD (E033)



E033

09Ab 区 101SD (E031 · E032)



E031



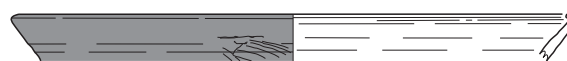
E032

09Ab 区 073SK (E030)



E030

09Ac 区 139SK (E036)



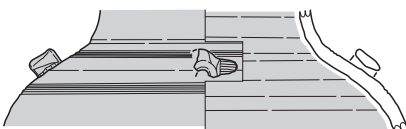
E036

09Ab 区 東トレンチ (E034)



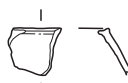
E034

09Ab 区 重機掘削 (E035)

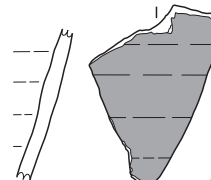


E035

09Ac 区 140SD (E037 · E038)



E037

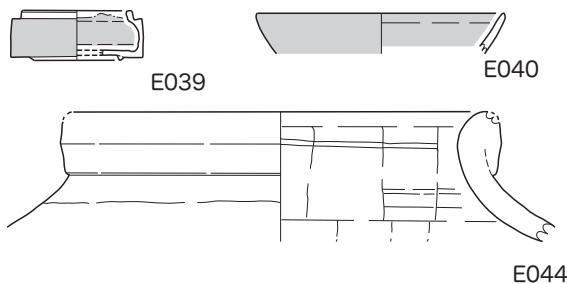


E038

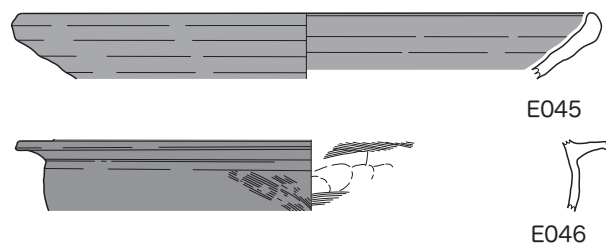
鉄釉 灰釉 スス

1/4 0 10cm

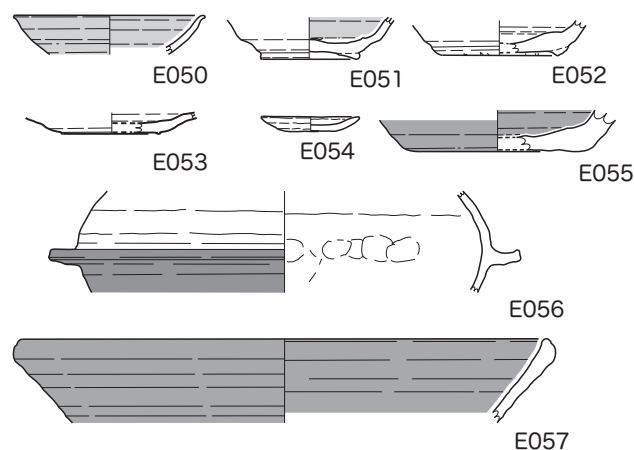
09B 区 001SD (E039 ~ E044)



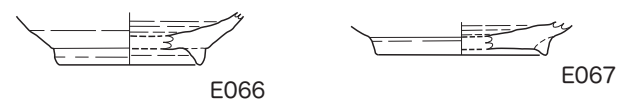
09B 区 004SD (E045 · E046)



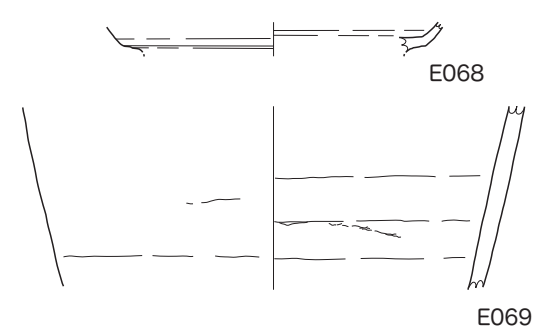
09B 区 006SD (E050 ~ E057)



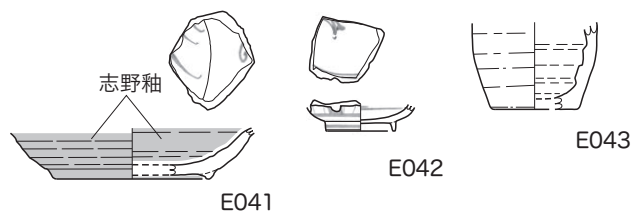
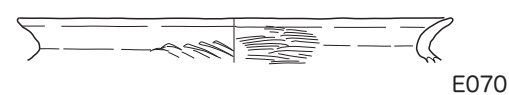
09B 区 034SK (E066) 09B 区 035SN (E067)



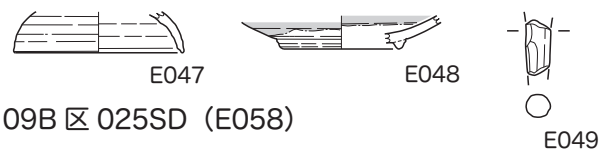
09B 区 037SK (E068 · E069)



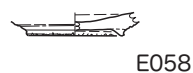
09B 区 038SK (E070)



09B 区 005SE (E047 ~ E049)



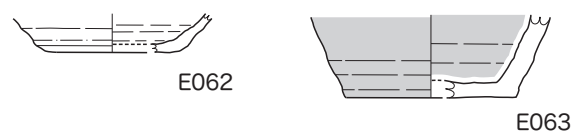
09B 区 025SD (E058)



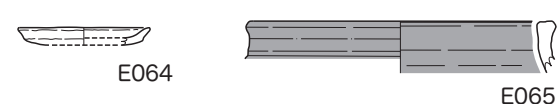
09B 区 027SD (E059 ~ E061)



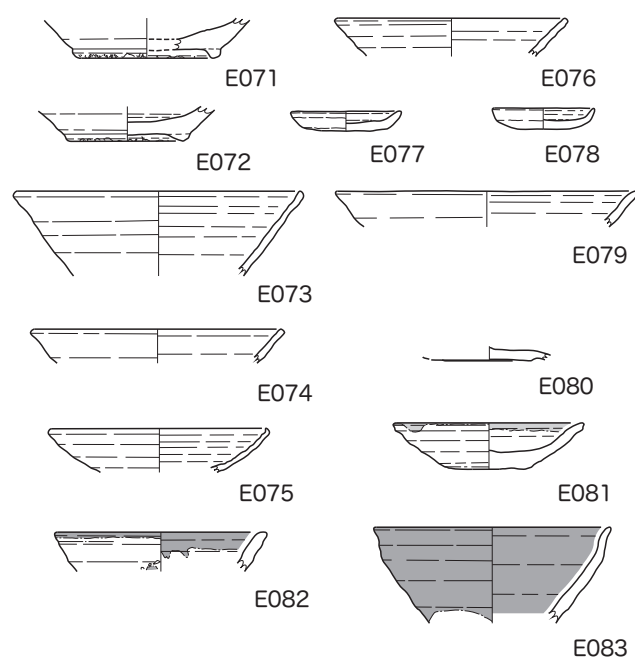
09B 区 028SK (E062 · E063)



09B 区 029SK (E064 · E065)



09B 区 046SD (E071 ~ E093 · S011)

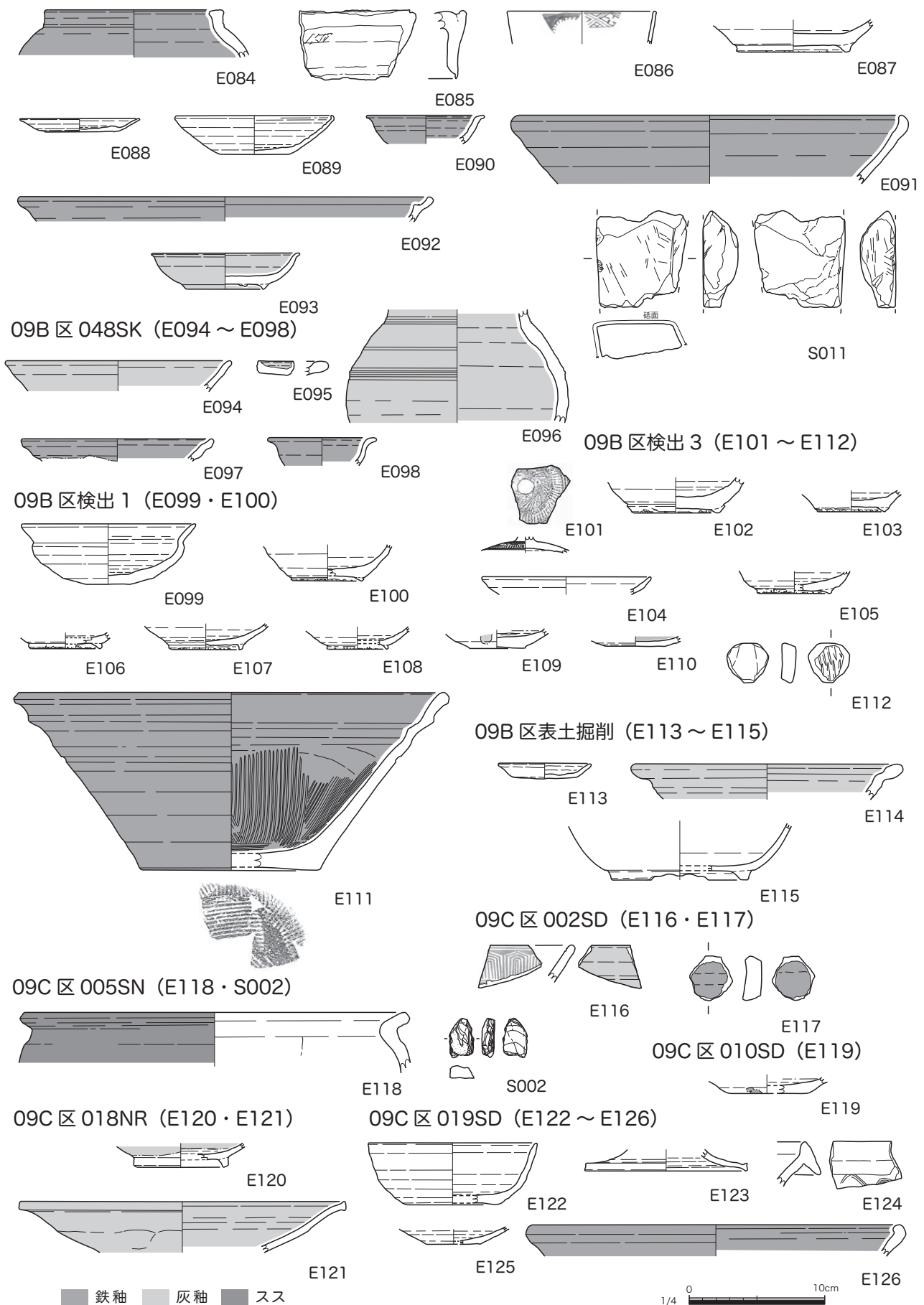


■ 鉄釉 ■ 灰釉 ■ スス

0 10cm
1/4

第 34 図 09B 区出土遺物 (1 : 4)

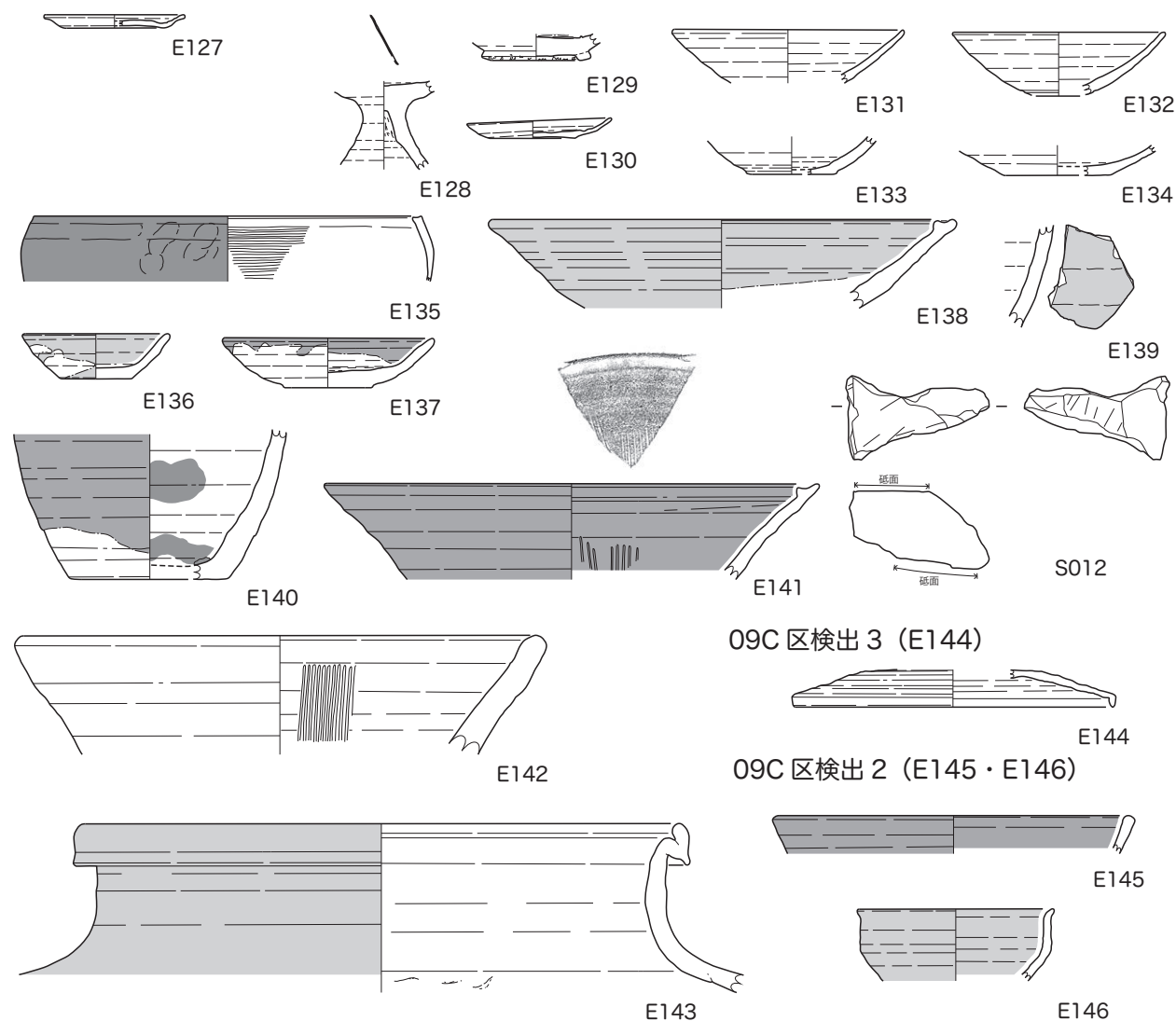
第3章 出土遺物



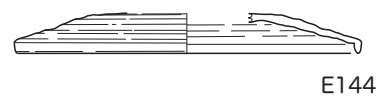
第 35 図 09B 区・09C 区出土遺物 (1:4)

09C 区 020SD (E127)

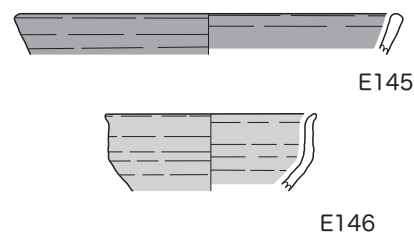
09C 区 021SD (E128 ~ E143・S012)



09C 区検出 3 (E144)



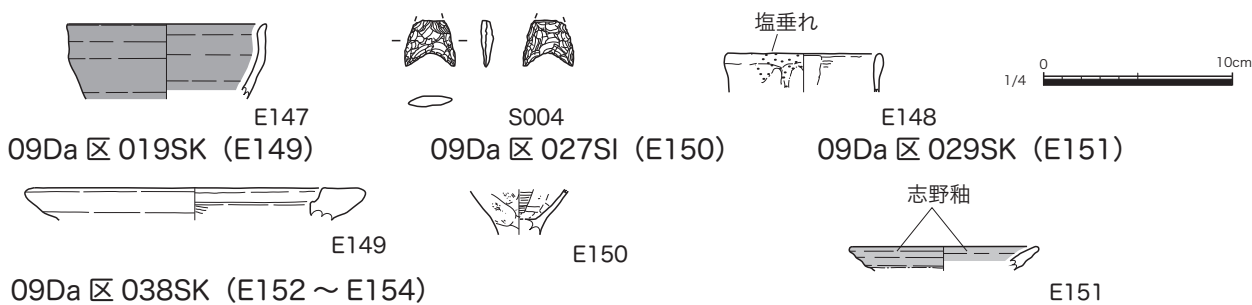
09C 区検出 2 (E145・E146)



09C 区地山検出 (E147)

09Da 区 001SD (S004)

09Da 区 018SK (E148)



09Da 区 019SK (E149)

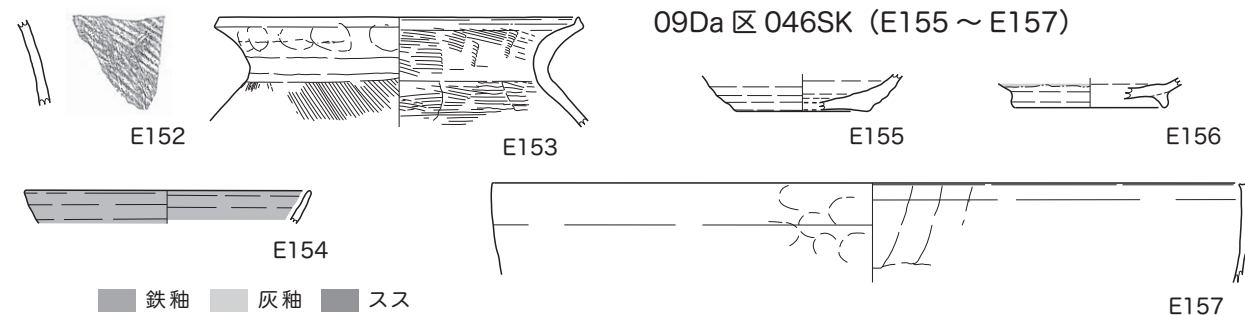
09Da 区 027SI (E150)

09Da 区 029SK (E151)



09Da 区 038SK (E152 ~ E154)

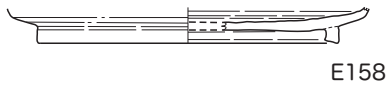
09Da 区 046SK (E155 ~ E157)



■ 鉄釉 ■ 灰釉 ■ スス

第 36 図 09C 区・09Da 区出土遺物 (1 : 4)

09Da 区 047SD (E158)



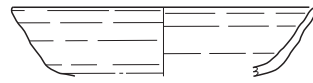
E158

09Da 区 051SK (E159)



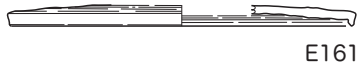
E159

09Da 区 063SK (E160)



E160

09Da 区 070SK (E161)



E161

09Da 区 081SK (E162)



E162

09Da 区 082SK (E163・E164)



E163



E164

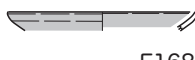
09Da 区 085SD (E165 ~ E168)



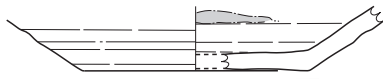
E165



E166



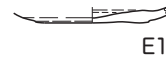
E168



E167



09Da 区 086SD (E169 ~ E171)



E169

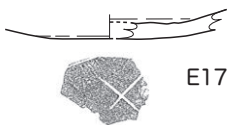


E170

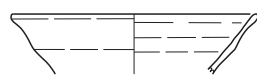


E171

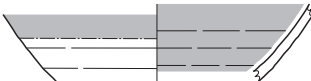
09Da 区 087SD (E172 ~ E174・M005)



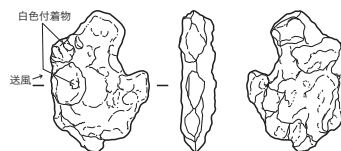
E172



E173



E174



白色付着物

迷風

M005

09Da 区 088SD (E175)



E175

09Da 区 089SD (E176 ~ E181)



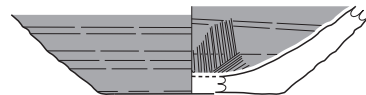
E176



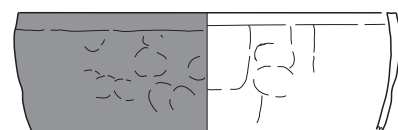
E177



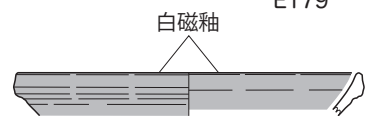
E178



E180

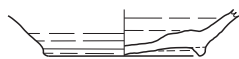


E179



E181

09Da 区 090SD (E182 ~ E189)



E182



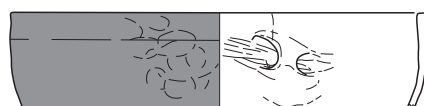
E183



E184



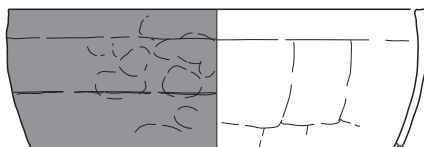
E185



E187



E188



E186



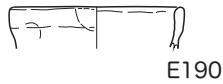
E189

鉄釉 灰釉 スス

1/4 0 10cm

第 37 図 09Da 区出土遺物 1 (1 : 4)

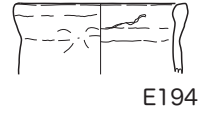
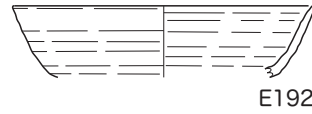
09Da 区 091SK (E190)



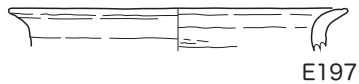
09Da 区 095SK (E191)



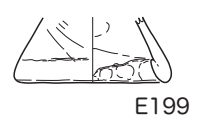
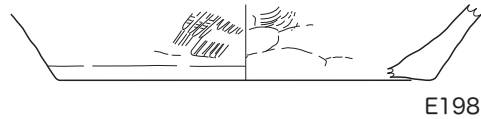
09Da 区 096SI (E192 ~ E194)



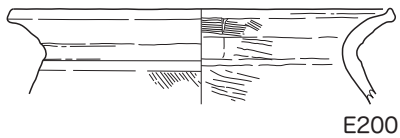
09Da 区 097SK (E195 ~ E197)



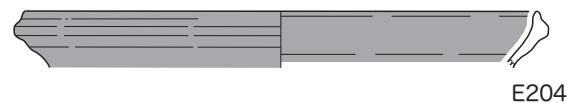
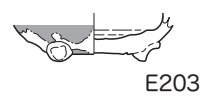
09Da 区 108SK (E198 · E199)



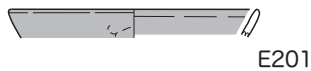
09Da 区 125SK (E200)



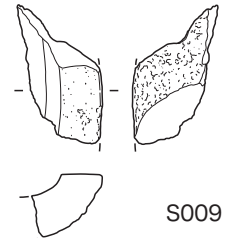
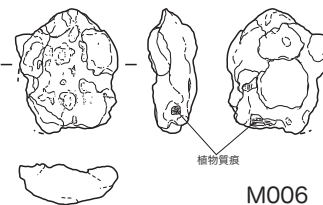
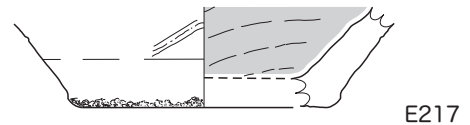
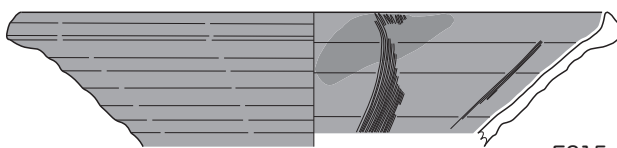
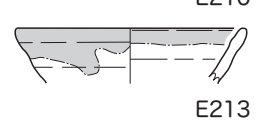
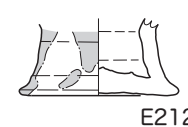
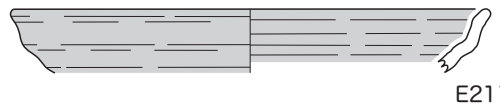
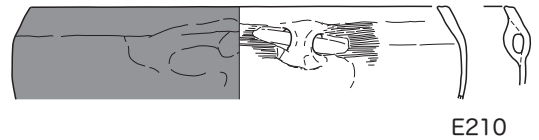
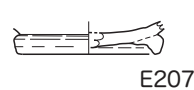
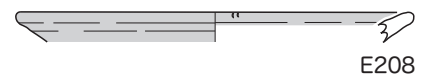
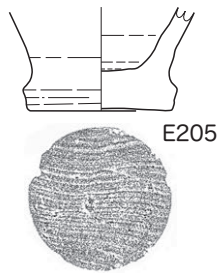
09Da 区 136SD (E202 ~ E204)



09Da 区 135SK (E201)



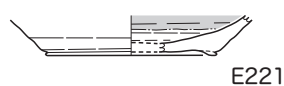
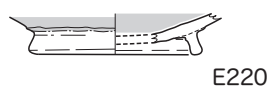
09Da 区 138SD (E205 ~ E217 · M006 · S009)



09Da 区 141SK (E218 · E219)



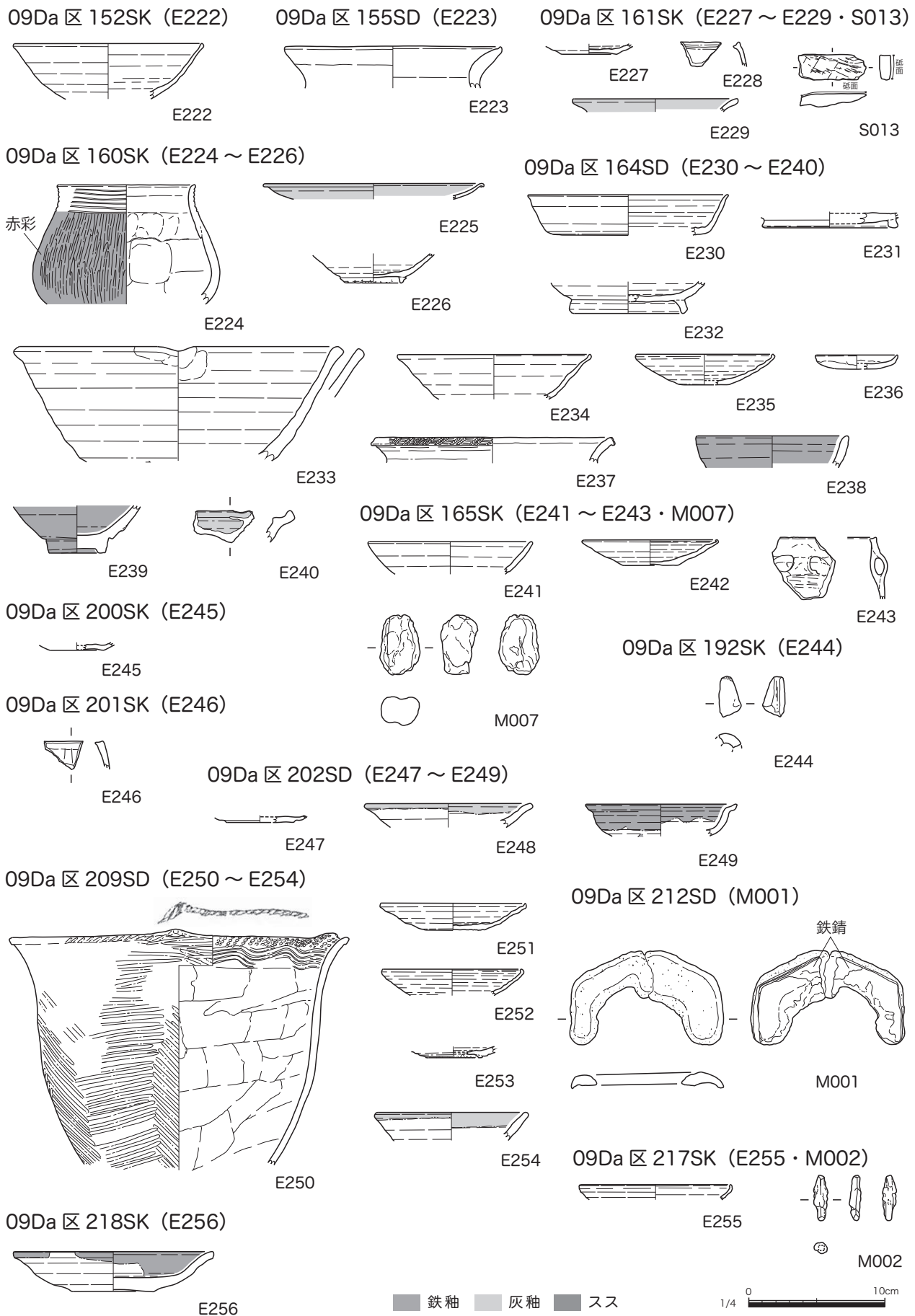
09Da 区 147SD (E220 · E221)



鉄釉 灰釉 スス

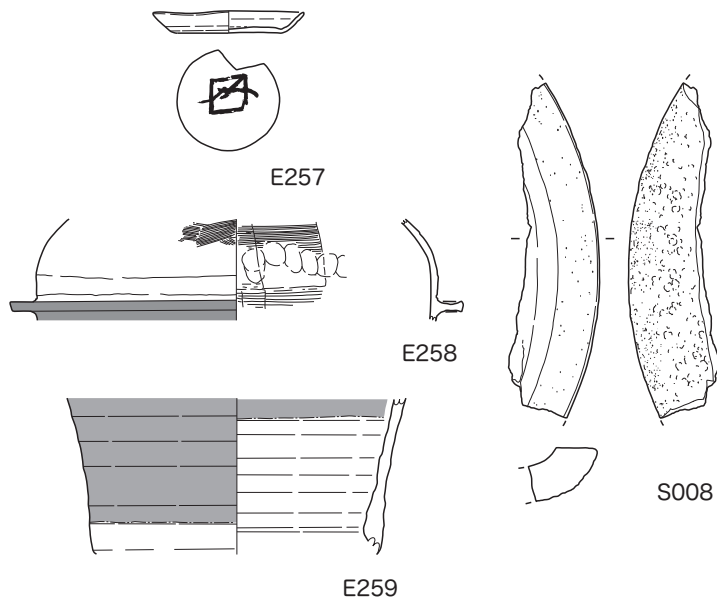
1/4 0 10cm

第 38 図 09Da 区出土遺物 2 (1 : 4)

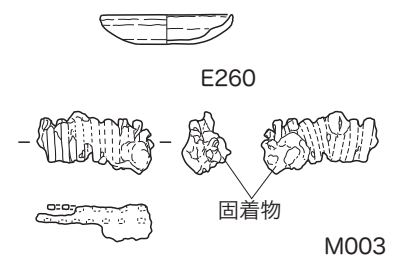


第 39 図 09Da 区出土遺物 3 (1 : 4)

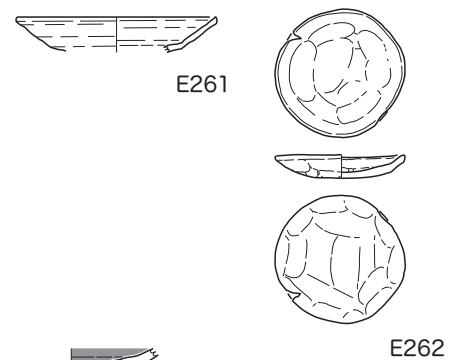
09Da 区 220SD (E257 ~ E259・S008)



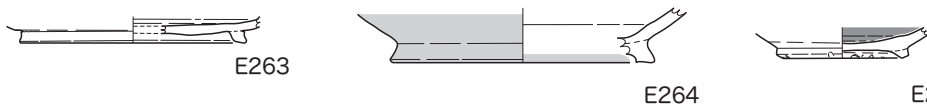
09Da 区 221SK (E260・M003)



09Da 区 234SD (E261・E262)



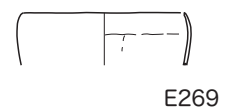
09Da 区 244SD (E263 ~ E265)



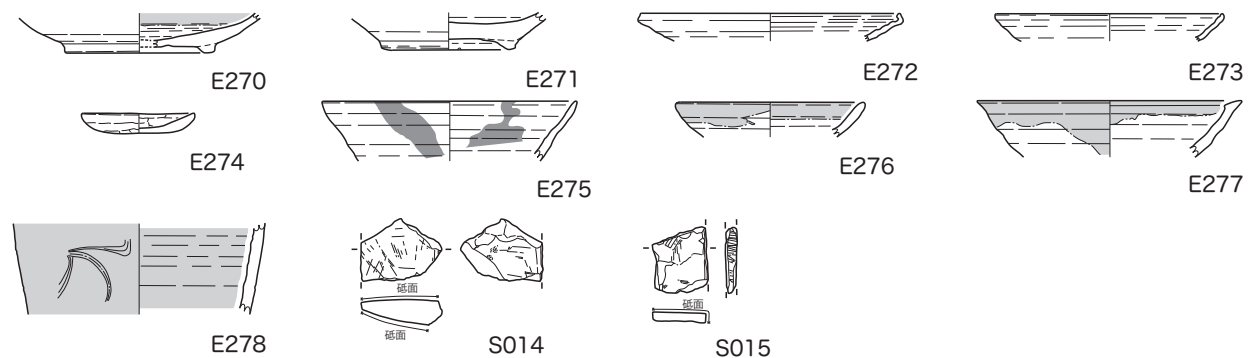
09Da 区 245SD (E266 ~ E268)



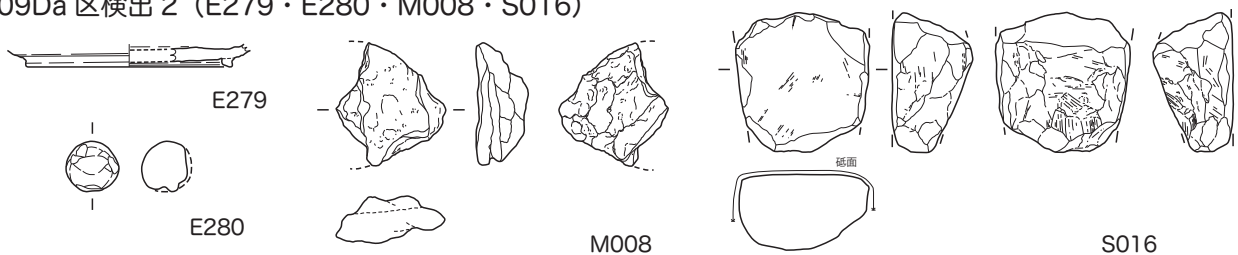
09Da 区 247SK (E269)



09Da 区検出 1 (E270 ~ E278・S014・S015)



09Da 区検出 2 (E279・E280・M008・S016)

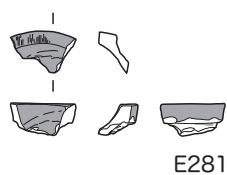


■ 鉄釉 ■ 灰釉 ■ スス

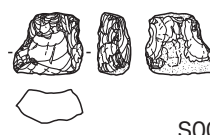
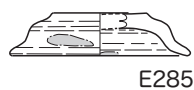
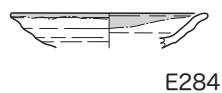
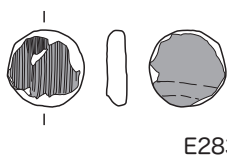
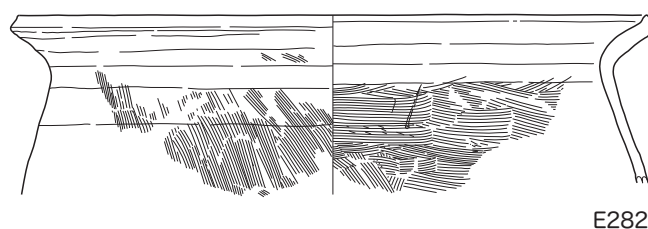
0 10cm
1/4

第 40 図 09Da 区出土遺物 4 (1 : 4)

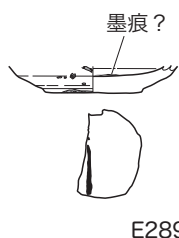
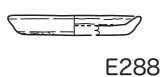
09Da 区西壁トレンチ (E281)



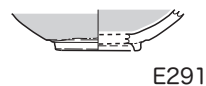
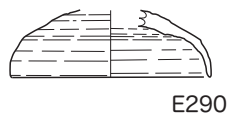
09Da 区重機掘削 (E282 ~ E285・S005)



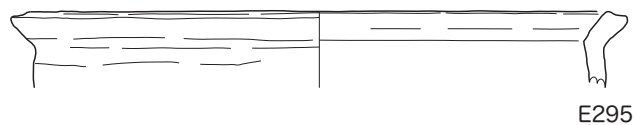
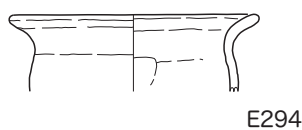
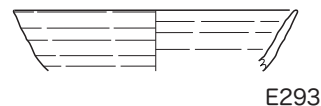
09Db 区 251SK (E286 ~ E289)



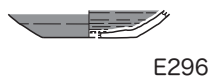
09Db 区 257SK (E290・E291)



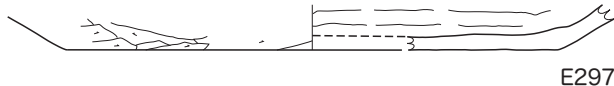
09Db 区 259SK (E292 ~ E295)



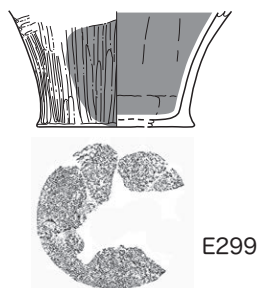
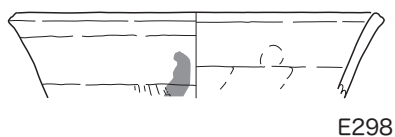
09Db 区 261SD (E296)



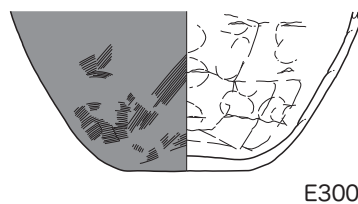
09Db 区 262SD (E297)



09Db 区 265SD (E298・E299)



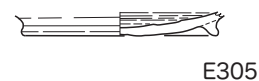
09Db 区 269SD (E300)



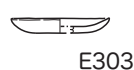
09Db 区 270SK (E301)



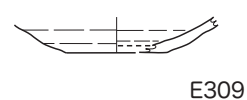
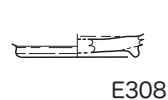
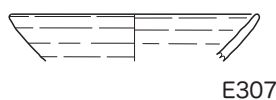
09Db 区 272SD (E305)



09Db 区 271SD (E302 ~ E304)



09Db 区 283SD (E307 ~ E313)



09Db 区 282SD (E306)

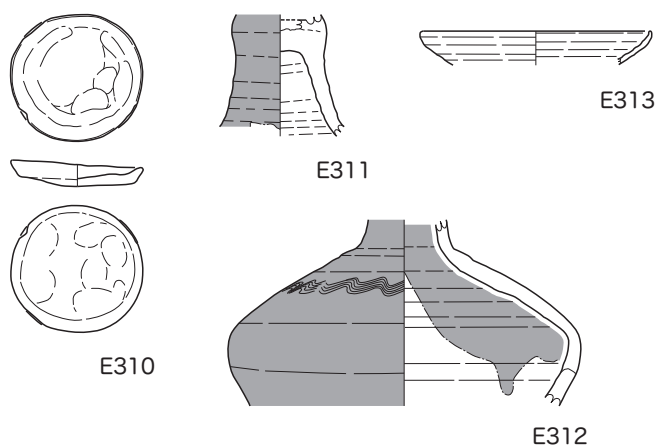


■ 鉄釉 ■ 灰釉 ■ スス

0 10cm
1/4

第 41 図 09Da 区・09Db 区出土遺物 (1 : 4)

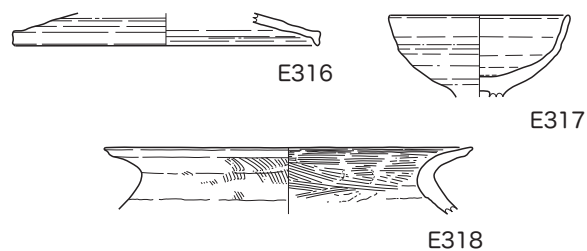
09Db 区 283SD (E307 ~ E313)



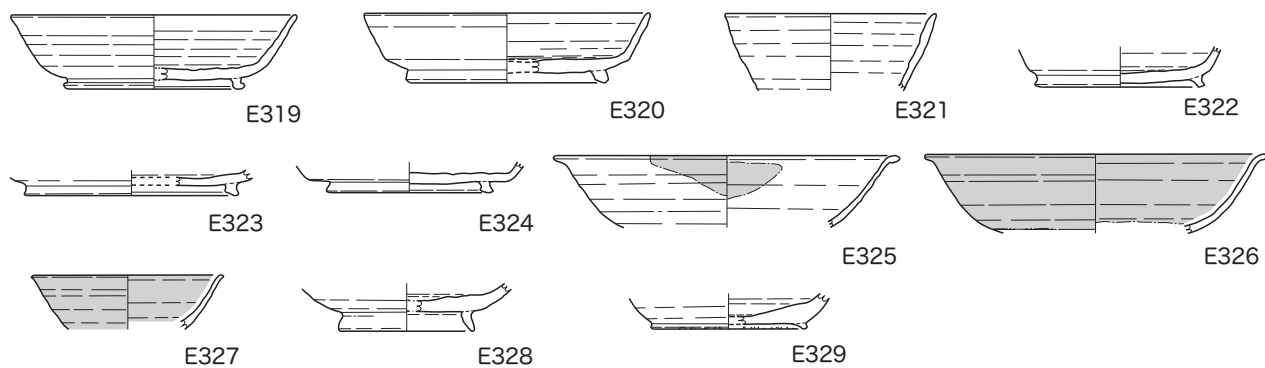
09Db 区 289SD (E314・E315)



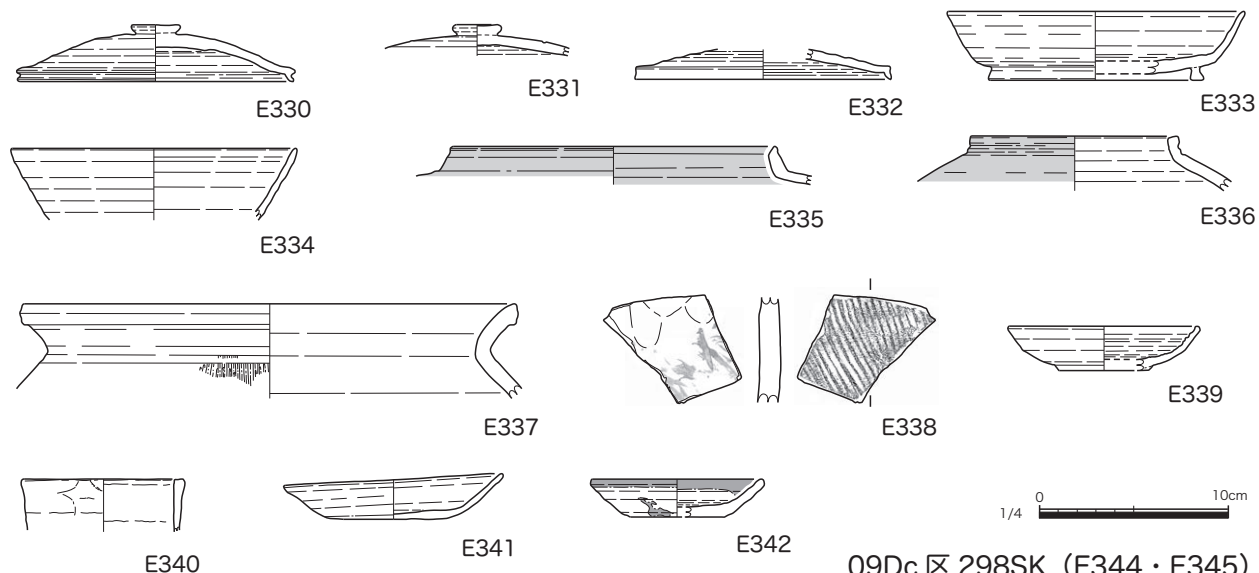
09Db 区検出 2 (E316 ~ E318)



09Dc 区 292SN (E319 ~ E329)

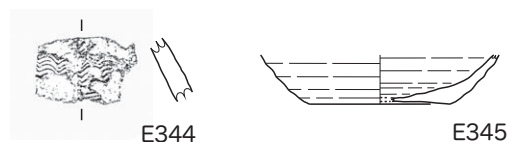


09Dc 区 293SN (E330 ~ E342)



1/4 0 10cm

09Dc 区 298SK (E344・E345)



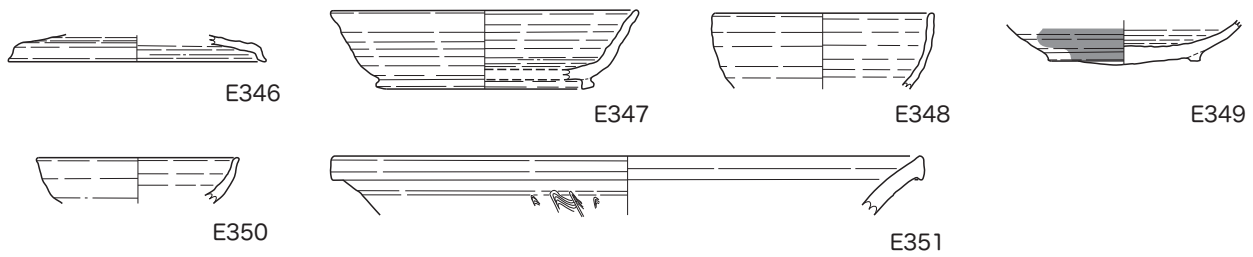
09Dc 区 294SN (E343)



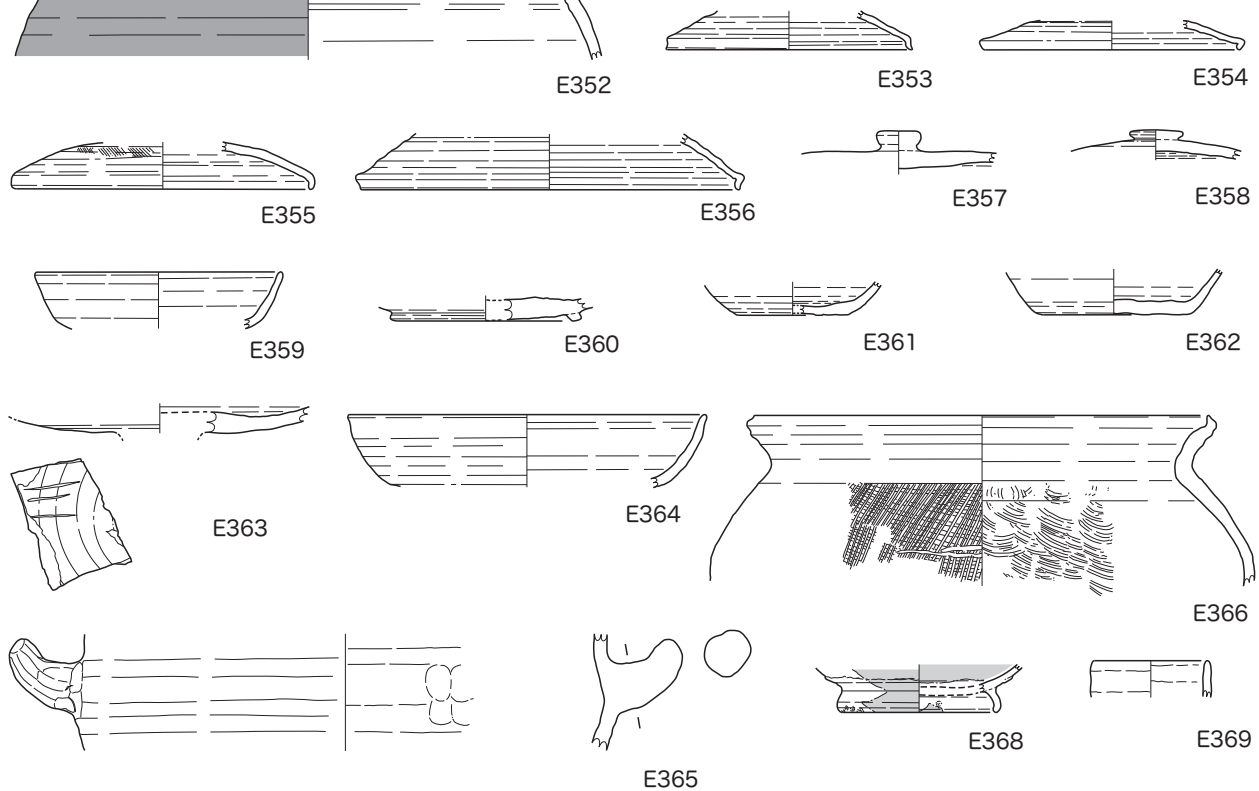
鉄釉 灰釉 スス

第 42 図 09Db 区・09Dc 区出土遺物 (1 : 4)

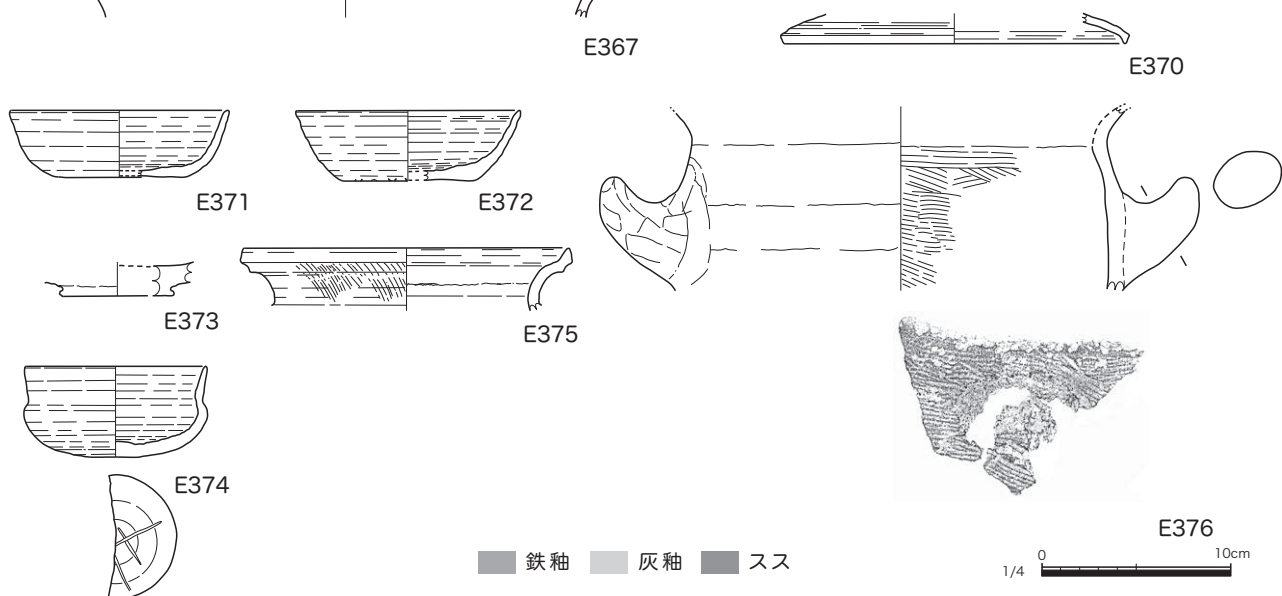
09Dc 区 303SD (E346 ~ E352)



09Dc 区 304SD (E353 ~ E369)



09Dc 区 305NR (E370 ~ E379)

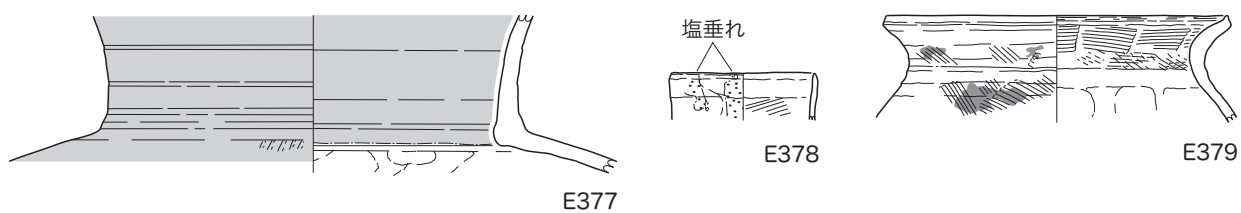


■ 鉄釉 ■ 灰釉 ■ スス

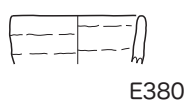
E376
1/4 0 10cm

第43図 09Dc 区出土遺物 (1:4)

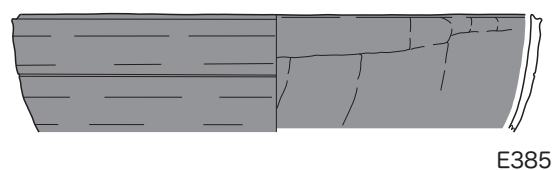
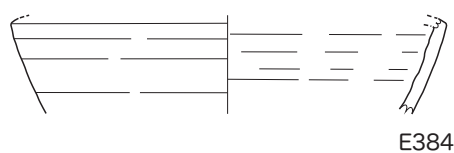
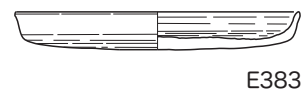
09Dc 区 305NR (E370 ~ E379)



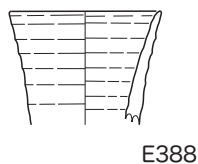
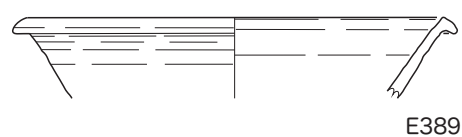
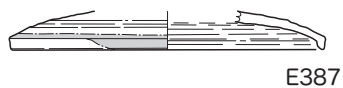
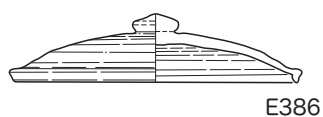
09Dc 区検出 1 (E380)



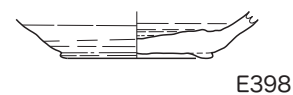
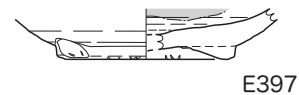
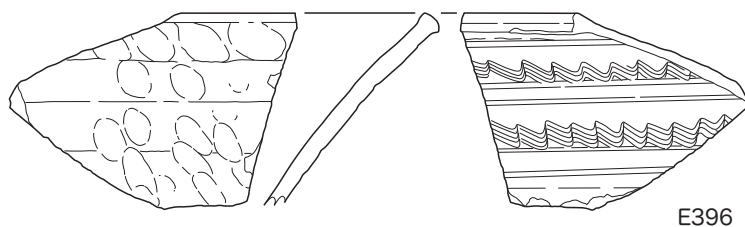
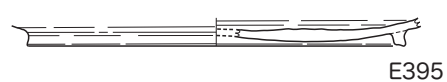
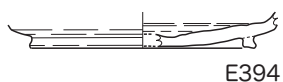
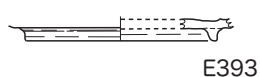
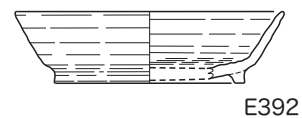
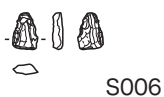
09Dc 区検出 2 (E381 ~ E385)



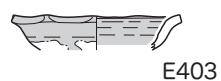
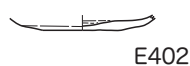
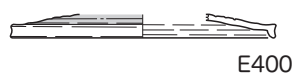
09Dc 区攪乱 (E386 ~ E390・S006)



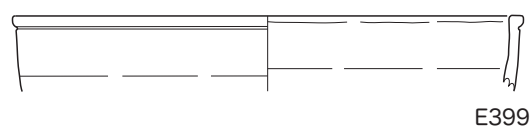
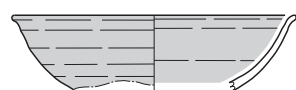
09Dc 区重機掘削 (E391 ~ E399)



09Ea 区 001SD (E400 ~ E403)



09Eb 区重機掘削 (E404)

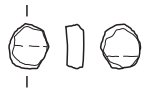


鉄釉 灰釉 スス

0 10cm
1/4

第 44 図 09Dc 区・09Ea 区・09Eb 区出土遺物 (1 : 4)

09Ed 区 018SN (E405)



E405

09Ed 区 025SD (S007)



S007

09Ed 区 027SD (E406)



E406

09Ed 区 034SK (E407)



E407



第 45 図 09Ed 区出土遺物 (1 : 4)

第4章 下新田遺跡の 試錐調査による地下層序

第1節 はじめに

濃尾平野北東部、岩倉市鈴井町の下新田遺跡において試錐調査を実施し、その層序解析、火山灰分析および放射性炭素年代測定から新たな知見が得られたので報告する。

第2節 試料および分析方法

試錐調査は2010年（平成22年）2月、株式会社東海環境エンジニアに依頼し、ロータリー式オイルフィールド型の試錐機を使用し、コアパックスリーブ内蔵型サンプラー（Φ86mm）により試料採取を行なった。調査深度は打込み式サンプラーが貫入不能（礫層に到達）となるまでとし、オールコアで実施した。

テフラ分析の試料は古澤（2003）の方法を基本に前処理を行なった。はじめにナイロン製#255メッシュシート（糸径43μm、オープニングワイド57μm）を用い、流水中で洗浄した。残渣を#125メッシュシート（糸径70μm、オープニングワイド133μm）を用い水中で篩い分けした。これにより極細粒砂サイズ（1/8～1/16）に粒度調整した試料を超音波洗浄器を用いて洗浄し、表面に付着した粘土分などを洗い流した。薄片作成は、鉱物観察用スライドガラスの上に硬化後屈折率が1.545程度となる光硬化樹脂をのせ、この樹脂に洗浄・篩い分けを行なった試料を攪拌・封入させ、カバーガラスで覆い粒子組成観察用薄片を作成した。樹脂の屈折率を1.545とする目的は石英や長石類の識別にある。前処理・プレパラート封入した粒子を偏光顕微鏡（100倍）を用いて観察し、テフラ純層の場合300粒子（1000粒子の平均値）を古澤（2003）の区別手法にしたがって区分した。また、テフラ固有で含有率の低い粒子の産出層準を特定するため3000粒子（10000粒子の平均値）の粒子組成分析も行なった。屈折率の測定には、浸液の温度を直接測定しつつ屈折率を測定する温度変化型測定装置"MAIOT"を使

用した。測定精度は火山ガラスで±0.0001、斜方輝石および角閃石で±0.0002程度である（古澤，1995）。火山ガラスの主成分分析についてSEMはHITACHI製SU1510を使用し、エネルギー分散型X線マイクロアナライザー（EDX）はHORIBA製EMAX ENERGY EX-270を用いた。分析は古澤地質株式会社に依頼した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。加速器質量分析法は125μmの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製1.5SDH）にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。¹⁴C年代値の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。¹⁴C年代の暦年代への較正にはOxCal4.1（較正曲線データ:INTCAL13）を使用した。なお、2σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して産出された放射性炭素年代誤差に相当する95.4%信頼限界の暦年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD）に依頼した。

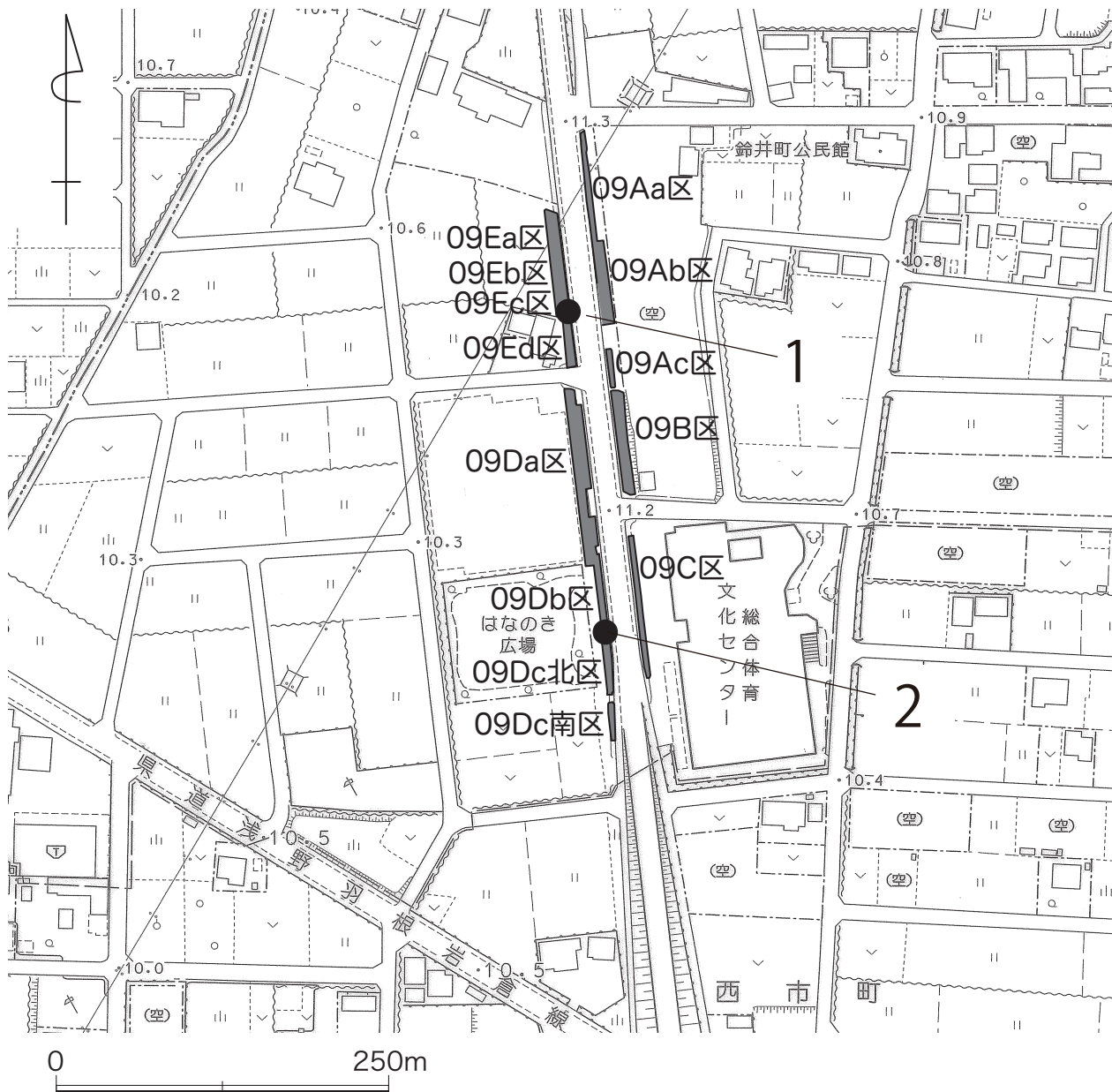
第3節 分析結果

試錐層序

県道63号名古屋江南線を挟んで東と西に設定された調査区のうち、西側の南北方向に並ぶ調査区において09Ec区と09Ed区との境界で地表面が残っている部分で1地点（地点1）、南の09Db区と09Dc区との境界で地表が残っている1地点（地点2）の計2地点で試錐調査を実施した（第46図）。各地点の層序の特徴をまとめて以下に述べる。

地点1では深度3.35mの試料を得た（第47図）。下位層より順に、標高7.75～9.20mにはよい黄橙色（新版標準土色帖によるカラーチャートで10YR6/3；以下

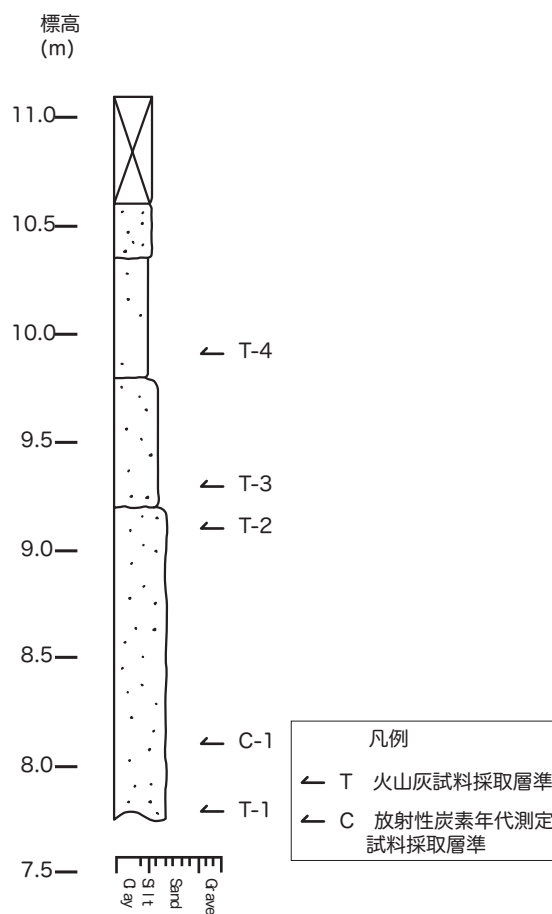
第4章 下新田遺跡の試錐調査による地下層序



第46図 下新田遺跡におけるボーリング掘削地点

ではカラーチャート記号のみを記す)を呈する細粒砂層である。淘汰は良好である。全体に塊状で、堆積構造はみられない。基質にはシルトや粘土といった細粒堆積物を含まない。標高 7.75m より下位に礫層があることを確認し掘削を終了した。本層の最下部(標高 7.80m)で火山灰分析用の試料(T-1)を、下部(標高 8.10m)で放射性炭素年代測定用の試料(C-1)を、上部(標高 9.10m)で火山灰分析用の試料(T-2)を採取した。標高 9.20～9.80m はにぶい黄橙色(10YR6/4)の極細粒砂層である。淘汰は良好であり、全体に塊状である。堆積構造はみられず、基質にシルトや粘土と

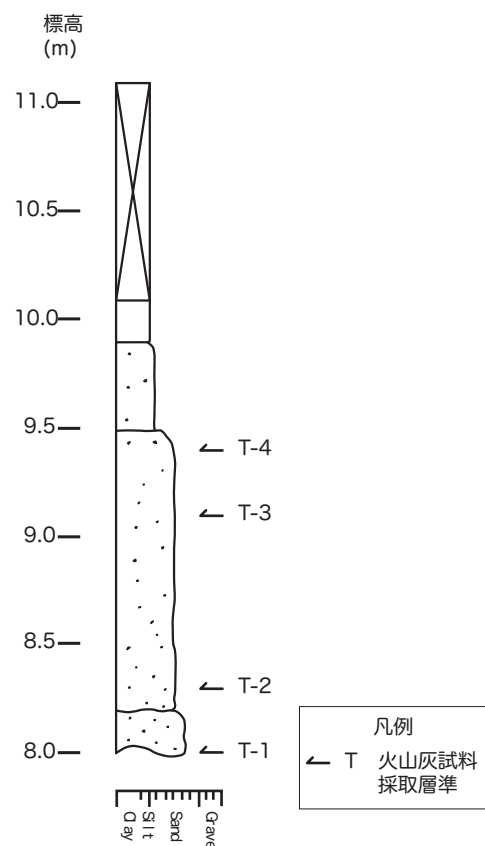
いった細粒堆積物を含まない。下位層との層理面は不明瞭である。本層の下部(標高 9.30m)で火山灰分析用の試料(T-3)を採取した。標高 9.80～10.35m はにぶい黄橙色(2.5Y6/3)の砂質シルト層である。淘汰は良好であり、全体に塊状かつ均質である。堆積構造はみられず、基質にシルトや粘土といった細粒堆積物を含まない。下位層との層理面は不明瞭である。本層の下部(標高 9.90m)で火山灰分析用の試料(T-4)を採取した。標高 10.35～10.60m は灰黄色(2.5Y6/2)のシルト質砂層である。淘汰は良好である。堆積構造はみられず、全体に塊状を呈する。下位層との層理面



第 47 図 下新田遺跡、ボーリング地点 1
における地質柱状図

は不明瞭である。標高 10.60～11.10m はにぶい黄橙色 (10YR6/3) の礫混じりシルト質砂層であるが、本層は人工的な盛土となる。下位層との層理面は不明瞭である。本層の頂部 (標高 11.10m) が現代の地表面である。

地点 2 では深度 3.10m の試料を得た (第 48 図)。下位層より順に、標高 7.99～8.19m は淡黄色 (2.5Y8/3) の粗粒砂層である。淘汰は良好であり、全体に塊状で堆積構造はみられない。基質にシルトや粘土といった細粒堆積物を含まない。標高 7.99m より下位に礫層があることを確認し掘削を終了した。本層の最下部 (標高 7.99m) で火山灰分析用の試料 (T-1) を採取した。標高 8.19～9.49m は淡黄色 (2.5Y8/3) の中粒砂層である。淘汰は良好である。全体に塊状で、堆積構造はみられない。下位層との層理面は明瞭である。本層の下部 (標高 8.29m) で火山灰分析用の試料 (T-2) を、上部の標高 9.09m と標高 9.39m の 2 つの層準でもそ



第 48 図 下新田遺跡、ボーリング地点 2
における地質柱状図

れぞれ火山灰分析用の試料 (T-3 と T-4) を採取した。標高 9.49～9.89m は灰黄色 (2.5Y6/2) の砂質シルト層である。全体に塊状かつ均質で、堆積構造がみられない。下位層との層理面は明瞭である。標高 9.89～10.09m は暗灰黄色 (2.5Y5/2) のシルト層である。全体に塊状・均質で、堆積構造はみられない。下位層との層理面は不明瞭である。標高 10.09～11.09m は人口的な盛土である。本層の頂部 (標高 11.09m) が現代の地表面である。

火山灰分析

地点 1 で 4 点、地点 2 で 4 点の計 8 点を採取し分析に供した。地点 1 の上位層である標高 9.80～10.35m でみられる砂質シルト層の下部 (標高 9.90m) より採取した試料 (T-4) からはバブルウォールタイプ (Bw) やパミスタイプ (Pm)、低発砲タイプ (O) の火山ガラスが微量 (それぞれ共に 0.2/3000) 含まれる。火山ガラスの主成分は鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) および伊豆カワゴ平火山灰 (Kg) の特徴と一致する。また、下位層である標高 7.75～9.20m の細粒砂層の下部 (標

高7.80m)にて採取した試料(T-1)にはバブルウォールタイプ(Bw)は認められなかったものの、パミスタイプ(Pm)～低発泡タイプ(O)の火山ガラスが微量(0.2/3000)含まれる。主成分は K_2O の含有率が高い特徴を示すが、この地域ではこのような特徴の火山ガラスを含む広域テフラは識別されない。地点2の試料では、試料全体(T-1～T-4)にバブルウォールタイプ(Bw)～パミスタイプ(Pm)の火山ガラスが微量(0.1～0.3/3000)含まれる。火山ガラスの主成分は広域テフラと対比できる特徴を示していないものの、琵琶湖高島沖ボーリングコアのBT7 - BT9と類似した特徴(長橋ほか, 2004)を示し、標高8.19～9.49mの中粒砂層の上部(標高9.09m)で採取した試料(T-3)において認められることからBT7 - BT9火山灰の降灰期に堆積した可能性がある。

放射性炭素年代測定

地点1の標高7.75～9.20mでみられる細粒砂層の下部(標高8.10m)において採取した試料(C-1)の放射性炭素年代測定を行なった。AAA処理を行った結果、試料はほぼ鉱物であり炭化物はみられなかった。従ってグラフアイトが生成できず、年代測定を行なうことができなかった。

第4節 考察

下新田遺跡調査地点における地下層序と堆積年代

下新田遺跡では南北方向に並ぶ2地点において深度3mほどの試錐調査を実施し、地下の堆積物の状況を捉えた。南北方向に約240m隔たった地点1および地点2では、ともに下位層には層厚1.5mほどの砂層が卓越し、砂層の上をより細粒な砂質シルト層やシルト層が覆い、全体に上方細粒化傾向を示した。また、下位層でみられる砂層は基質にシルトや粘度といった細粒な堆積粒子を含まず、淘汰良好な砂層であった。残念ながら試錐コアで観察される砂層は全体に塊状で堆積構造を確認することができず、詳しい水理情報を得ることができなかったが、上述の砂層の特徴から、水理学的な高エネルギー環境で堆積したことがわかり、調査地点にはかつて活動的な河川流路が存在したことがわかる。また、この砂層の上をシルトに富む細粒な

堆積粒子が覆うようになる。堆積粒子の粒子径の減少はその粒子を運ぶための流体のもつ水理エネルギーが衰えたことを示す。地点1と地点2の上位層にみられる砂質シルト層ないしシルト層が覆う事実は、調査地点にあった活動的流路の中心が次第に側方へ移動してしまい、調査地点が河川流路の縁辺へと移り変わっていったことを示すものである。また、今回の試錐調査ではサンプラーが貫入不能となる礫層の確認をもって掘り止めとした。よって、地点1・地点2とも、試錐柱状図の下位層である砂層の下底はさらにその下にある礫層との地層境界となる。従って、調査区北側の地点1では細粒砂層の下底、標高7.75mが礫層と砂層との地層境界であり、南側の地点2では粗粒砂層の下底、標高7.99mが地層境界となる。

下新田遺跡で実施した試錐調査では下位層から上位層にかけて砂層からシルト層への上方細粒化が認められた。これらの堆積物の堆積年代について、放射性炭素年代測定では残念ながら測定を行なえる試料が得られなかった。いっぽう、火山灰分析では、北側の地点1の上位層である標高9.80～10.35mでみられる砂質シルト層の下部(標高9.90m)より採取した試料(T-4)からはバブルウォールタイプ(Bw)やパミスタイプ(Pm)、低発泡タイプ(O)の火山ガラスが微量(それぞれ共に0.2/3000)含まれる。火山ガラスの主成分は鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)および伊豆カワゴ平火山灰(Kg)の特徴と一致した。鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)が約7300年前(町田・新井, 2003)、伊豆カワゴ平火山灰(あるいは天城カワゴ平火山灰)(Kg)が約3100年前(町田・新井, 2003)と見積もられている。したがって、地点1の標高9.80～10.35mでみられる砂質シルト層は少なくとも伊豆カワゴ平火山灰(Kg)の噴出時期以降の、約3100年前代よりも後に堆積した地層であることがわかった。いっぽう、地点1よりも南にある地点2では、標高8.19～9.49mの中粒砂層の上部(標高9.09m)から採取した試料(T-3)において琵琶湖高島沖ボーリングコアのBT7 - BT9と類似した特徴(長橋ほか, 2004)をもつ火山ガラスが検出された。3000粒子中に確認される火山ガラスの粒子数が少ないため試料採取層準付近が降灰層準であるとは確実に言えないものの、これがBT7 - BT9であった場合、

本火山灰の降灰は鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) のわずかに上位にあると言われているため (長橋ほか, 2004)、地点 2 の標高 8.19 ~ 9.49m の中粒砂層上部は鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) の噴出年代である約 7300 年前以降に堆積したものと推定される。下新田遺跡の調査地点および周辺地域は木曽川扇状地扇端部にあたり礫や砂などの粗粒な堆積物が卓越し、数値年代を得るのに適した有機物試料をあまり含まない場所でもある。本地域の粗粒堆積物である砂層中から堆積年代を推定できる結果が得られた意義は大きい。

謝辞

本論を作成するにあたり、試錐調査では株式会社東海環境エンジニアに、火山灰分析では古澤地質株式会社の古澤 明氏に、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの伊藤 茂氏・安昭炫氏・佐藤正教氏・廣田正史氏・山形秀樹氏・小林紘一氏・Zaur Lomatatidze 氏・Ineza Jorjoliani 氏・小林克也氏にお世話になった。試料の整理・保管と図面作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析, 地質学雑誌, 101, 123-133.
古澤 明, 2003, 洞爺火山灰降下以降の岩手火山のテフラの識別, 地質雑, 109, 1-19.
町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス [日本列島とその周辺], 東京大学出版会, 336p.
宮崎一博・西岡芳晴・中島 礼・尾崎正紀, 2008, 第 2 章 地質概説, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅) 御油地域の地質, 地質調査総合センター, 6-9.
松沢勲・嘉藤良次郎, 1954, 名古屋及び付近の地質・同地質図, 愛知県建築部.
中村千怜・安江建一・石丸恒存・梅田浩司・古澤 明, 2011, 緑色普通角閃石中のガラス包有物の主成分化学組成を用いた広域テフラの対比 - 阪手テフラを例として -, 地質雑, 117, 495-507.

第5章 総括

第1節 遺構の変遷

前章までに報告した遺構と出土遺物から、下新田遺跡の遺構は大きく4時期の変遷が想定された。以下、時期毎に述べていきたい。

(1) 古代の遺構 (第49図)

7世紀後半を含む奈良時代から平安時代前半(10世紀後半まで)の遺構で、竪穴建物22棟と土坑5基、溝1条がある。

竪穴建物の分布は、09Ab区に078SI・078SI・080SI～082SI・090SI・103SI・108SIの8棟、09Da区に018SI・022SD(建物の周溝部分)・025SI・026SI・027SI・038SI・065SI・096SI・101SI・107SI・111SI・118SIの12棟、09Ec区に012SIの1棟、09Ed区に035SIの1棟がある。土坑の分布は、09As区の南端部に022SK・023SK・029SKの3基、09Da区北側に082SK、09Eb区の011SKがあり、竪穴建物の周囲にみられ、これらは古代の居住域になるものと思われる。限られた範囲における調査ではあるが、古代の居住域は09Aa区から09Da区北側へ北東から南西にのびる範囲にあり、おおよそ南北幅50m～60m程で広がるものと思われる。また中世以後の遺構や攪乱などにより、竪穴建物が残存していない可能性もあるが、竪穴建物が分布する範囲の中で、09Ab区から09Ec区にかけての地点と09Da区北側の地点の2ヶ所で、竪穴建物が集中している。溝は09Aa区の北端に040SDがあり、居住域の縁辺にみられる。

竪穴建物は、全体が不明なものが多いが、短辺2m～3m、長辺3m～5m程の小型のものが多く、短辺と長辺が5m程のやや規模の大きいものが少数みられた。

(2) 中世の遺構 (第50図)

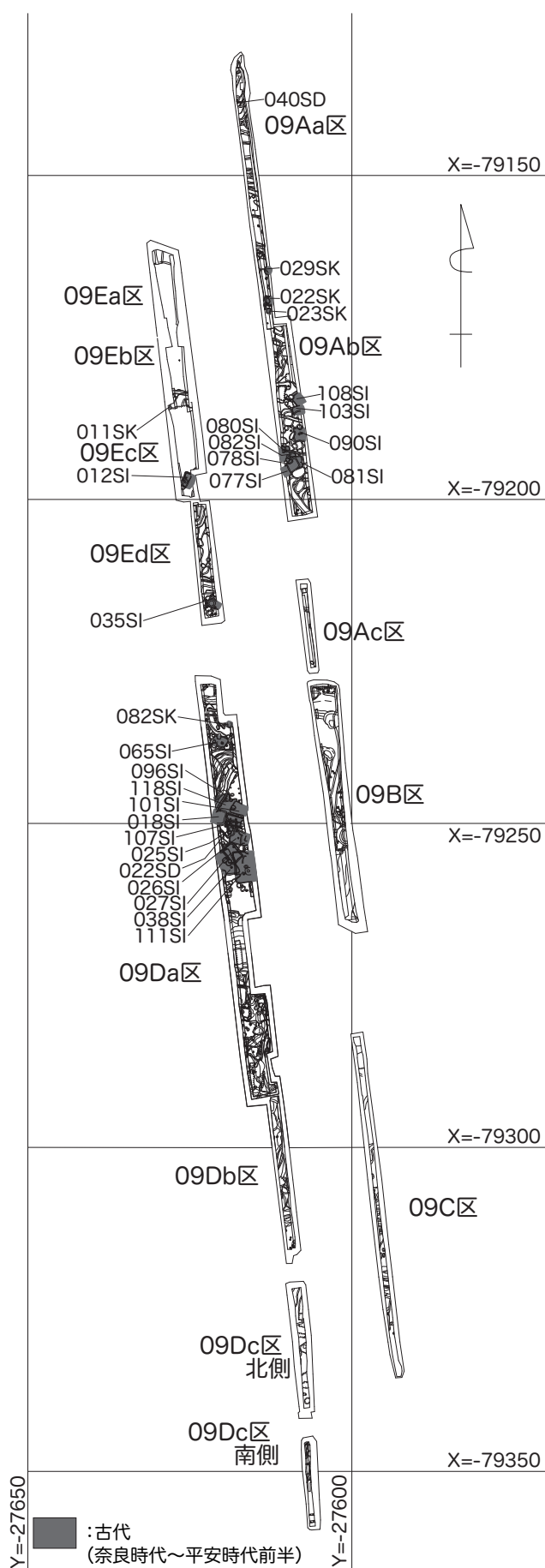
平安時代末の12世紀後半から室町時代の15世紀前半までの遺構で、溝32条、掘立柱建物の可能性のある柱列2列、土坑9基がある。この時期の遺構の抽出は、15世紀前半までの中世の遺物が出土し、戦国時代の遺構より古い遺構を抽出したもので、続く戦国時代とし

た15世紀後半から16世紀にかけての遺構も含まれる可能性が高い。

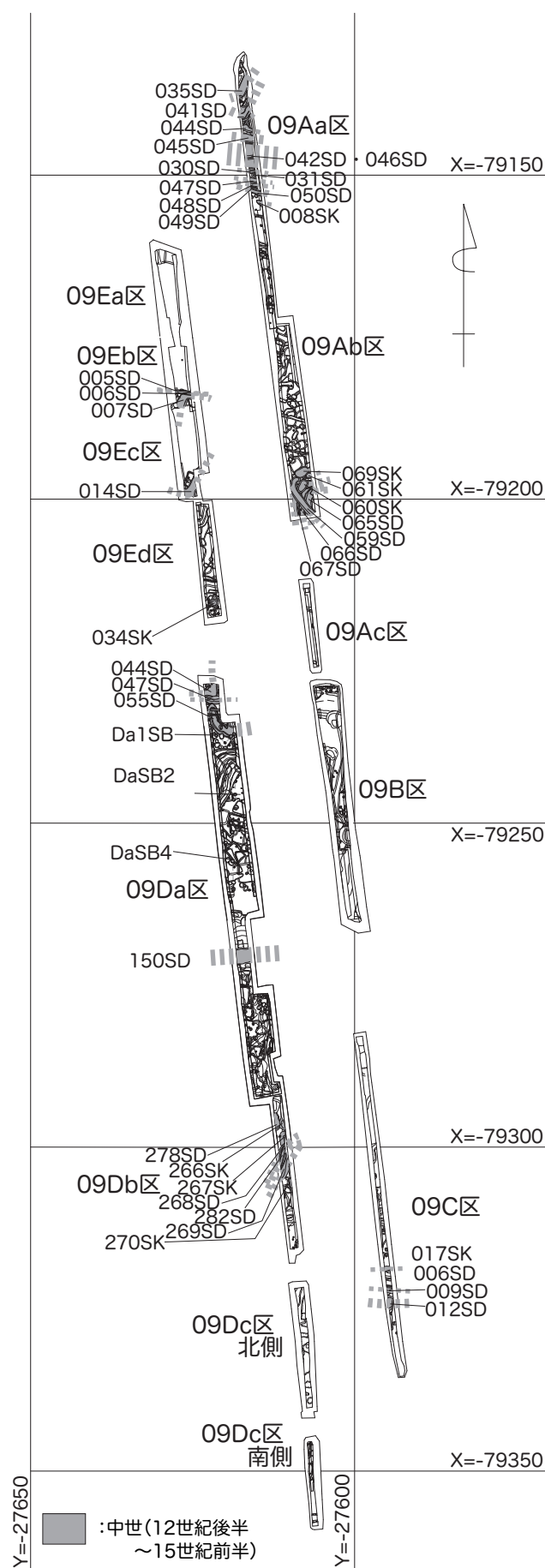
中世の遺構は、古代の遺構よりも広い範囲で確認でき、09Aa区北側や09Da区南側から09Db区にかけて遺構が広がるようになる。

この中で、溝は09Aa区北側にある030SD・031SD・035SD・041SD・042SD・044SD～050SD、09Ab区南端部にある059SD・065SD～067SD、09C区南側にある006SD・009SD・012SD、09Ec区南端部にある014SD、09Da区の北端部にある044SD・047SD・055SD、09Da区中央にある150SD、09Db区にある268SD・269SD・278SD・282SDがあり、比較的重複した位置で確認され、連続して溝が掘削された様子が考えられた。溝の軸線は、南北方向の溝では09Aa区北端部にある035SD・041SD・044SDがN-25°-E～N30°-Eで、他の調査区の溝はN-15°-E前後にあり、東西方向の溝は09Ab区059SDがN-50°-Wであるが、その他の溝はN-75°-W～N-80°-EのN-90°-EW前後の軸線をもつ。調査区の範囲が限られていることもあって、溝の対応関係や南北方向の溝と東西方向の溝が90°丁度の交差をしないけれども、09Ab区059SDを除いておおよそ溝の軸線は同じ方向にあるものと考えられる。また溝の規模や形態については、やや幅広の溝もあるが、遺構検出面からでは幅が1.0m～2.0m前後、深さが0.5m前後の比較的小規模な溝が多く、溝の規模からみる性格の違いはあまり考えられない。ただ、09Da区中央部にある150SDは幅2.5m程あってやや規模が大きく、続く戦国時代の溝とした136SD・138SDが近接して同じ軸線をもって存在するので、戦国時代に続くやや大きな区画を囲む溝である可能性がある。

居住域と関係する遺構としては、09Da区北側で確認したDaSB1・DaSB2・DaSB4などの掘立柱建物と柱列があり、土坑では09Eb区南端部にある034SKは中世前半期の土坑として認識できる。他の土坑は溝と重複しない位置で確認されており、溝の端部を検出している可能性がある。



第49図 古代の遺構 (1:1,000)



第50図 中世の遺構 (1:1,000)

(3) 戦国時代の遺構 (第51図)

15世紀後半から16世紀前半までの遺構で、溝32条、井戸1基、土坑13基があり、09Dc区南側を除いた全ての調査区で確認できる。下新田遺跡の最も遺構が展開する時期である。この時期の遺構は、15世紀後半～16世紀前半までの古瀬戸陶器・大窯陶器・北部形陶器、土師器鍋などの遺物が出土したものと遺構の重複関係から抽出したものである。

この中で溝は、09Aa区北端部の052SD、09Aa区南側にある010SD・013SD・019SD、09Ab区中央部にある101SD・072SD、09Ac区にある140SD、09B区にある004SD・006SD(047SK)・010SD・025SD(037SK)・046SD、09C区北側にある019SD～021SDと同区南側にある010SD、09Da区北側にある086SD・087SD・089SD・090SD、同区中央部にある136SD・138SD・147SD、同区南側にある151SD・164SD・209SD・212SD・220SD(09Db区264SKを含む)・222SD・234SD・265SD、09Db区南側にある271SD・272SD・283SD・288SD・289SD、09Dc区北側にある303SD・304SDがみられる。09Da区北側の091SKも溝の端部の可能性が高い。自然流路として09Dc区北側の305NRが北東から南西に流れている。

溝の軸線は、東西方向にある溝はN-75°-W～N-85°-Eの中にあり、N-90°-EW前後の方向に流れている。東西方向の溝で興味深いのは、09Aa区南側にある010SDと013SDが、溝の中心間が約4.0m、09Ab区中央部にある101SDと072SDが、溝の中心間が約5.0mで、N-75°-W～N-80°-Wでほぼ並行してはしることである。これらの溝は、幅が0.50m～1.0m程でやや細く、09Ab区101SDは中世の溝とした09Eb区南端部にある005SD・006SDに続く可能性があるので、2本の並行する溝に囲まれた内側は、東西方向にのびる道になる可能性がある。南北方向の溝はN-15°-W～N-25°-Eの中にあり、N-15°-E前後の軸線をもつ溝が多い。ただし、南側の調査区にある09Db区の288SDがN-15°-W、09C区の010SDがN-5°-Eでやや西に振る軸線もつものがあり、北側の調査区にある09Aa区の052SDはN-25°-Eと東にやや大きく振る傾向がみられる。

溝の規模や形態については、遺構検出面から幅が

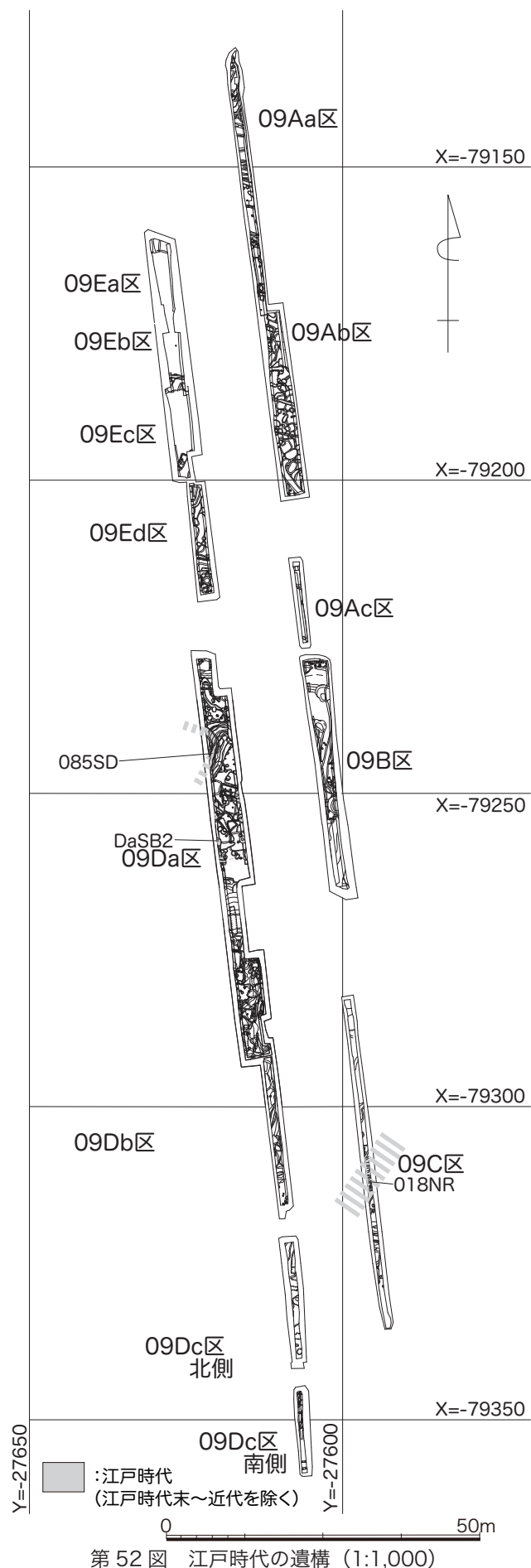
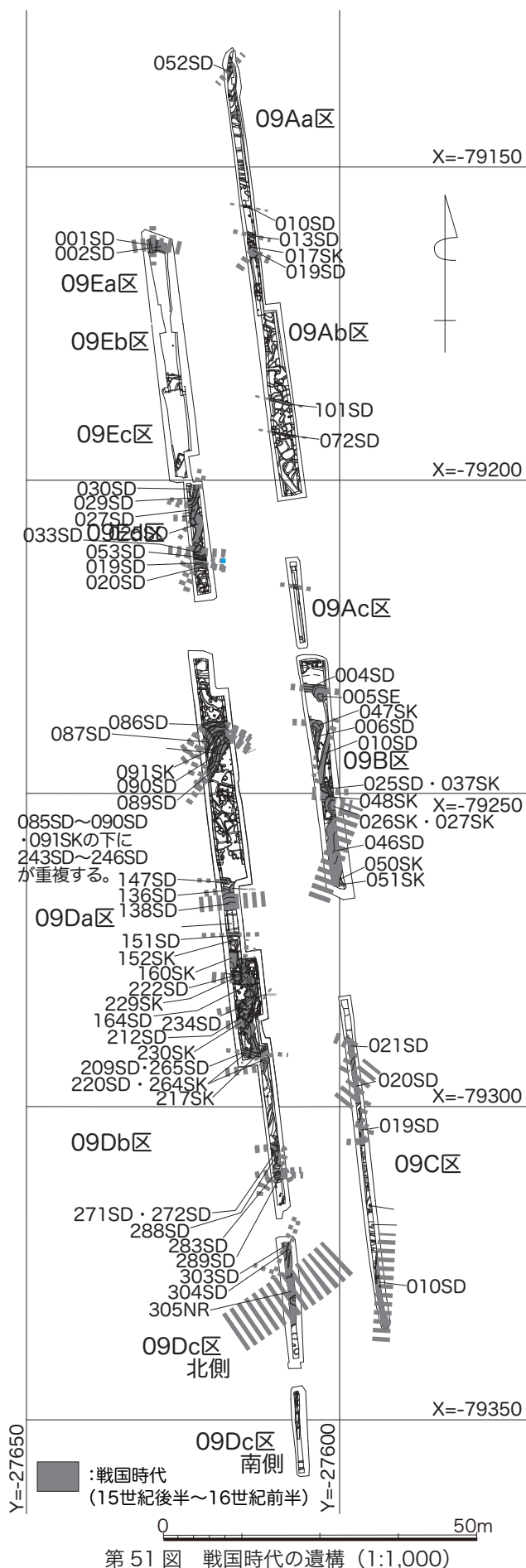
1.0m～2.0m前後、深さが0.5m前後の比較的小規模な溝が多いが、09B区南側にある046SDは幅が4.0mを越え、深さ1.0mをはかる規模の大きいもので、やや大きい区画を囲む溝や用水路のような性格が考えられる。また09Da区中央部にある138SDと09Da区南端部にある220SD(09Db区264SKを含む)から石製茶臼の下臼が出土しており、これらは同一製品の可能性があることから、同時期に存在し、南北を区切る区画(南北幅約25m)が存在した可能性が高い。また15世紀後半のこの区画の中で、石製茶臼を使用する喫茶などの営みが存在した可能性が高く、寺院などの施設が存在した可能性がある。

続いて居住域と関係する遺構としては、中世の遺構とした09Da区北側にあるDaSB1・DaSB2・DaSB4などの掘立柱建物と柱列がこの時期の遺構となる可能性がある。他に09B区005SEが素掘りの井戸となる可能性が高く、09Ac区から09B区にかけて居住域であった時期が存在するようである。また土坑では、溝がめぐる地点の付近にあるものとして、09Aa区017SK、09B区047SK・037SK・048SK・026SK・027SK・050SK・051SK、09Da区北側にある091SK、09Da区南側にある152SK・160SK・229SK・230SK・217SKがある。09Da区北側にある091SKは南にある同区089SDと対になる溝の一端の可能性が高く、09B区にある037SK・048SK・026SK・027SKも溝の端部にあたる可能性があるものである。したがって、居住域の遺構として考えられる土坑は、09B区の北側にある047SKと同区南端部にある050SK・051SK、09Da区の南側にある152SK・160SK・229SK・230SK・217SKなどがあげられる。

(4) 江戸時代の遺構 (第52図)

江戸時代の遺物が出土し、主面にて検出し調査したもので、溝1条、掘立柱建物1棟、自然流路1条がある。他にも江戸時代末～近代にかけての上面の遺構もあるが、時代が特定できないのでここに入れていない。遺構の分布は09Da区の北側と09C区に確認できたのみで、戦国時代に比べると範囲が狭く、遺構が少なくなる。

09Da区北側にあるものとして、江戸時代前期の掘立柱建物と考えられるDaSB2と建物の北側にある085SDがある。DaSB2は桁行き3間、梁間1間以上



の建物で、建物が東西にのびる可能性がある。建物の柱列の軸線は N-5°-W 前後である。また 085SD は戦国時代にあった溝と同じく N-20°-E 前後の軸線をもつもので、区画のあり方が戦国時代から続くものである。

09C 区にある 018NR は、江戸時代後期の自然流路で、09Da 区の遺構とは、同一存在するものではなく、北東から南西に流れるようである。

第2節 遺物の出土状況

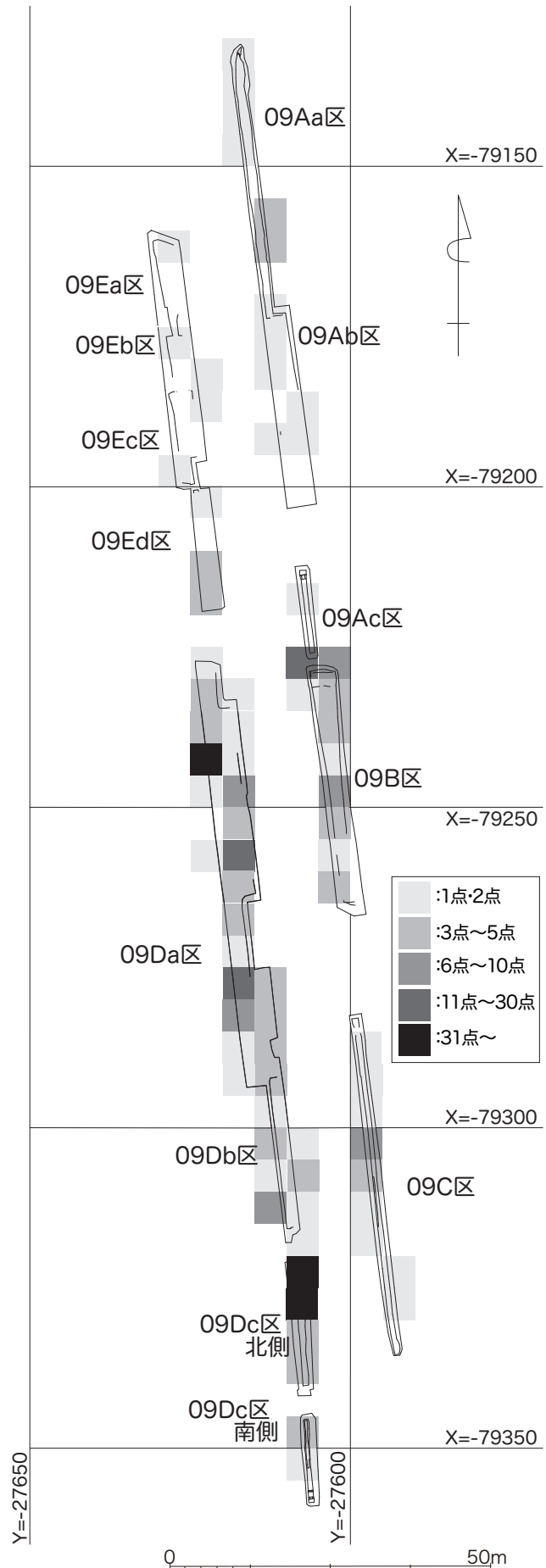
次に遺物の種類毎にみた出土状況を検討する。およその遺物の出土状況は、第3章出土遺物の項に述べたので、ここでは発掘調査において国土地座標に基づいて設定した 5m グリッド毎に取り上げた遺物を、種類毎に分類した破片点数をカウントした結果について述べる（第53図～第63図）。カウントした遺物点数は、遺物個々の残存状態を考慮していないので、およその傾向を示すものと考えられる。

(1) 古代の遺物（第53図～第55図）

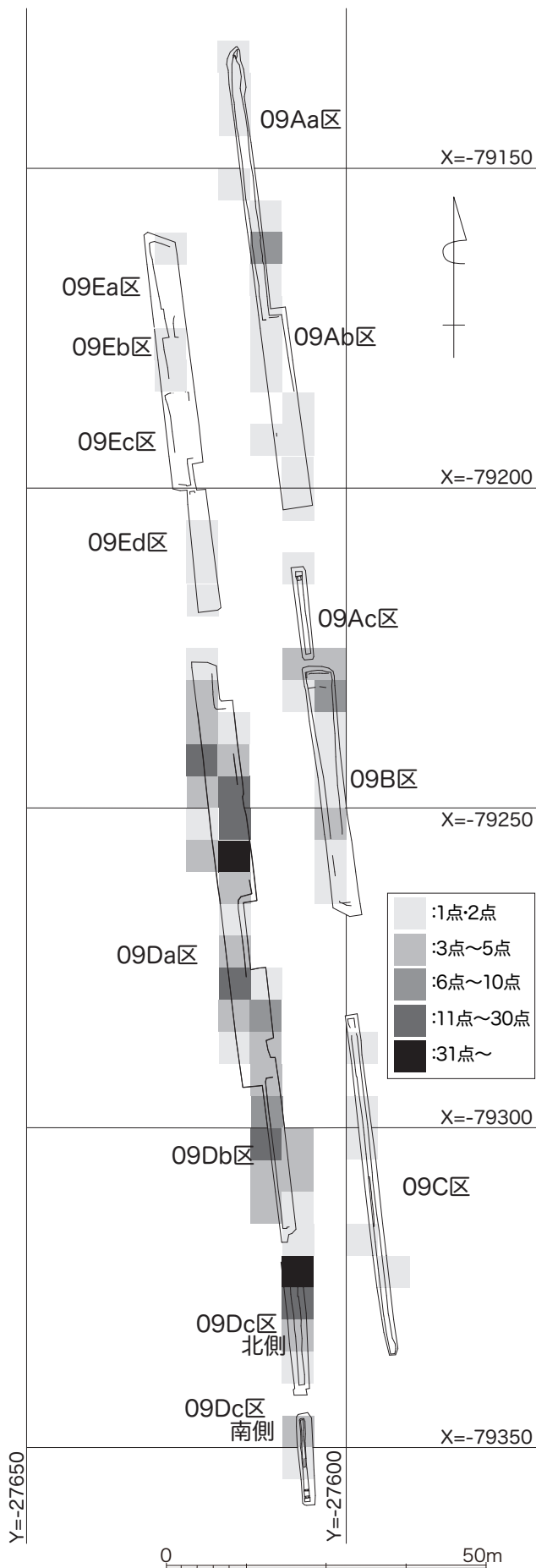
須恵器・古代土師器・灰釉陶器があり、およその出土分布は同様な傾向を示す。須恵器と古代土師器は多いが、灰釉陶器はやや少ない。

須恵器は全調査区に分布するが（第53図）、出土点数が3点を越える箇所は、09Aa 区南側・09B 区北端部と同区中央部・09C 区中央部・09Da 区全域から 09Db 区を経て 09Dc 区南側・09Ed 区南側にある。その中で、出土点数が6点を越える箇所は、09B 区北端部・09B 区中央部・09Da 区北側・09Da 区南側・09Db 区南端部から 09Dc 区北側の地点にある。須恵器の出土分布は、古代の遺構の見つかった範囲より広い範囲で見ついているが、出土点数が6点以上の多い地点と遺構の分布が対応するのは、09Da 区北側の竪穴建物がみついている地点のみである。

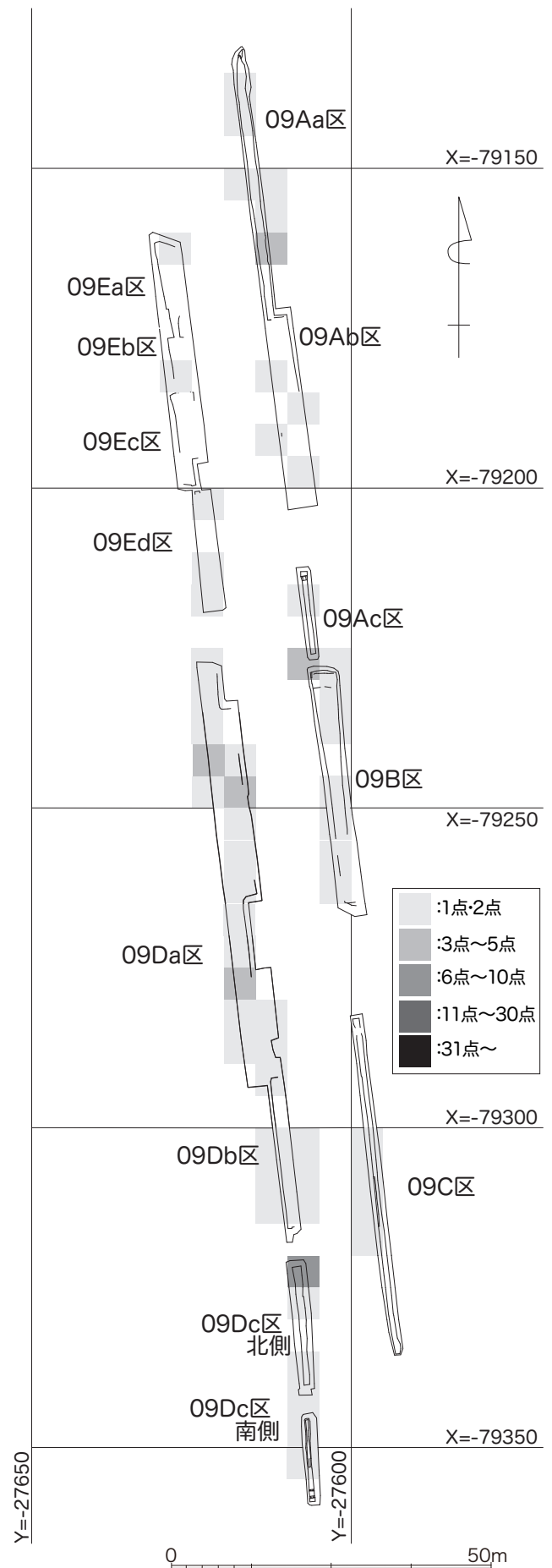
古代土師器も全調査区に分布し（第54図）、出土点数が6点を越える箇所は、09Aa 区南側・09B 区北端部・09B 区中央部・09Da 区全域から 09Db 区を経て 09Dc 区南側の地点がある。その中で、出土点数が11点を越える箇所は、09Da 区北側・09Da 区南側・09Db 区中央部・09Dc 区北側がある。古代土師器の出土分布は、古代の遺構の見つかった範囲より広い範囲で見つかった



第53図 須恵器の出土分布（1:1,000）



第 54 図 古代土師器の出土分布 (1:1,000)



第 55 図 灰釉陶器の出土分布 (1:1,000)

ているが、出土点数が6点以上の多い地点と遺構の分布が対応するのは、09Aa区南側の土坑が確認されている地点と09Da区北側の竪穴建物がみつまっている地点がある。

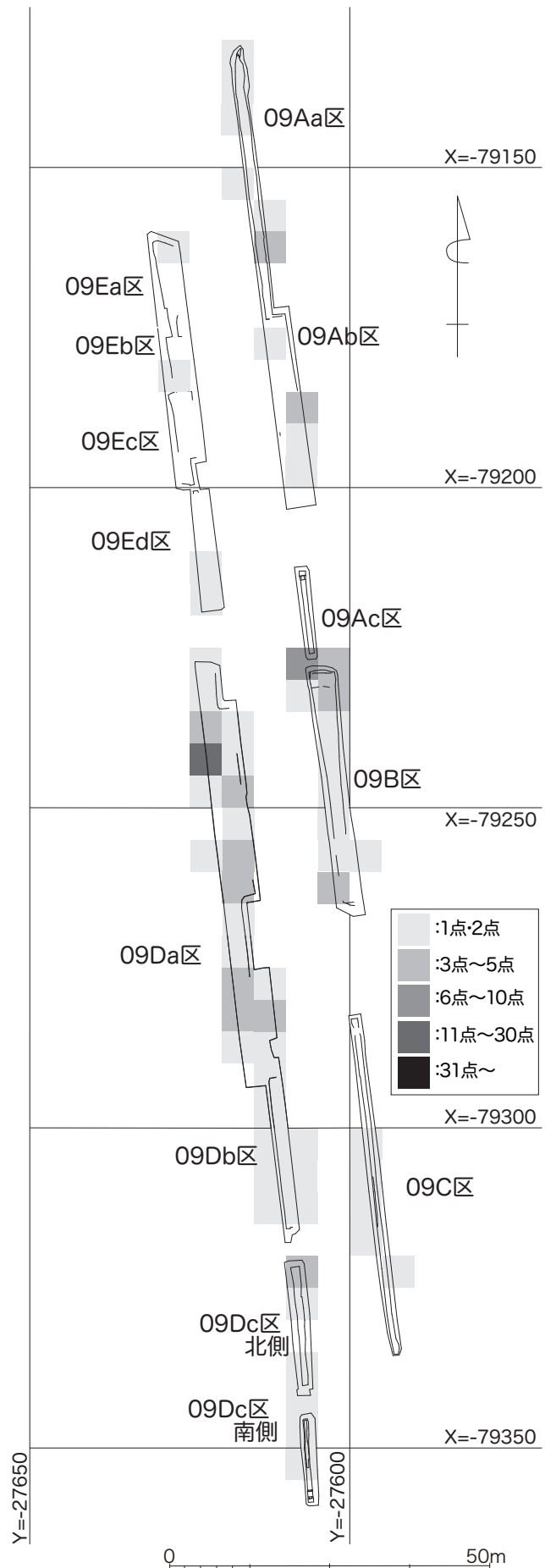
灰釉陶器も全調査区に分布するが（第55図）、須恵器や古代土師器に比べると出土点数が少ない。出土点数が3点を超える箇所は、09Aa区南側・09B区北端部・09Da区北側・09Da区南側・09Dc区北側北端部の地点がある。灰釉陶器の出土分布においても、古代の遺構の見つかった範囲より広い範囲で見つまっているが、出土点数が3点以上の地点と遺構の分布が対応するのは、09Aa区南側の土坑が確認されている地点と09Da区北側の竪穴建物がみつまっている地点がある。

（2）中世の遺物（第56図～第59図）

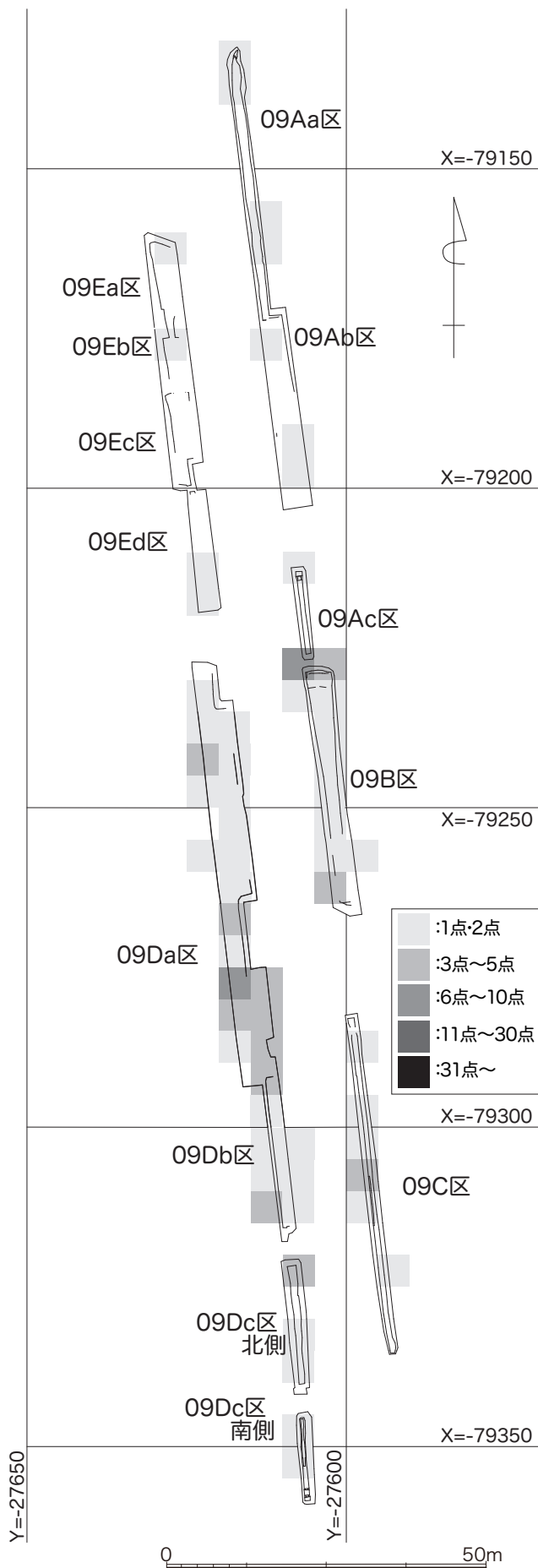
中世の遺物は続く戦国時代の遺物と時期が重なるものもあるが、ここではその主体の時期と考えられる南部系陶器・北部系陶器・中世土師器皿類・中世土師器鍋類について出土点数を検討する。中世の遺物は須恵器や古代土師器に比べると出土点数が少ない。

南部系陶器は全調査区に分布するが（第56図）、出土点数が3点を超える箇所は、09Aa区南側・09Ab区中央部・09B区北端部・09B区南端部・09Da区北側・09Da区南側・09Dc区北側北端部の地点がある。その中で、出土点数が6点を超える箇所は、09B区北端部・09Da区北側の地点がある。南部系陶器の出土分布は、中世の遺構の見つかった範囲より広い範囲で見つまっているが、出土点数が6点以上の多い地点と遺構の分布は対応していない。また、出土点数が3点以上の地点においても、遺構の分布と対応するのは09Da区北側の地点のみで、対応関係は少ないものと思われる。一方で、南部系陶器の出土分布は、戦国時代の溝や土坑などの遺構分布とほぼ対応している。

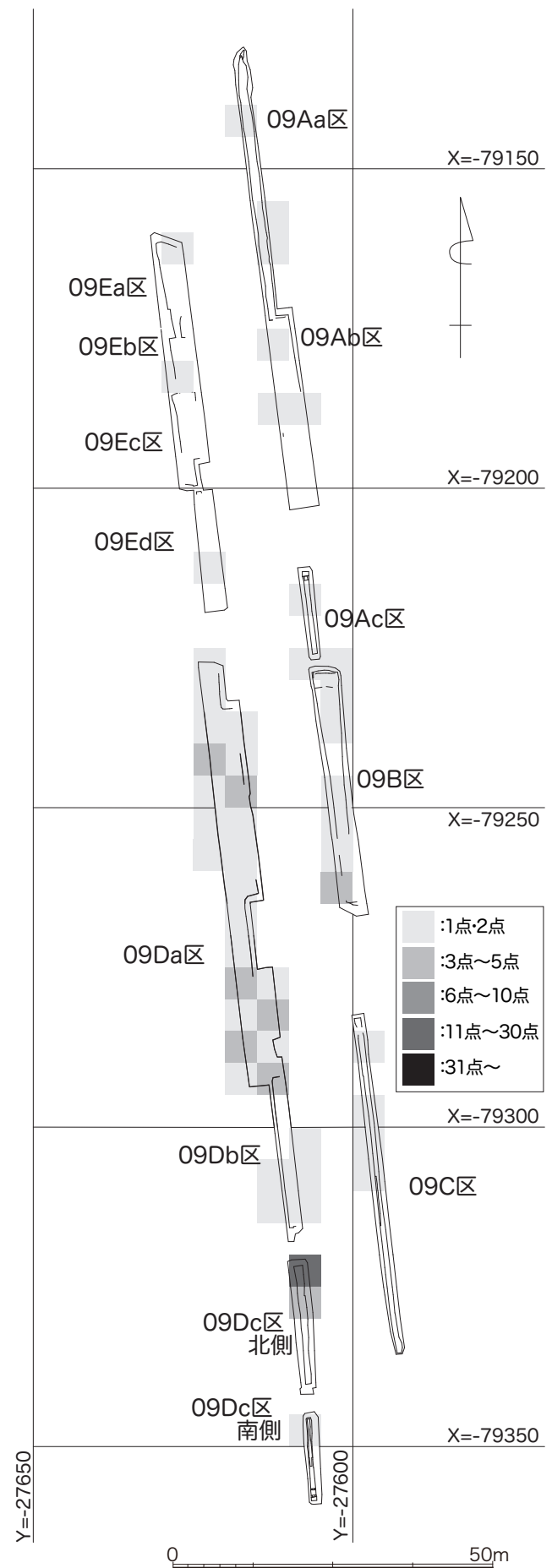
北部系陶器は全調査区に分布するが（第57図）、出土点数が3点を超える箇所は、09B区北端部・09B区南端部・09C区中央部・09Da区北側・09Da区中央部・09Da区南側と09Db区北端部・09Db区南端部と09Dc区北側北端部の地点がある。その中で、出土点数が6点を超える箇所は、09B区北端部・09Da区北側の地点がある。09Da区北側の地点は、09Da区中央部から続く範囲に出土点数が多い。北部系陶器の出土



第56図 南部系陶器の出土分布 (1:1,000)



第 57 図 北部系陶器の出土分布 (1:1,000)



第 58 図 中世土師器皿類の出土分布 (1:1,000)

分布は、中世の遺構の見つかった範囲より広い範囲で見つっているが、出土点数が6点以上の多い地点と遺構の分布は対応していない。また、出土点数が3点以上の地点では、09Da区中央部の地点が同区150SDと対応するのみで、全体に対応関係は少ないものと思われる。一方で、北部系陶器の出土分布は、続く戦国時代の溝や土坑などの遺構分布と強い対応関係がみられる。

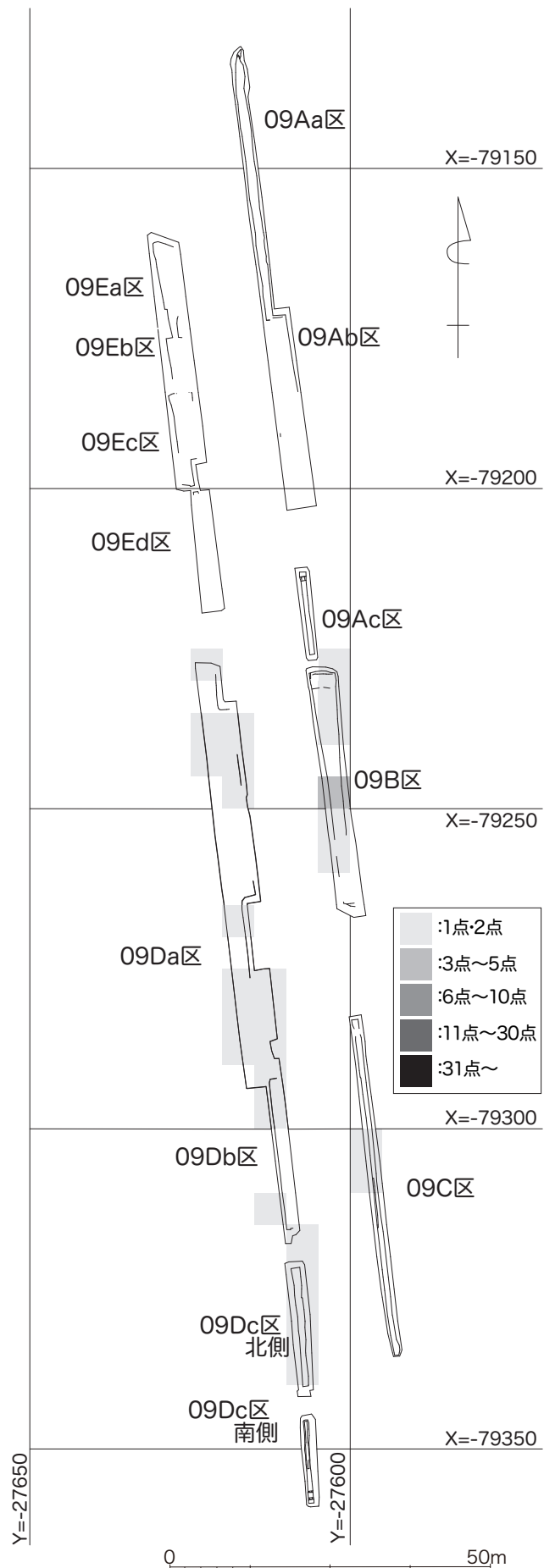
中世土師器皿類は全調査区に分布するが(第58図)、出土点数が3点を超える箇所は、09B区南端部・09Da区北側・09Da区南側・09Dc区北側北端部の地点がある。その中で、出土点数が11点を超える箇所は、09Dc区北側北端部の地点のみである。その出土分布は09Ab区南端部・09C区・09Da区北側・09Da区南側の地点を除いて、概ね中世の遺構のあり方と対応しているが、出土点数が3点以上の多い地点と遺構の分布は対応していない。一方で、中世の遺構とあり方と対応しない中世土師器皿類の出土分布は、続く戦国時代の遺構の分布とほぼ対応している。

中世土師器鍋類は出土点数が少なく(第59図)、09B区・09C区・09Da区・09Db区・09Dc区北側の調査区に分布する。この出土分布と中世の遺構との対応関係は強くなく、出土点数が3点を超える箇所は、09B区中央部の地点のみで、中世の遺構とは対応していない。むしろ続く戦国時代の遺構と対応関係がみられ、中世土師器鍋類の出土分布は戦国時代の遺構のあり方と対応関係がみられる。

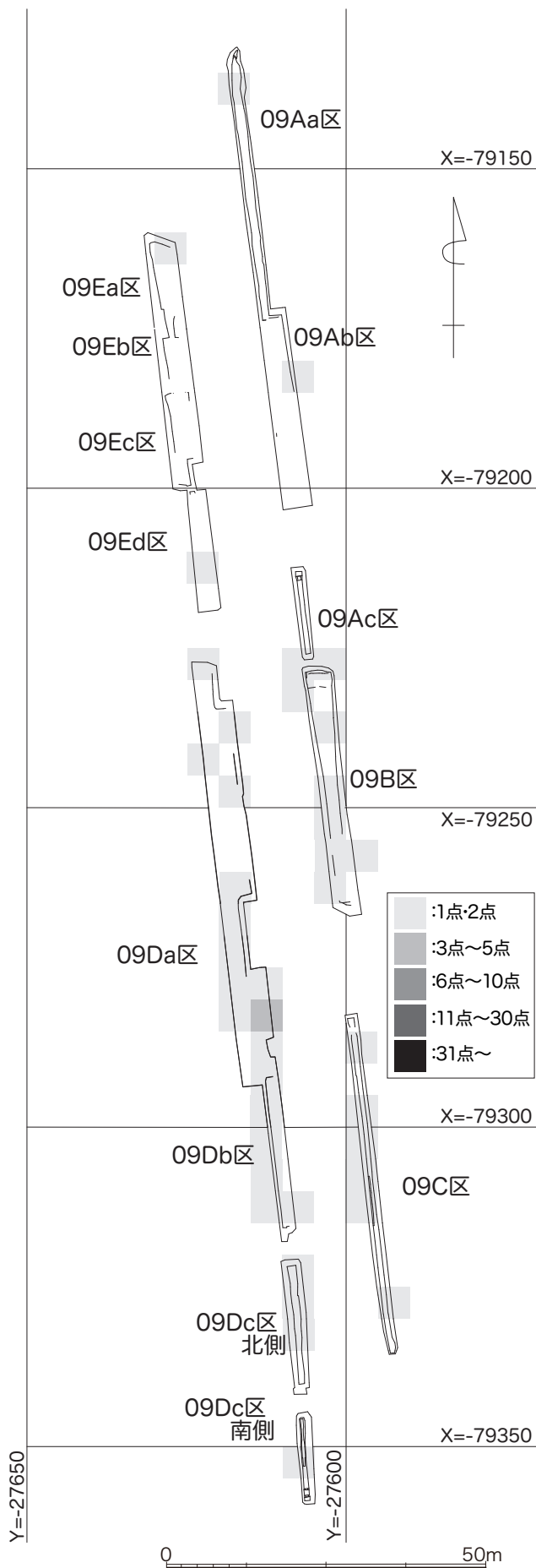
(3) 戦国時代の遺物(第60図～第62図)

戦国時代の遺物は先に述べた中世の遺物と時期が重なるものもあるが、ここではその主体の時期と考えられる古瀬戸陶器・大窯陶器・常滑産甕について出土点数を検討する。戦国時代の遺物は古代や中世の遺物に比べると出土点数が少ない。

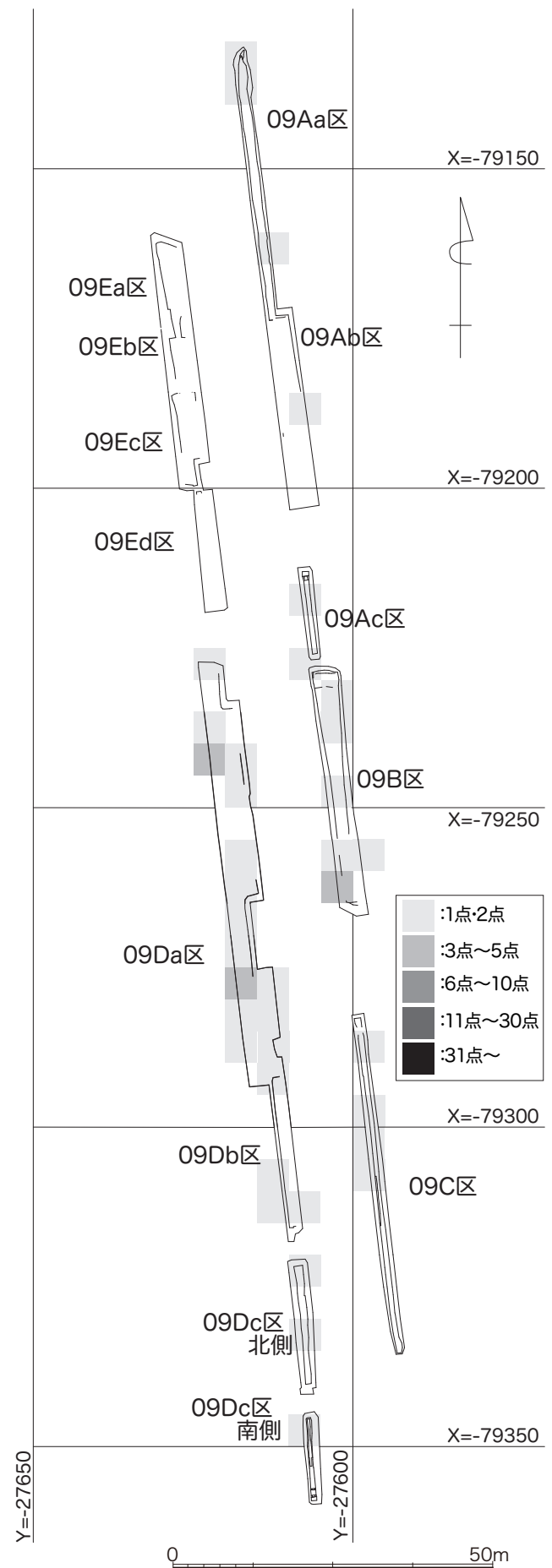
古瀬戸陶器は09Ac区・09Eb区・09Ec区を除いた調査区で出土しているが(第60図)、09Aa区・09Ab区・09Ea区・09Dc区南側では、各1地点のみ出土しているのみで、戦国時代の遺構と対応するものとしがないものが半分程ずつある。出土点数が3点を越える箇所は09Da区南側の1地点のみであるが、09B区・09C区・09Da区北側・09Da区中央部から南側と09Db区・



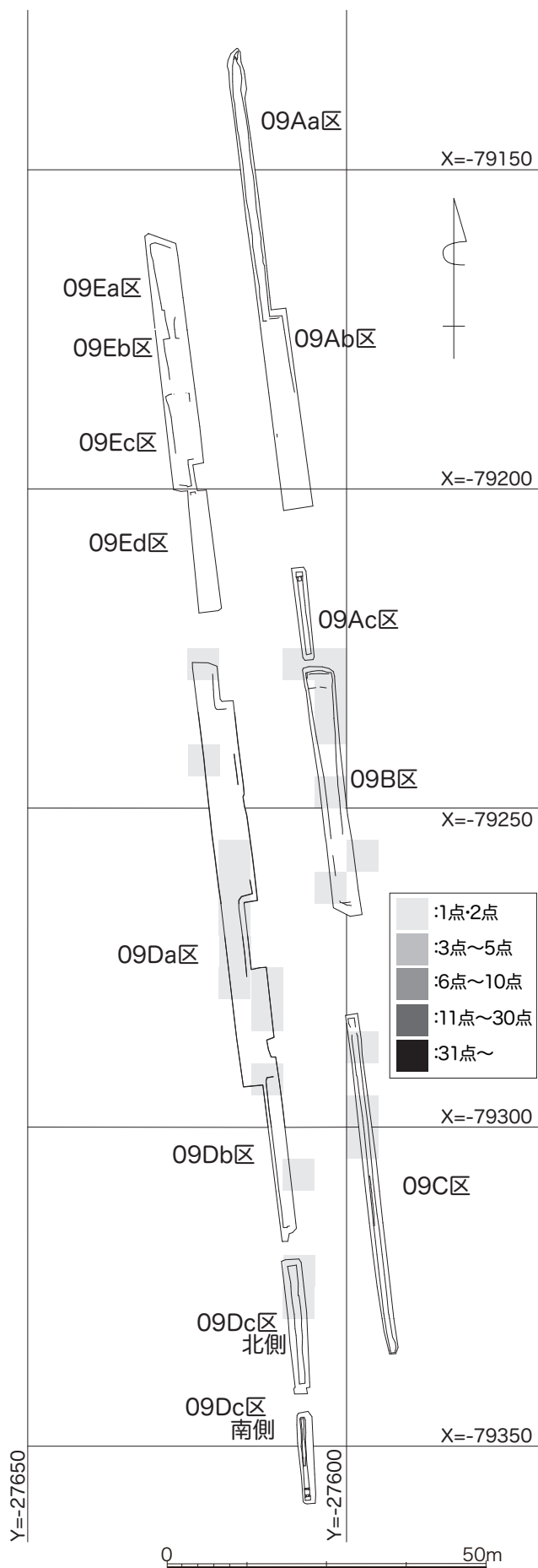
第59図 中世土師器鍋類の出土分布 (1:1,000)



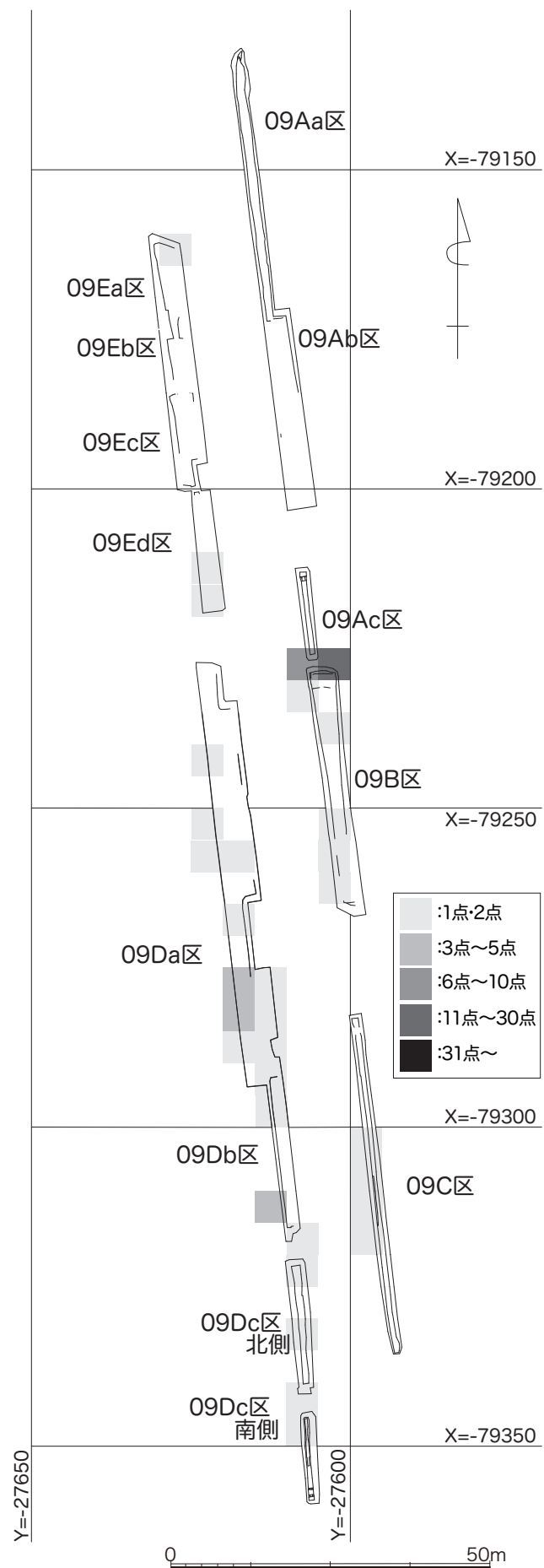
第 60 図 古瀬戸陶器の出土分布 (1:1,000)



第 61 図 大窯陶器の出土分布 (1:1,000)



第 62 図 常滑産甕の出土分布 (1:1,000)



第 63 図 近世陶磁器の出土分布 (1:1,000)

09Dc 区北側の地点は戦国時代の遺構のあり方とほぼ対応している。

大窯陶器は 09Ea 区～09Ed 区を除いた調査区で出土しているが（第 61 図）、09Aa 区・09Ab 区の出土地点は、孤立した分布を示している。出土点数が 3 点以上の箇所は、09B 区南端部・09Da 区北側・09Da 区南側の地点にあり、その周辺には出土分布の地点が多い。戦国時代の遺構の分布とは、ほぼ対応関係がある。しかし、古瀬戸陶器の出土分布と対応関係がみられた 09Ea 区・09Ed 区の遺構などとは対応関係がみられず、遺構の時期的変遷が反映されている可能性がある。

常滑産甕は出土点数が少なく、09B 区・09C 区・09Da 区・09Db 区・09Dc 区北側の調査区に分布する（第 62 図）。出土点数が 3 点を超える箇所はない。この出土分布は中世の遺構分布と 09Da 区北端部・09Da 区中央部・09Db 区において対応する可能性があるが、全体では戦国時代の遺構分布との対応関係がみられる。（4）江戸時代の遺物（第 63 図）

江戸時代の遺物は、近世の陶磁器と土師器があるが、近世の土師器は 09B 区の 2 点のみであるので、ここでは近世の陶磁器について出土点数を検討する。

近世陶磁器は、09Aa 区～09Ac 区を除いた調査区で出土しており（第 63 図）、出土点数が 3 点を越える箇所は、09B 区北端部・09Da 区南側・09Db 区南端部の地点がある。09B 区北端部の地点は、比較的標高の高い所から遺構掘削を行った為に、ほぼ全ての時代の種類の遺物が多数出土している。この堆積の原因は、耕作などに伴う溝などの埋没に求められ、ほぼ江戸時代以後の堆積である。江戸時代の遺構分布との関係は、09Da 区の区画溝 085SD や掘立柱建物 DaSB2 の柱穴から出土した遺物がごく一部反映しているが、その他の江戸時代の遺物は江戸時代後期以後のものが大半で、上面の水田遺構や溝、包含層として掘削した堆積などから出土した遺物を反映しているものと考えられる。

第 3 節 遺構と出土遺物の関係

最後に、下新田遺跡の各時期の遺構と出土遺物の関係から各時期の遺構の性格について若干考えたい。

古代の遺構は、奈良時代を中心とした小型竪穴建物

と少数の中型竪穴建物、土坑からなる居住域が 09Aa 区南端部から 09Ab 区、09Eb 区～09Ed 区、09Da 区北側の範囲に広がる様子がうかがわれる。古代の出土遺物の分布からは、09B 区や 09Da 区南側・09Db 区にかけて遺構が展開していた可能性があり、時期的にも 7 世紀後半から 10 世紀にかけてのものがみられる可能性がある。確認された遺構と出土遺物からは、古代の特別な性格を持つ要素はなく、一般的な集落と考えられる。

中世の遺構は、09Aa 区北側・09Ab 区南端部・09C 区南側・09Eb 区南端部・09Ec 南端部・09Da 区北端部・09Da 区中央部・09Db 区において区画溝と思われる溝や土坑が確認されている。これらの遺構から中世前半期の遺物は出土しているが、中世前半期に多い南部系陶器や北部系陶器の出土分布とはあまり対応関係はなく、続く戦国時代の遺物は含まれない。また戦国時代の遺構の分布とも広がり異なり、遺構の変遷としてある程度認められるものである。先に述べた溝の軸線の分析では、戦国時代の溝と同様な軸線をもつことから、戦国時代の土地の区画割りの軸線は中世前半まではさかのぼる可能性が高い。今回の発掘調査により確認された遺構と出土遺物からは、中世の特別な性格を持つ要素はみられず、一般的な性格をもつ居住域と畑地や水田などの生産域が混在する集落景観が広がるものと思われる。

戦国時代の遺構は、全調査区で確認されており、中世の遺構がない箇所にほぼ遺構がみられる。居住域と考えられるのは、中世の遺構の可能性もあるが、09Da 区北側にある DaSB1・DaSB2・DaSB4 の掘立柱建物・柱列と素掘り井戸の 09B 区 005SE、土坑で 09B 区にある 047SK・050SK・051SK、09Da 区の南側にある 152SK・160SK・229SK・230SK・217SK などがあげられ、09B 区から 09Da 区にかけて居住域であった可能性が高い。

一方で、居住域などを区画した溝は、先に述べたように中世の溝と同様に幅が 1.0m ～ 2.0m 程のものが主体であるが、09B 区南側にある 046SD は規模の大きいもので、やや大きい区画を囲む溝や水路のような性格が考えられる。また東西方向の溝で、09Aa 区南側にある 010SD と 013SD、09Ab 区中央部にある

101SD と 072SD は幅が 1.0m 前後の小規模な溝であるが、溝の中心間が 4m ～ 5m 前後で並行してのびており、2 本の並行する溝に囲まれた内側を東西方向の道が存在した可能性を指摘した。さらにこれらの南にある 09Ab 区 101SD も中世の溝とした 09Eb 区南端部にある 005SD・006SD に続く可能性があり、同様な道の溝になる可能性がある。

出土遺物では、喫茶を示す痕跡として同一個体の可能性がある石製茶臼の下臼が 2 点出土している。これらが出土した 09Da 区 138SD と 09Da 区 220SD (09Db 区 264SK を含む) は同時存在した可能性があり、南北を区切る区画 (南北幅約 25m) が想定される。そしてその区画の中では、喫茶などの営みが行われるような寺院などの施設が存在したものと考えたい。

よって下新田遺跡の北側に 2 本の並行する溝に挟まれた道があり、その南北に軸線が対応した溝で区切られた南北 25m ～ 30m 程の区画が東西に並ぶ景観が想定される。それらの区画の中でも、09B 区から 09Da 区にかけては、確認された遺構や出土遺物が多く、連綿とした営みが推定できる。その中で 09Da 区南側の区画では、寺院などの遺跡の中心的施設が存在したものと考えたい。

江戸時代の遺構で、18 世紀前半以前の可能性がある主面の遺構は、09Da 区の区画溝 085SD や掘立柱建物 DaSB2 があるのみで、09Da 区北側が居住域とする、その周辺は生産域などにあたるものと思われる。085SD の軸線が戦国時代の溝の軸線を踏襲しているが、掘立柱建物 DaSB2 の軸線がほぼ真北方向にある。これは現在の区画においても下新田遺跡の発掘調査区より西の地区の区画は、北北西から南南西に軸線が東にやや振れるが、東の地区の区画は、軸線が真北方向になることと関係するのであろうか。

次に上面で調査された遺構は、水田跡などの生産域の遺構であり、18 世紀後半以後の下新田遺跡の辺りは、岩倉村北西部の縁辺にあたる生産域である状況を示すものと思われる。

第4節 戦国時代の景観

以上の分析成果から、遺跡の中心の時期である平安

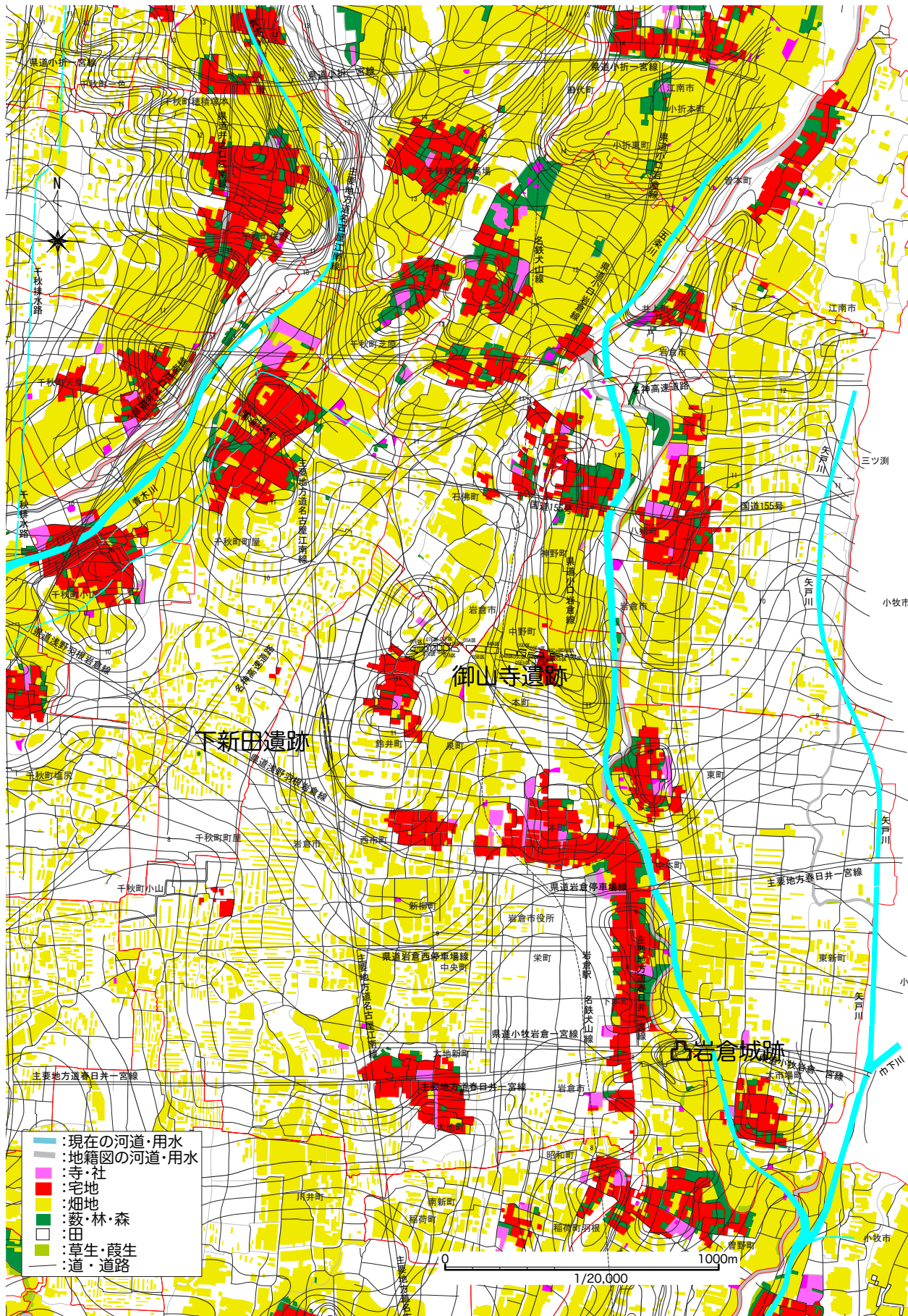
時代末から戦国時代にかけての下新田遺跡周辺の景観を考えてみたい。

まず、これまでに下新田遺跡周辺で発掘調査が行われた平安時代末から戦国時代にかけての遺跡には、南東 1.6km にある岩倉城跡、北東 0.7km にある御山寺遺跡がある。岩倉城跡では、遺構の規模や出土遺物の特徴、地籍図と遺構の対応関係から、二重にめぐる大溝に囲まれた方形区画を岩倉城跡の主郭に想定している。御山寺遺跡では、遺跡の西側と東側において、溝で囲まれた方形区画が多数確認されており、特に遺跡の東側において、東西にのびる大溝が 1 条確認されている。そして、遺跡の西側と東側の間には、古代から戦国時代まで流れていた自然流路が確認されている。

さて、下新田遺跡は岩倉城跡からは北西にやや離れた地点にあり、調査の当初は岩倉城跡とはあまり関係のない遺跡と思われた。しかし、今回の発掘調査により、戦国時代の遺物の出土点数は少ないものの、検出できた遺構の主要なものは、多くが戦国時代にあたる可能性が高いことが明らかとなり、西北西から東南東にのびる溝が複数並行してみつかり、その溝に対応する軸線をもった方形区画が存在した可能性が高いことが明らかになった。また 09Da 区で確認できた方形区画では、石製茶臼が使用され、喫茶などの営みが存在した可能性が高いものと思われた。

あらためて下新田遺跡と岩倉城跡の関係を考えた場合、岩倉城跡の報告では戦国時代の五条川が現在の五条川とほぼ同一の地点を流れていたと想定されてまとめられているが、御山寺遺跡で確認された戦国時代の自然流路は、幅 50m 前後の河川敷の中を流れる河道跡であったものと思われる。この御山寺遺跡の自然流路はかつての五条川の可能性が高いものであり、岩倉城跡の報告にある五条川の形態とは異なる形をしている。

次に第 64 図の下新田遺跡周辺の表層地形の等高線をみると、岩倉市石仏町の北側で、現在の五条川付近の神野町の東側を南にのびる東側の谷地形 (谷地形 1) と岩倉市鈴井町と岩倉市中野町の間に南西にのびる西側の谷地形 (谷地形 2) に分かれる。西側の谷地形 2 はさらに石仏町の中央付近で、一宮市千秋町町屋の東側を南西にのびる谷地形 (谷地形 2A) と鈴井町と中野町の間に南にのびて、岩倉市本町の西側を名鉄犬



第 64 図 下新田遺跡周辺の等高線図・地籍図

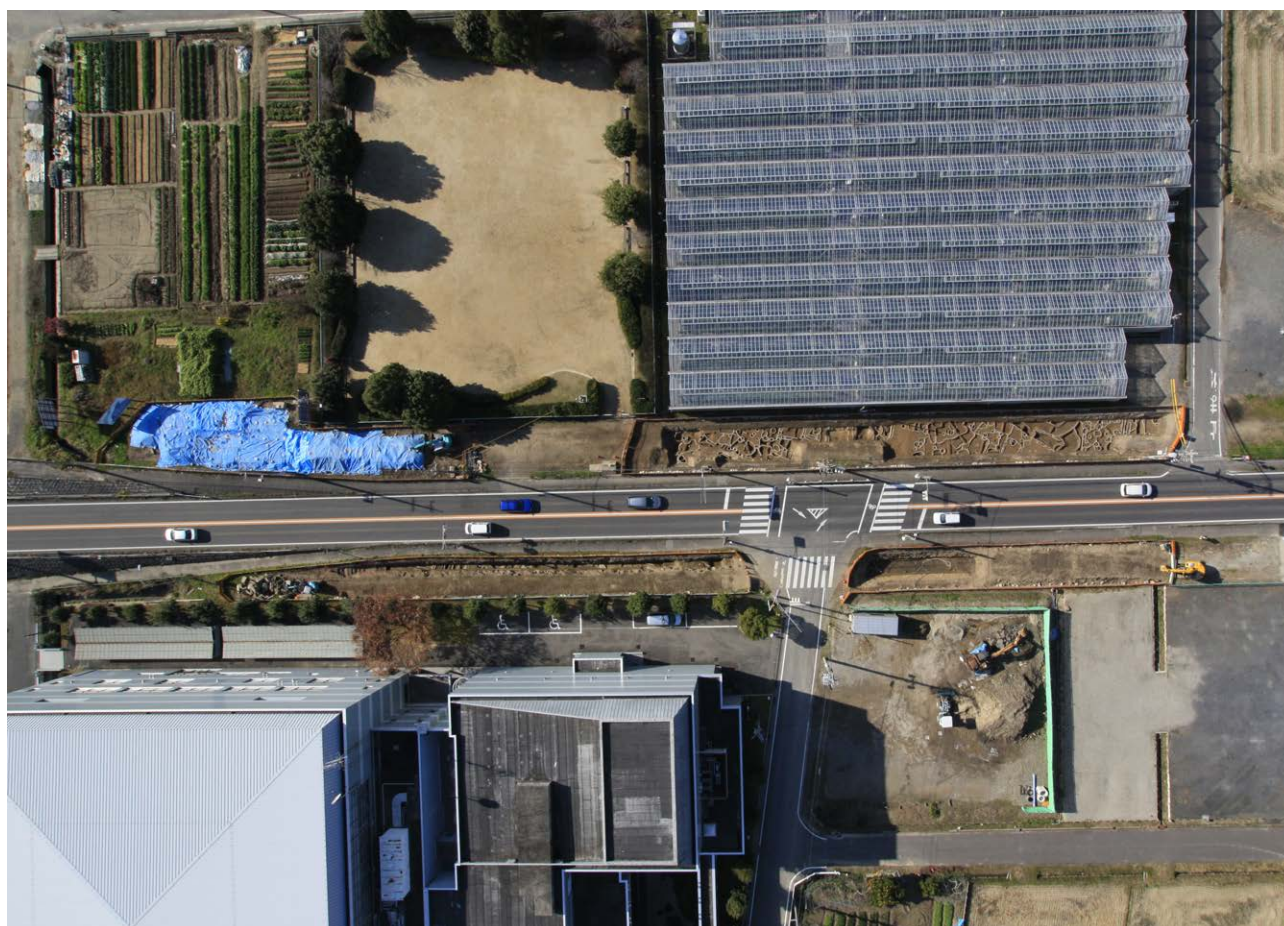
(1:20,000、表層地形の等高線図は鬼頭剛による作成、地籍図は蔭山誠一による作成)

山線に沿って南から南西方向にひろがる谷地形（谷地形 2B）に分かれる。これら 3 つの谷地形の内、谷地形 2B は御山寺遺跡の発掘調査により確認された古代から戦国時代にかけての河道跡にあたり、地籍図における低地部である水田域と対応する場所が多い。谷地形 1 は発掘調査による確認はできていないが、地籍図で表される現在の幼川（旧五条川）付近にある水田・草生域につながる谷地形であるので、谷地形 2B と同じく戦国時代の河道跡の可能性がある。そして谷地形 1 は、御山寺遺跡の南東にある岩倉市本町の中程の地点や県道岩倉停車場線がある部分、県道小牧岩倉一宮線のある岩倉城跡の北側で、西にある谷地形 2B に合流するものと南東側の東町にのびる谷地形になるものにそれぞれ分かれる。これらの谷地形 1 から南西と南東に枝分かれする谷地形は、南西に分かれて谷地形 2B につながるものの方が、地籍図にみられる低地部である水田域の分布とも対応しており、谷地形 2B と同時存在した可能性も高い。

よって下新田遺跡の立地する石仏町から鈴井町にのびる微高地と御山寺遺跡や岩倉城跡の立地する中野町から本町をとおり、大市場町にいたる微高地の間には、古代から戦国時代にかけての河道が存在した可能性が高いものと考えられる。このように戦国時代の地形を考えると、現在の岩倉市の地名には、「東町」・「西市町」・「大市場町」のようなかつての市場由来の地名が残っており、下新田遺跡の南東に「西市町」があるのは示唆的である。下新田遺跡でみられた西北西から東南東にのびる溝の延長に「西市町」があり、「西市町」の市が戦国時代のものであるか明らかにできていないが、これまでの地形の復元から、戦国時代の下新田遺跡の遺構が、岩倉城跡の西を流れる河道をはさんで存在した集落（町並み）であったものと考えられるのである。

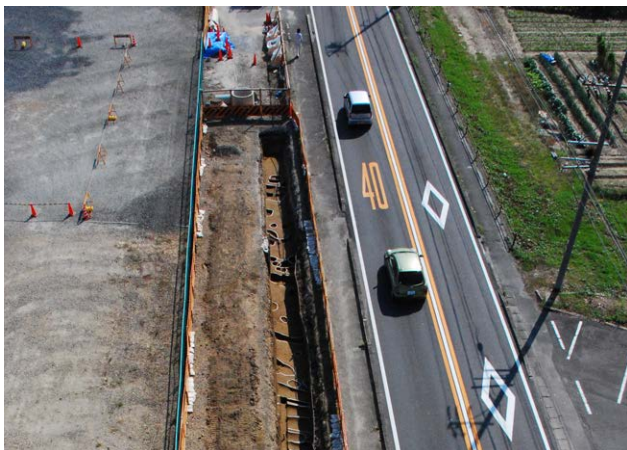


下新田遺跡全景（北より）



09B 区南側・09C 区・09Da 区全景（上空より）

写真図版 2



09Aa 区全景（北より）



09Aa 区 010SD（南より）



09Aa 区 013SD（東より）



09Aa 区 013SD・019SD 付近（東より）



09Aa 区 030SD・047SD～050SD 付近(東より)



09Aa 区 035SD・040SD・041SD（東より）



09Aa 区 052SD（西より）



09Aa 区 022SK（北東より）



09Ab 区全景（北より）



09Ab 区 059SD・060SK・065SD 付近(南より)



09Ab 区 115SK 獣骨出土状況（南東より）



09Ab 区 115SK 獣骨出土状況（南東より）



09Ab 区 072SD・101SD 付近（上より）

写真図版 4



09Ac 区上面全景（北より）



09Ac 区下面全景（北より）



09B 区全景（北より）



09B 区 010SD・025SD・027SK 付近(上より)



09B 区 004SD・005SE・047SK 付近(上より)



09B 区 010SD（南西より）



09B 区 027SK（南西より）



09B 区 006SD 断面（東より）



09B 区 005SE (南より)



09B 区 048SK (西より)



09B 区南側 046SD・050SK・051SK (南東より)



09B 区南側 046SD (北東より)



09C 区 010SD・012SD 付近 (南東より)



09C 区 006SD ～ 009SD 付近 (南東より)



09C 区 018NR (南東より)



09C 区 019SD (南東より)

写真図版 6



09C 区 020SD (南東より)



09C 区 013SK (南東より)



09Da 区北端部上面 (北より)



09Da 区 044SD・047SD (北東より)



09Da 区 085SD～090SD・091SK (北東より)



09Da 区 138SD (南西より)



09Da 区南側 (北より)



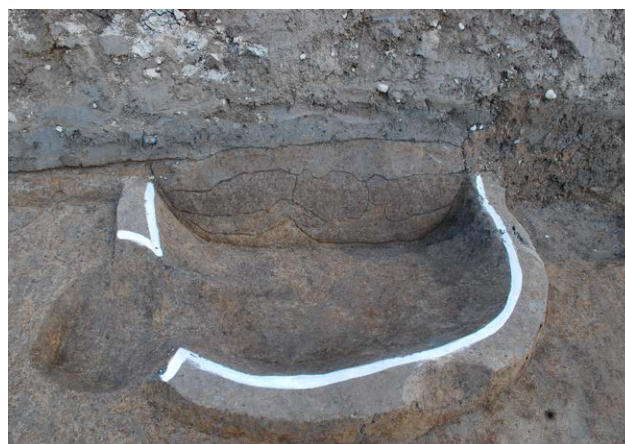
09Da 区 220SD (東より)



09Da 区中央部竪穴建物跡群と柱列跡（南東より）



09Da 区 115SK（西より）



09Da 区 108SK（西より）



09Da 区 036SK（西より）



09Da 区 037SK（西より）

写真図版 8



09Da 区 101SI・107SI・118SI 付近 (北東より)



09Da 区 027SI・038SI (北東より)



09Da 区 026SI の土層断面 (南より)



09Da 区 018SI・107SI・037SK 付近 (北東より)



09Da 区 209SD・217SK・220SD (東より)



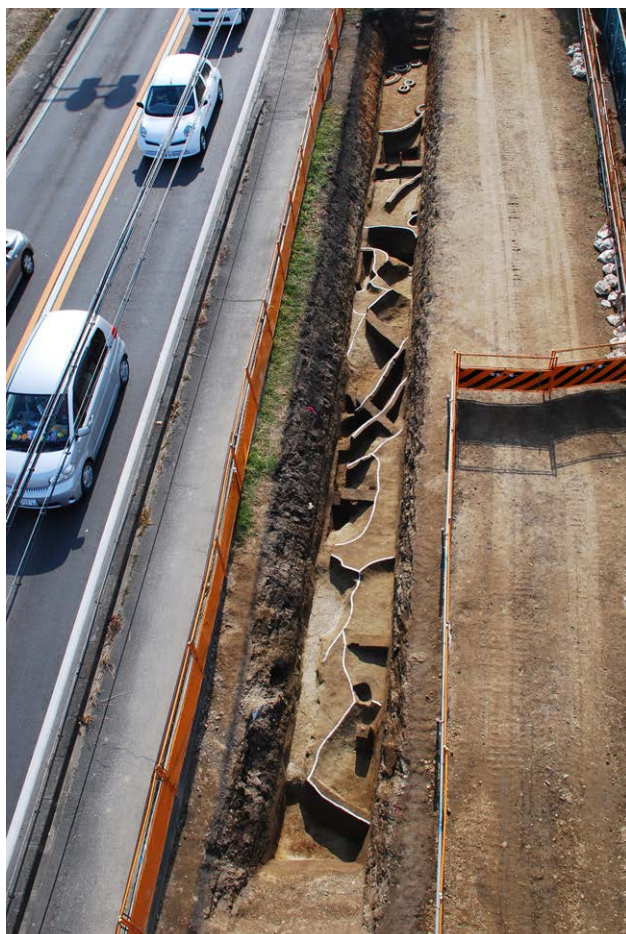
09Da 区 200SK・201SK・203SK (南西より)



09Da 区 164SD・209SD (北より)



09Da 区 209SD 出土弥生土器 (南より)



09Db 区全景（北より）



09Db 区 268SD・269SD・282SD（北東より）



09Dc 北区・南区全景（北西より）



09Dc 北区 303SD・304SD（南西より）



09Dc 北区 303SD 土師器出土状況（南西より）



09Dc 北区 305NR（南より）

写真図版 10



09Ea 区遺構検出状況（南東より）



09Ea 区 001SD・002SD（南東より）



09Eb 区 005SD・007SD 付近（南西より）



09Ec 区 012Si・013SK・014SD（東より）



09Ed 区全景（南より）



09Ed 区 027SD・029SD・030SD 付近(南より)



09Ed 区 026SK・033SD・053SD（東より）



09Ed 区 034SK・035SI・040SI（南西より）



古代の土師器・須恵器・製塩土器



中世から戦国時代の陶器・土師器・茶臼



E013



E025



E026



S001



E035



S010



E044



E063



E081



E085



E087



E089



E093



E099



E100



M004



E111



E113

写真図版 14



E114



E122



E130



E131



E136



E137



E138



E140



E141



E142



E143



E149



E153



E158



E164



E165



E166



E167



E171



M005



E179



E182



E183



E184



E186



E201



E203



E205



E215



M006



S009



E211



E212



E216



E219



E224

写真図版 16



E233



E235



E250



M001



E256



E257



E258



S008 上面



S008 下面



M003



E262



E268



S016



E282



E284



E286



E289



E290



E299



E310



E311



E312



E315



E315



E319



E320



E324



E330



E338



E341



E342



E345



E347



E349



E365



E366

写真図版 18



E371



E372



E374



E376



E377



E379



E383



E027



E159



E244

土錘



E049



E148



E150



E190



E194



E196



E269



E340



E369



E378



E380



E390

製塩土器

抄 録

ふりがな	しもしんでんいせき							
書 名	下新田遺跡							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第198集							
編著者名	蔭山誠一・鬼頭 剛							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2015年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
しもしんでんいせき 下新田遺跡	あいちけん いわくらし 愛知県岩倉市 すずいちょうあざしもしんでん 鈴井町字下新田	23228	110052	35度 17分 17秒	136度 51分 46秒	2009.10.11～ 2010.2.16	2,100㎡	緊急地方 道路整備 事業(主) 名古屋江 南線建設 に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
下新田遺跡	集落	奈良時代、 鎌倉時代、 室町時代、 戦国時代、 江戸時代	竪穴建物跡22棟、 掘立柱建物1棟、 柱列2基、溝66条、 土坑27基、井戸1基、 自然流路1条		須恵器、土師器、 製塩土器、灰釉陶器、 南部系陶器、古瀬戸陶器、 大窯陶器、中世土師器、 常滑産甕、近世陶磁器、 石製茶臼、石鏝		遺構・遺物の中心は、 奈良時代と室町時代 ～戦国時代にあり、 戦国時代の遺構は岩 倉城跡に併存する時 期のものである。	
文書番号	発掘届出(21埋セ第56号・2009.8.20) 通知(21教生第1162号・2009.8.25) 終了届・発見届・保管証(21埋セ第116号・2010.2.25) 認定(21教生第2717号・2010.3.29)							
要約	本遺跡は、白鳳時代から江戸時代にかけての複合遺跡で、奈良時代の竪穴建物跡を主体とす居住域が広がる時期と平安時代末～戦国時代の掘立柱建物・柱列・溝・土坑・井戸からなる居住域が広がる時期に遺跡の中心がみられる。特に戦国時代の遺構は、遺跡の南東にある岩倉城跡と併存するものであり、石製茶臼の出土にみられる喫茶などが営まれる施設が存在が想定される。今後の岩倉地域における城館跡と集落の関係を解明する上で、貴重な資料になるものと思われる。							

目次

終了

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 198 集

下新田遺跡

2015 年 3 月 31 日

編集・発行 公益財団法人 愛知県教育・
スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社

目次

終了